

日 本 体 育 学 会
体育心理学専門分科会会報

第16号 (通卷第44号)

体育心理学専門分科会

2004年8月発行

日本体育学会体育心理学専門分科会会則

- 第1条 本会は、日本体育学会 体育心理学専門分科会と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行う。
(1) 研究会の開催
(2) 会報の発行
(3) 会員の研究に資する国内、国外の情報の収集と紹介
(4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
(1) 会長 1名
(2) 理事 12名
(3) 監事 2名
- 第6条 役員を選出は、次の方法で行う。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
(1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
(2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
(3) 理事長は、理事の単記無記名投票による最多得票者とする。
(4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事をもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
(1) 役員を選出
(2) 事業報告および収支決算
(3) 事業計画および収支予算
(4) 会則の改正
(5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会計年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門分科会総会までとする。
- 附則 1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定する。
2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
3. この会則は、平成14年10月13日から施行する。

体育心理学専門分科会の役員（敬称略）

任 期：平成15年4月1日～平成17年3月31日

会 長：杉原 隆

理事長：西田 保

理 事：学会大会委員会（○阿江美恵子，土屋裕睦，橋本公雄）

企画委員会（○荒木雅信，岡沢祥訓，鈴木 壮）

広報委員会（○和田 尚，工藤孝幾，竹中晃二）

庶務・会計委員会（○山本裕二，竹之内隆志） ○：委員長

監 事：寺田邦昭，石垣尚男

はじめに

日本体育学会体育心理学専門分科会
事務局代表 西田 保（名古屋大学）

名古屋大学が事務局を引き受けて、4年が経過しようとしています。「シドニーからアテネまで」の期限付きでしたので、今年の体育学会（信州大学）でバトンタッチすることになります。途中棄権せずに完走間近までたどり着けたのは、会員の皆様のご理解とご協力の賜物と厚く感謝しております。

この4年間、本専門分科会独自の関連業務や、学会本部とのパイプ役としての任務を果たして参りました。また、2003年度からは、専門分科会活動の活性化に向けた「新制度」をスタートさせ、運営組織の名称もこれまでの運営委員会から理事会へと変更し、委員会制度を導入しました。

今年の体育学会では、「学会大会委員会」を中心として検討されたシンポジウムおよびキーノートレクチャーが計画されています。会報の編集を主業務とする「広報委員会」は、今回の会報から実質的な編集作業に取り組み、事務局との合同制作で会報を作成しました。また、専門分科会独自の活動を計画する「企画委員会」では、体育学会の前日にプレセミナーを開催する運びとなりました。その詳細は、VII. 日本体育学会第55回大会案内に記載しましたので、ご参照の上、多数ご参加下さいますようお願い致します。

新しい制度が定着するにつれて、庶務および会計の業務は残るものの、事務局の仕事はかなり軽減されてきました。これにより、今年の専門分科会総会で決定される次期事務局へは、なるべく負担の少ない状態でバトンタッチできることと思います。新事務局の方々、よろしくお願い致します。

体育学の分化や専門化が急速に進み、学会発表数が減少してきたことを契機として、体育学会が大きな「曲がり角」に差しかかっています。また、専門分科会の存在意義も同時に問われています。これらの問題に対して、スポーツ心理学会との「共有性」「独自性」を視野に入れながら、体育学会における専門分科会の位置づけを明確にしていく必要性を感じています。

最後になりましたが、本会報の発刊におきましては、多くの方々にご協力を頂きました。事務局を代表して厚く感謝申し上げます。また、会員の皆様には、今後とも専門分科会活動に積極的にご協力頂きますよう重ねてお願い申し上げます。

平成16年7月7日

目 次

はじめに	西田 保 (名古屋大学)	i
目次		iii
I. 巻頭言		
ふたたび“曲がり角”	杉原 隆 (東京学芸大学)	3
II. 特別寄稿		
イメージトレーニング再考	猪俣公宏 (中京大学)	7
脳科学と力学系を運動学習する	平田智秋 (理化学研究所)	10
III. 日本体育学会第 54 回大会関連		
1. キーノートレクチャー 1		17
テーマ：体育・スポーツ心理学研究と UK 法		
演 者：船越正康 (大阪教育大学)	司 会：杉原 隆 (東京学芸大学)	
発表抄録		17
演者報告		18
傍聴記	高柳茂美 (九州大学)	19
2. キーノートレクチャー 2		20
テーマ：子どもにおける身体活動量増強のための行動科学的アプローチ		
トランスセオレティカル・モデルを基に		
演 者：上地広昭 (早稲田大学)	司 会：堤 俊彦 (近畿福祉大学)	
発表抄録		20
演者報告		21
傍聴記	土屋裕睦 (大阪体育大学)	22
3. シンポジウム		23
テーマ：スポーツとコミュニケーション — 身体とことばをつなぐスキルトレーニング —		
司 会：橋本公雄 (九州大学)		
演 者：柳 敏晴 (鹿屋体育大学), 吉澤洋二 (名古屋経済大学), 杉山佳生 (九州大学)		
発表抄録		23
司会報告		27
傍聴記	鈴木 壯 (岐阜大学)	29
	石倉忠夫 (同志社大学)	30
4. 一般研究発表		31
口頭発表演題一覧		31
口頭発表傍聴記		34
賀川昌明 (鳴門教育大学)		34
中村祥子 (名古屋大学大学院)		35
波倉崇行 (新潟工科大学)		36
ポスター発表演題一覧		37
ポスター発表傍聴記		41
若山裕晃 (中京大学)		41
山田秀樹 (北海道東海大学)		42
内田若希 (九州大学大学院)		43
水落文夫 (日本大学)		44

5. 学会参加記	45
高井和夫 (筑波大学)	45
吉田伊津美 (福岡教育大学)	46
堀井大輔 (成安造形大学)	47
IV. 研究会の活動報告・参加記	
第6回スポーツ社会心理学研究会	西田順一 (福岡大学) 51
第13回臨床スポーツ心理研究会	上野耕平 (鳥取大学) 52
スポーツ動作法研究会活動報告	飯嶋正博 (順天堂大学) 53
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会の活動報告	高妻容一 (東海大学) 54
第13回運動学習研究会報告	筒井清次郎 (愛知教育大学) 55
V. 学位論文の紹介	
自己決定理論を用いた運動継続の予測と説明	松本裕史 (武庫川女子大学) 59
スポーツ選手の競技引退に関する研究	大場ゆかり (早稲田大学) 62
中学生サッカー選手におけるストレスの構造分析	加藤 久 (沖縄かりゆしフットボールクラブ) 64
摂食問題を抱えた競技者の心理的背景としての身体	山崎史恵 (鹿屋体育大学研究生) 68
VI. 海外情報	
2002年国際応用スポーツ心理学会 (AAASP) と 2003年アジア南太平洋スポーツ心理学会 (ASPASP) に参加して	遠藤俊郎 (山梨大学) 73
ベイラー大学遊学記	内田若希 (九州大学大学院) 76
NASPSPA 2004 Conference に参加して	石倉忠夫 (同志社大学) 78
香港運動心理學會設立：今、香港のスポーツ心理学が熱い!?	杉山喜一 (北海道教育大学旭川校) 80
国際スポーツ心理学会 (ISSP) 関連情報	近藤明彦 (慶應義塾大学) 82
VII. 日本体育学会第55回大会案内	
1. 日本体育学会第55回大会 (信州大学) の内容	87
2. プレセミナー	89
テーマ：少年期の運動経験がこころの発達に及ぼす影響	
話題提供者：城後 豊 (北海道教育大学) 司 会：和田 尚 (京都教育大学)	
指定討論者：山本裕二 (名古屋大学), 兄井 彰 (福岡教育大学)	
3. シンポジウム	91
テーマ：こころの成長・発達と身体活動 —これからの体育の課題—	
司 会：阿江美恵子 (東京女子体育大学), 土屋裕睦 (大阪体育大学)	
演 者：生田香明 (大阪大学), 吉田伊津美 (福岡教育大学), 平井タカネ (奈良女子大学)	
VIII. 事務局報告	
1. 平成15年度事業報告	97
2. 速報	102
3. 平成15年度決算および平成16年度予算案	103
編集後記	

I. 卷頭言

ふたたび“曲がり角”

日本体育学会体育心理学専門分科会
会長 杉原 隆（東京学芸大学）

昨年の会報で“曲がり角”という表題のもと、日本体育学会としての研究活動・学会大会のあり方について直面する問題を指摘し提言をしました。体育学・スポーツ科学の分化は各独立学会に委ね、体育学会は各専門分科会（学問領域）が緊密な情報交換を行い協力して総合化に向けて力を注ぐ必要があるのではないかという指摘でした。

日本体育学会は研究面だけでなく、このこととも密接に関係する組織上の“曲がり角”にも直面しています。具体的にいうと、新しい専門分科会の設立と支部組織の再編問題です。

去る4月、「アダプテッド・スポーツ科学」専門分科会新設の申請が出されました。皆さんご承知のように、体育学会には現在13の専門分科会があります。この中で最も新しいのは、昭和63年に設立されたスポーツ人類学、その次に新しいのは昭和53年に設立された体育科教育学です。その後、舞踊学専門分科会設立の申請がなされましたが、平成6年の総会において否決されています。

否決された主な理由は、おおきく言って二つあったと思います。ひとつは、専門分科会は独自の研究方法と研究内容を持つ学問で構成されているが、舞踊は研究対象なので、これを認めると研究対象別の分科会が次々と申請される恐れがあるというものです。もうひとつは、体育学の体系・分化の原理を明確にしてからその基準にしたがって判断すべきであるが、それについて議論がなされておらず、時期尚早であるという意見です。

一方、日本学術会議の体育学・スポーツ科学研究連絡委員会には現在33団体（独立学会）が登録されており、そのなかにはランニング学会、日本スキー学会、日本ゴルフ学会などなど舞踊と同じ研究対象による学問領域もたくさん含まれています。このような方向性からすると、現在はその分科会はないので他の分科会で発表しているという研究の数や発起人の数などについての基準を決めて、それを満たせばどんどん設立を認めていってよいのではないかという考え方もあると思います。

専門分科会の構成を伝統的な学問領域を基準に考えるか、研究対象も含めて柔軟に考えるかは、学会そのものの性格と密接に関係する基本的な問題です。後者のように考えれば、専門分科会は独立学会として位置づけられるようになり、日本体育学会はそれら独立学会を取りまとめて統括する連合体というようにその性格を変えていくことになるでしょう。体育学・スポーツ科学の総合化を目指すという意味では、体育学会をこのよ

うな性格の学会にしたほうが好都合だという考え方も成り立つでしょう。

さらに、もうひとつの組織上の問題に、支部の再編問題があります。支部は代議員選出の単位になっていますが、最も会員数の多い東京支部では451名について1人、最も少ない高知支部は21名に1人と、1票の格差が実に20倍を超えています。この格差の問題、特に規模の小さい支部の問題点は代議員選出の不公平にとどまりません。法人化された体育学会は研究活動だけでなく、研究成果の社会への還元、社会貢献が求められています。この活動の基盤となるのが支部であり、そのために支部活動の活性化が急務となっています。しかし、あまり支部の規模が小さいとこのような活動が十分行えないこととなります。事実、規模の小さい一部の支部ではほとんど活動が行われておらず、代議員の選出のための選挙でさえ支障をきたしているのが現状です。一票の格差を小さくし、支部活動を活性化させるための支部の再編が急がれます。

このような状況を受け、理事会では特別委員会を立ち上げ、会員の意見の集約を図ることを決定しました。会員諸氏の積極的な提言を期待しています。

平成 16 年 6 月 22 日

II. 特別寄稿

特別寄稿 1

イメージトレーニング再考

猪俣公宏（中京大学）

1. はじめに

1985年以来17年間にわたる日本体育協会スポーツ医科学委員会におけるメンタルマネジメント研究プロジェクトで数々のメンタルトレーニング技法が取り上げられ、実際にそれらがトップレベルを中心とした競技者に実施されたり、また科学的な手法によって効果的な方法を探索するための基礎的研究が積み重ねられてきた。このようなプロジェクト進行のプロセスの中で、もっとも注目されてきたトレーニングの方法の一つとして、いわゆる“イメージトレーニング(以下ITと呼ぶ)”をあげることができる。因みに、各オリンピック大会後に参加選手に実施された心理調査(猪俣ら、1992)の結果を見ると、毎回同じように回答した選手の中で約90%の者がこの方法を取り入れ、利用していたことがわかる。Washburn(1916)が自己の運動をイメージしたときに微細な筋運動(顕在化しない程度の)が生じていることなどを仮説としてトレーニング効果を説いて以来、およそ1世紀が経過し、この間、Jacobsonの筋電図によるイメージ中の微細な筋活動の記録、勝部らによるGSRを手がかりとした研究、イメージ中の脳波に関する研究、また実際のスポーツ技能を取り上げた行動的レベルでの研究など研究報告は枚挙に暇がないほど数多い。しかし、残念ながらこれらの研究がITの方法の改善、あるいは体系化にどれほど役立てられたかについては、はなはだ疑問であるといわざるをえない。実際、先のプロジェクトに関

与した選手が最終的に採用していた方法は1部の例外的な事例を除いて、ほとんど彼らの経験に基づく、未組織的なものであったといっても過言ではないだろう。むしろ、逆に、そのような経験的な方法の中にわれわれが目すべき手法が見出されたことさえあった。

しかしながら、この10年間の基礎的研究分野(例えば、認知神経科学、運動学習や制御分野など)における“運動イメージ”あるいは“認知的シミュレーション”等に関連した研究への関心や発展は目ざましく、ようやくこの数年間にスポーツにおけるイメージ問題の解決にも手がかりが得られるような段階になってきたといえよう。

そこでこのレクチャーにおいては筆者がかかわったこれまでの研究や実践を踏まえながら、また基礎的研究分野の成果を展望しながら現在のITにおける理論的な問題、実施方法に関する問題について取り上げ、それらの解決にむけて、一つの考え方をまとめてみたい。

2. ITの概念についての再考

従来、メンタルプラクティス、イメージリハーサル、ビジュアルゼーション、など呼称はさまざまであったが、共通した捉え方として通常の身体的運動を伴う練習に対し、身体動作を伴わない、いわゆる“イメージ”のみによるトレーニングであり、通常の身体運動を伴う練習とは対比的にまた二者択一的な捉え方をして来たと言えよう。

これに対して, Decety(1996), Jeannerod(2003)らは fMRI による研究結果をもとに実際の顕在化された運動は運動イメージの要素をすべて含んでおり, それらの間には一つの連続軸が考えられるとしている。また Holmes (2002) も実際の運動と運動イメージの間には中枢神経レベルの機能的等価性 (Functional equivalence) が存在していると考え, 彼もまた両者の間に連続性を想定し, IT に直接関連した PETTLEP モデルを提案している。

先述した Wishborn の仮説にも表されているように実際の運動と運動イメージとの間にみられる共通性の指摘は決して新しい見方ではないが, 直接, 脳活動における機能的等価性について fMRI などの実証的な証拠を基に提案している点が特に注目されよう。

また従来の運動に関するイメージはほとんど意識レベルで考えられてきたが, 前述の fMRI による研究においては運動遂行の準備段階におけるプロセス (主として計画など), また運動遂行中の自動制御に関わる小脳の関与など, 意識レベル以外においても共通性が見出されてきている意味は大きいと言えよう。このように実際の運動と運動イメージの間に従来より広い範囲で共通性が見られてきたことを踏まえて, 現在の IT の概念を見直してみると両者の間に区分があり, それらの間に位置するトレーニング法 (実際の競技ではむしろ多く見られる) について, 積極的な意味づけをしていないことが指摘されよう。

これからは新たな方向として, 実際の運動と運動イメージを一つの連続軸上で捉え, 両極の間でどれだけ実際の運動と等価性を持つものであるかを基準としながら, より実際の運動に近いものから, 極端に顕在的な運動を伴わない運動イメージをもちいたものまで多様なトレーニングを考えて

いきたいと思う。

その際, 著者は従来の IT にかえて, 実際の運動をターゲットとしたシュミレーショントレーニングの概念を導入したいと考えている。

3. IT の前にリラクセーションは必要なのか

Suinn の VMBR 法など従来の IT においては必ずトレーニング前のリラクセーションが強調されてきた, これは自律訓練法, 筋弛緩法, 呼吸調整法 (センタリングなど) などによるリラクセーションは主に身体的緊張からくる妨害の影響を低減させ, また認知的な妨害をも取り除くことができると考えられてきたことによる。

しかし, 実際の運動遂行時は言うまでもなく, IT 中の心拍数, 血圧などの変化を手がかりにしてみると, 明らかに休憩時等の水準に比べ, 高い覚醒水準の状態にある。また実際に競技者が競技の場で行っている IT の現場を観察してみると多くのケースで何らかの顕在的な身体運動を伴わせていることが指摘できる。さらに逆 U 字仮説などを考え合わせるとトレーニング前のリラクセーションはむしろ実際の運動のシュミレーションを妨げる方向になる可能性さえあるといえよう。

著者はトレーニング前の準備段階においては IT 中に想定される覚醒水準 (種目や状況によって異なる) にできるだけ近い状態をつくるべきであり, ケースによってはサイキングアップが必要になると考えている。この問題については従来のリラクゼーションの必要性に対する根拠を再検討しながら, 新たな方策を提案してみたいと考えている。

4. “運動イメージ”の鮮明度と統御性に関わる問題

著者らは IT におけるイメージを過去経験 (知覚

的、感覚的、感情的経験など)によって、外界の事物の知覚と類同的に習得保持された情報が、自己の記憶を手がかりとして意識的レベルで想起あるいは再生されたものであると考え、Pavioなどの絵画的なイメージ論の視点から運動イメージの因子分析を試みた(西田ほか, 1981)。その結果、さまざまな動作に共通した視覚因子とそれぞれ個別の動作ごとに複合感覚的な因子群を見出している。またGordonの統御性の考え方にに基づき、イメージ内容を意図する方向で変換できる能力について一連の系列動作課題を動作なしに言語教示にしたがってイメージし、その正確性を指標とするテストを標準化した(西田ほか, 1986)。このような運動のイメージに関するテストの開発はHall(1985)らによっても報告されている。しかしこれらの研究で取り上げられた鮮明度や統御性の要素はいずれもイメージの絵画論的なパラダイムにそった解釈が中心であり、今日の運動イメージの機能的等価性を考慮したものではなかったといえよう。このレクチャーにおいては従来からの鮮明度と統御性についての問題点を指摘し、さらに運動の

シュミレーションという視点から、新たに運動イメージの類似性の要因を取り上げ、その客観的な評価について考えてみたい。

5. まとめにかえて

ここではITに関する2,3の問題に限定して、最近の基礎的研究領域における成果を踏まえながら、従来のITを再考してみた。著者は特に運動イメージの機能的等価性パラダイムに注目しながら、これからのITの新たな発展の方向を模索したいと考えている。

(付記)

本稿は信州大学で開催予定の体育学会において著者がキーノートレクチャーを行う際の問題提起としてITの再考についてまとめてみたものである。参考文献、データや資料については発表当日に配布する予定である。正直に言って、まだ十分に著者自身のなかで煮詰まっていない部分もあり、是非会員諸氏の忌憚のない、ご意見やアドバイスをお願いしたい。

特別寄稿 2

脳科学と力学系を運動学習する

平田智秋（理化学研究所 脳科学総合研究センター、十文字学園女子大学）

はじめに

現在、理化学研究所でポスドク研究員として高磁場 fMRI の実験を進めつつ、一般体育の授業を非常勤で週4コマ担当しています。妙な組み合わせの二足の草蛙ですので「どっちつかず」にならぬよう、両者のつながりを意識しながら勉強の最中です。図1は脳科学で一般的な手法と、体育と運動学習の時空間分布です。時間を横軸、空間を縦軸にとり、それぞれが対象とする範囲を示しています。そして灰色の部分、私が関わっている MRI と体育です。この図は両軸を対数変換しているため目立ち

ませんが、脳科学と体育とのギャップは小さくありません。本稿では、このギャップを真摯に受け止め（最近、この差異があたかも無いように見える傾向、脳科学を日常生活へと強引に一般化する傾向を感じます）、しかし悲観せず、ギャップを橋渡しする手がかりを提案します。具体的には脳科学を体験して感じた以下の4点、体育の意義、手続き記憶の定着化 (consolidation) 研究の概観、仮説となる力学系モデル、そして私達のグループで進めている MRI 実験を御紹介します。

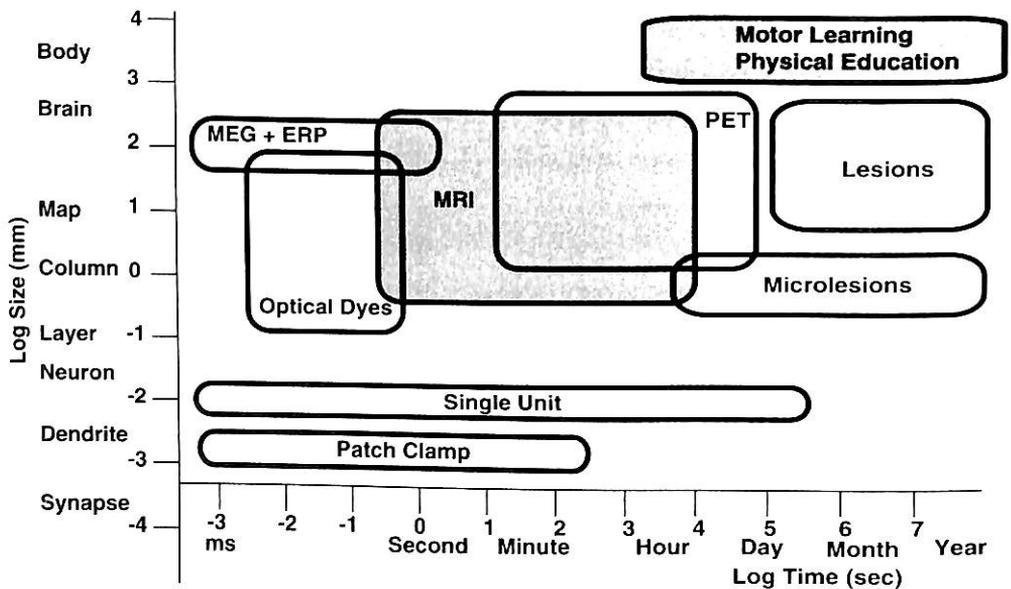


図1：脳科学の各手法と運動学習／体育が対象とする範囲の時空間分布

体育の意義：手続き的知識とリアリティ

「沢井さんって、学校行った頃からは、あたしが答えわからなくてもクラスの誰かがわかるんだからいいじゃんって思ってたって、知ってました？クラスの一人もわからなくても先生が答え知ってるんだし、何でいちいち生徒に答えさせるんだらうって思ってたんだって言うんですよ、おかしいでしょ？」(保坂和志・カンパセーションピース)

これは小説の一節ですが、体育の意義が縮約されている気がします。まず、ここで沢井さんの言うことには一理あります。授業で教わる答え、すなわち宣言的知識は自らの身体内になくとも、連絡可能な媒体、たとえばクラスの誰か、先生、本、メモ等があれば活用できます。外部から参照してもノイズが少ないので、強いて自らの身体に保持する必要がありません。いっぽう、体育で体得される手続き的知識は極めて個人的で、言語・文字や薬品、遺伝による伝達は不完全で、個々の身体を使った試行錯誤が不可欠です。この点、つまり手続き的知識の習得、身体を動かしてはじめて分かる事为目标とする点に体育の意義を感じます。さらに言えば、沢井さんは学校で退屈していましたが、手続き的知識の個人性および試行錯誤の必要は、嬉しい／悔しいなどリアルな感情を喚起するので退屈できません。脳科学で記憶や学習を扱った研究の多くは宣言的知識を課題としており、学習のリアリティに乏しい感があります。体育の意義、そして脳科学へのアプローチには、手続き的知識にそのヒントがあると考えます。

記憶の定着：memory consolidation

練習や授業が終わったあとも脳は働き続けます。

そして身体を動かして経験した記憶は、脳で再体制化され定着します(レビューは Nature Reviews: Neuroscience, Vol.5, pp.1)。記憶定着 (= memory consolidation) の研究は活発になされており、体育への応用可能性も小さくないと考えます。たとえば、記憶を最大限に定着させる為の練習／授業スケジュール、メンタルトレーニングへの提案です。

記憶定着の研究は、課題によって一貫した現象が見られず、議論は分かれています。思い切って大まかに言うと2種類の現象が調べられています。ひとつはいわゆる、レミニッセンスです。つまり間に物理的な練習をしていないにもかかわらず、練習の翌日に成績が良くなる現象です。もうひとつの現象は、記憶の安定、つまり干渉に対する耐性です。たとえば課題Aを学習した後に課題Bを学習した結果、課題Aを忘れればBからの逆向干渉であり、もし逆向干渉が無ければ課題Aの記憶は安定したとされます。手続き的記憶を課題とした研究から、課題Aを学習してから次に課題Bを学習するまで6時間の間隔があれば、課題Aの記憶は安定し始めること、この間隔における記憶の安定に睡眠は必要条件ではない事が分かっています。

昨年、記憶定着の過程について面白い報告がなされました(Nature, Vol.425, pp.616)。初日に課題Aを、2日目に課題Bを練習し、3日目に課題AとBの保持テストをする群では、課題A、Bともに3日目でのレミニッセンスが確認されます(I群)。また初日に課題Aを練習し、2日目と3日目に課題Aの保持テストをした群では、2日目に成績の向上があり、その正確さは3日目にも保持されます(II群)。そこで初日に課題Aを練習し、2日目に課題Aの保持テストをした直後に課題Bを練習し、3日目にも保持テストをする群では、3日目に成績の向上がみられるのは課題Bだけで、課題Aは2日目に較べて

極端に不正確になります(III群).

ここから、安定したと考えられる課題Aの記憶を翌日の保持テストで呼び出すと、いちど不安定な状態に戻ると分かります。その結果、III群ではその直後の課題Bの干渉を受けるのです。なぜ不安定な状態に戻るのか、この論文の著者は「課題Aとの共通点を抽出しながら、課題Bを記憶するから」ではないか、と結論しています。新しい事象を学習するときに、既に持っている記憶と関連づけながら記憶する(既知をもって未知を制す)、このような機構は私達の研究グループが持っている作業仮説に合致しています。それについて次の節でご紹介します。

力学系からの作業仮説：局所表現 vs 分散表現

ハサミを使う、ボールを投げる、ラケットを振る、課題AとBなど、人間は多様な運動レパトリを持っていて、私達のグループはそれらの脳内表現(収納法)に関心があり、ニューラルネットワークを用いたシミュレーションやロボット実験などから検証しています。fMRI実験は実証的な研究の一部です。

複数のレパトリの表現型として最も浸透しているのは局所表現(図2左)の考え方です。たとえば

運動レパトリがA-Cまであったとして、局所表現では、それぞれが独立の箱に収められていると考えます。そしてそれらを統合する部分があって(図2〇にx)、新しいレパトリを学習する時は、そこで比率が決まります(たとえばA:B:C=6:1:3)。このモデルでは新しいレパトリを学習しても、新しい箱が増えるだけなので既存のパターン(A-C)は干渉を受けません。これでは上の実験と矛盾します。

もう一つの考え方は分散表現(図2右)で、一つのネットワークに3つのレパトリが埋め込まれている、と考えます。そしてモードを決める素子があって(図2右灰色〇)、それがA-Cのパターンを引出すべく、ネットワーク全体に働きかけ、相応しいパターンが自己組織化されます。分散表現では一つのネットワークに複数の運動記憶が埋め込まれているので、新たなレパトリを学習するとネットワーク全体の構造が変化します。私達のチームは「運動記憶の脳内表現は分散表現」と作業仮説をたて、その妥当性を検証しています。分散表現は工学的には結果を予測しにくい点もありますが、予期せぬパターンが創発されやすいという特長もあります。これは余談ですが、整然とした局所表現に比べ、ごった煮の分散表現の方が、より柔らかいシ

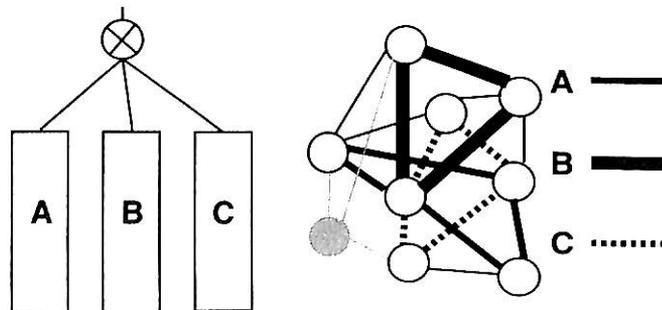


図2：局所表現(左)と分散表現(右)の模式図

システムとして人間を観ている気がします。

抽象的な法則を司る脳部位：高磁場 fMRI 実験

本節では私が理研で進めている実験を簡単に御紹介します。系列運動の学習、すなわち「動作を組み立てる順番」を学習し、それを司る脳部位をMRIにより特定しました。運動系列の学習は「手持ちの運動レパートリを、多様な方法で組み合わせ、より多くの運動目標を実現する」点で重要であり、日常生活に欠かせません。しかしMRIの分野で課題となる系列運動学習は、その殆どが暗記です。すなわち4-1-3-2-5のような決まった系列の、早く正確なボタン押し反応を求めています。

そこで私達は、一見多様に見える系列が、一つの法則に従って生成されている状況を設けました。課題はモグラたたきゲームに似ていて、ディスプレイの横軸上に、一定間隔で現れるターゲットの位置を予測します。そのときターゲットの位置の連続は一見、ランダムに見えますが、背後には一つの法則が

潜んでおり、その法則を抽出できていればターゲットの位置を正確に予測できます。その法則は、ある時点 t でのターゲットの位置が次の $t+1$ の位置を決める力学系になっていて($x_{t+1} = 4.0 \times x_t(1.0 - x_t)$)、図3左の通り放物線型の写像になります(ロジスティック写像)。これにより初期値に応じて多様な系列が生成されます。被験者はターゲットの系列がある法則に従って生成される事は知っていますが、写像については知らされていません。各試行は88ステップあり、各試行に異なる初期値を用いたので、各系列を丸暗記する事は不可能で、ターゲット系列を正確に予測するには、被験者自身による法則の抽出が必要となります。自らの行為により得られた情報から、環境の特性を探して行く、そのような学習が必要な設定です。

2週間にわたる練習を行い、各被験者が正確な予測を習得した後、学習した法則に従って系列を予測している時の脳活動をMRIで撮像しました。理研の機械は一般の病院にあるものの2.7倍の磁場を

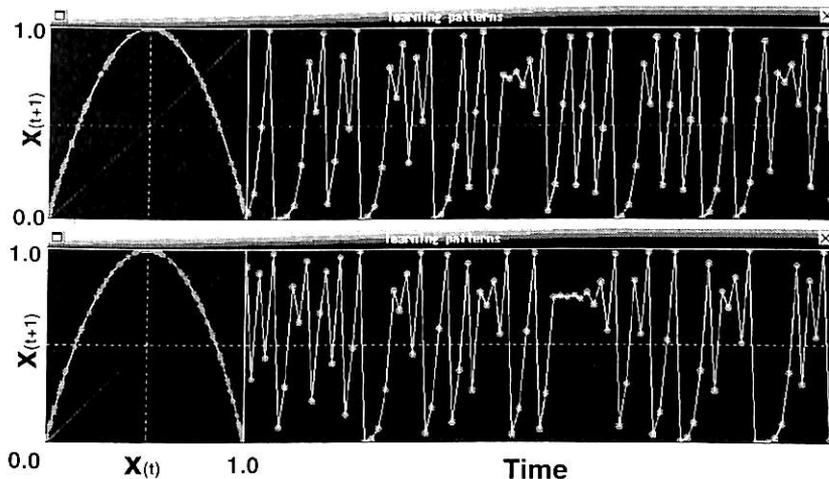


図3：ターゲットの系列(右)とその生成法則(左)。上段は初期値が0.04、下段は0.91。系列のパターンは違って見えるが、 x_t と x_{t+1} の関係(=法則)は同一

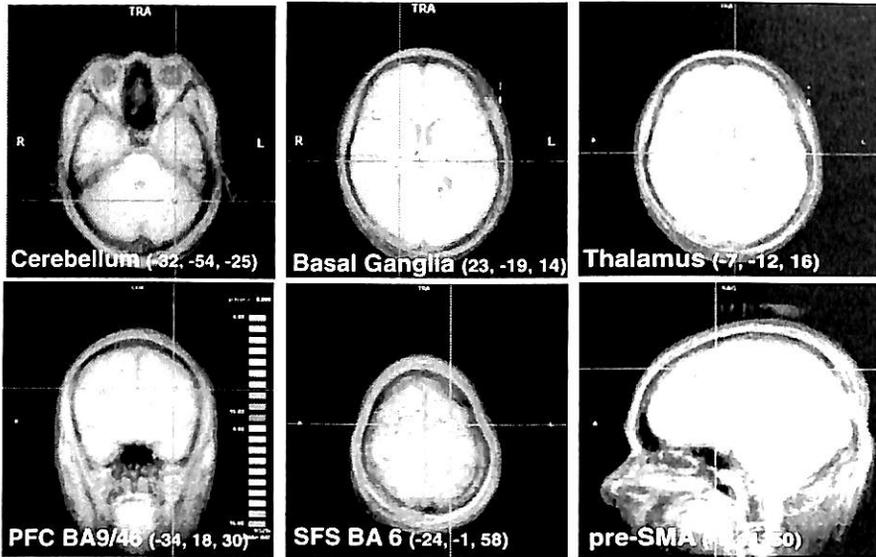


図4：法則に基づく系列生成に関わる脳部位。左上から右に、小脳、大脳基底核、視床、前頭前野、上前頭溝、補足運動野

持っており(4T[テスラ]), 空間解像度が高く、ノイズの少ないデータが得られます。結果、図4に示す6つの脳部位が、抽出した法則と系列生成に関わると分かりました。それらは1)最近、認知機能にも関わる事が分かった小脳, 2)長期的な系列学習で活性化し、大脳皮質と密に結合している大脳基底核, 3)記憶の検索に関わるとされる視床, 4)作業記憶の座となる前頭前野, 5,6)運動計画や投企に関連する上前頭溝, 補足運動野でした。図は全被験者の平均ですが、これらの部位の活動分布は、各個人の解析からもみられました。

これら6部位の活性は先行研究とも整合性が高く、このデータは脳科学としては一つの成果です。しかし、分散表現の仮説を検証する為に知りたい事は沢山あります。たとえば、これら6部位の機能的連関や、別の法則を新たに学習したときこれらの脳部位に変化が起こるのか、そして学習初期からの系時的变化などです。現段階では、多くの脳部

位からこれら6部位が記憶表現の座としての候補として浮かび上がったに過ぎません。機能的連関、動的な振る舞いが分かってはじめて、体育場面にも一般化しうる知見が提供できるものと考えています。

むすび

以上、大まかに書き散らかしましたが、脳科学の対象と体育の実践との間に時空間的な隔りがあるのは確実です。しかし、大風呂敷を広げず、悲観的にもならず、両者を結びつける研究トピックを真摯に模索したいと思います。その手がかりの一つが「手続き的知識」であり、その「定着過程と表現形式」だと考えます。現在、ご紹介できる結果は初期段階ですが、これを起点に研究を続け、運動記憶の脳内表現から体育に役立つ知見をご報告できれば、と思っています。

III. 日本体育学会第 54 回大会関連

熊本大学

2003 年 9 月 26 日～28 日



熊本大学正門前

キーノートレクチャー 1 発表抄録

体育・スポーツ心理学研究とUK法

船越正康(大阪教育大学)

内田・クレペリン精神作業検査(UK法)、適性検査、人柄類型不変、精神健康度可変、教育利用

連続加算法の考案に始まり、Kraepelin, E., が精神病理学研究に登場した文献上の年代は 1896~1925 年、内田勇三郎がこの方法に取り組んだのは 1923 年からであり、日本心理学会における「痴愚の精神作業検査」(1928)を皮切りに精神作業検査として体系化したのは 1965 年までのことであった。この間、文部省の体育研究所属託の任にあって戦前の「体育研究」に足跡を残す中で、小林晃夫による第1系列の見方:性格検査としての教育利用を見守っていたのであろう。職業適性検査の発展を自らは第2系列と呼称していた。小林が体育研究所へ奉職したのは1931-1935年、戦後の1952年から東京教育大学体育学部へ籍を置いたことが、その後の体育・スポーツにおける内田・クレペリン精神作業検査(UK)法利用研究の契機となった。

体育学会をはじめとするUK法関連研究は 120 件を越す蓄積がある。ちなみに2件以上の発表者は 26 名(石井源信、内田勇三郎、長田一臣、小村渡岐慶、柏原健三、片岡輝明、小林晃夫、呉万福、近藤充夫、佐藤成明、佐藤宣踐、未利博、滝省治、竹信武、土井英彦、中田順造、中山勝広、藤江学、船越正康、星野隆助、星野佳子、堀井千代鶴、増地克之、安田昭子、吉鷹幸春、渡辺隆嗣)で 86 件、70%以上を占有しているが、60 歳未満は僅かに6名。後継者が必ずしも育っているわけではない。

生生発展する学問の系譜を振りかえれば、UK法研究は長寿の仲間であろう。検査時間が長い、判定法習熟の壁がある。判定精度が揺るげば論文作成は進まない。スピード化の進む時流から取り残される不安がついて廻る。その中でなお惹きつけられる研究法の魅力は、人間理解へのアプローチの仕方にあるのではなからうか。限られた時空間を生きる人間の生き様を2次元化して1枚の紙に投影する。15分作業-5分休憩-15分作業の時系列に沿って、個人固有のエネルギーの放出パターンが浮かび上がる。検査条件が守られれば、主観を排除した作業曲線が客観的数量として入手できる。類似した作業経過を示す曲線の種類だけ人間の性格類型がある。その着想の下で、仕事ぶり、情意の状態、人間関係、思考法の異同を見分けて、16 種類の曲線と 10 類型の個性(人柄型)を弁別する。類型確定の論拠が、類似曲線と観察項目の臨床的検証の上に明示されているので、類型化を否定する理由はない。

小林の主張は、人柄類型不変-精神健康度可変仮説に集約される。性格や人格から価値観を除外したパーソナリティを論ずる場合にも、遺伝と環境なり素質と学習の関係を無視するわけにはいかない。しかし現代の心理学は一般論

として解説するか、環境の影響と学習の効果を強調するものが多い。それに対してUK法では、1検査法の立場から各論を展開する。親子曲線をもとに人柄型は生涯変わらず、他の類型に変える発想を否定する。変わらないものを変えようとするところから生じる悲劇は避けなければならない。個人の変わりえない気質側面をあるがままに認めようとして、精神的健康水準を高める方向に働きかける人間観がそこから生まれてくる。持病と同じように考えられる人柄上の難点が類型ごとに決まっており、健-不健の状態把握に基づいて個別処方が可能である。病気を治療する場合は専門家に任せるとして、健常者の健-不健の範囲ならば、教育における指導、スポーツにおけるコーチング、心理学におけるカウンセリングなど、人が人に働きかけるときの原則がここにあると考えてよい。オリンピックサポート(15年)ばかりでなく、喘息児の鍛錬教室(20年)、附属小学校の学級経営(32年)をはじめ、個人理解と集団掌握に貢献すると同時に、それぞれから学ぶべきことは実に多かった。以下に体育・スポーツに関するUK研究の成果と課題を掲げて参考に供したい。

1. 身体変化と心的機能変化:成長と老化過程、生理現象と性周期期、体質と季節適応、給食の影響、断食・減量過程などから身体に何らかの変化が生じた場合、連動する心的機能変化の法則性と指導指針が示された。

2. 身体活動の心的機能への影響:正課体育の影響、持久走トレーニング、70km強歩、運動会、運動合宿、トレッドミル歩行時のUKデータから、運動による心理的興奮現象の意味とスポーツマン的性格形成への貢献、不健康な興奮による反社会的行動、暴力、スポーツ中毒の指摘と対処原則が明らかにされた。

3. 精神的側面からみたスポーツ適性研究:球技 11、格技 8 種目ほか、陸上、水泳、体操、カヌー、ボート、登山、スキー、日本泳法から、種目やポジション毎に特定人柄の出現率が高く、精神健康度の高い選手がレギュラーに選ばれ、好成績を残すことが示された。

4. 個性理解に基づく指導法研究:合宿指導と事例研究 10 件、競技力向上と個別指導への貢献が報告された。

5. コンディショニングとコーチング研究:集団指導における事故の予測と防止を中心に、UK法による指導が試みられた。

以上の5点で理解される通り、UK活用研究は運動適応上の課題に対して実践的效果を挙げてきたが、運動学習研究に個性別指導視点を加えるときに、より一層稔りある成果が期待されるのではなからうか。

キーノートレクチャー 1 演者報告

船越正康 (大阪教育大学)

内田・クレペリン精神検査(UK)の出発点を連続加算法の考案に求めれば、UK法は優に100年を越す理論と実践の歴史をもつ。研究成果は、精神病理学研究から職業適性検査を経て性格検査までの発展過程で約500件、そのうち外国文献は40件足らずだから日本人の貢献がいかにも大きい。しかし執着心の強い一握りの日本人が、国際化に背を向けて永々と捻くり回しているようにも見える。レクチャーを引き受けて振り返ると、のめり込んで45年が経ったことに苦笑を禁じ得なかった。同じように興味を抱いた柔道とともに、海を渡る理由がなかったからにすぎないが、データの蓄積が進むにつれて面白くなり、この1年間は9件の発表に顔を出している。

熊本大会には関西体育心理学研究会の仲間5人と同行、前夜の馬刺と焼酎で元気になりすぎてレクチャーは時間超過。年甲斐もなく迷惑をお掛けしました。思い入れが強いと尾を引く。齢をとるとくどくなる。1時間にしては分量が多すぎたと反省しています。

UK法は類型説の立場をとり、人柄不変・精神健康度可変仮説の下で個性の理解・行動の予測・対処法の選定が可能である。人間理解の基本に臨床の目をもっているため、具体的個人の具体的問題解決に資するところが大きい。とくに身体運動が心的機能に及ぼす影響を捉え、健康な運動興奮が長所としてのスポーツマンの性格形成に寄与し、不健康な運動興奮が暴力や反社会的行動の引き金と

なる点が明らかにされている。その他に生理現象や減量・減食過程の法則性、精神的側面からみたスポーツ適性、コンディショニングと勝利達成条件の整備などにも力を貸しており、UK法を用いたメンタルサポートの成功率は非常に高い。

判定精度を高める工夫が残されているものの、人が人に働きかける仕事として、教育における指導、スポーツにおけるコーチング、心理学におけるカウンセリングでは、UK法による人間理解が役立つことを伝えたかったが、いかがであろうか。



船越正康氏

キーノートレクチャー 1 傍聴記

高柳茂美（九州大学）

内田クレペリン精神作業検査（UK法）は、心理学に携わるものならおそらく誰もが知っている検査法であり、100年を越す歴史があるのは周知の事実である。私も少しは触れたことがあるものの「何となく知っている」という程度であり、その解釈の仕方がやや難解に感じて、興味はあるものの手は出せない、という感じだった。

今回、船越正康先生が長年にわたるご研究についてレクチャーをされ、様々な事例を示しながらその有用性についてお話をされた。

仕事が連続できない精神病者に仕事をさせるといふ逆転の発想から生まれたという元々の出発点には興味を引かれるものがあった。また、クレペリンが精神病理学研究の手法として考案したものを、内田が健常者を対象とした職業適性検査法へと進め、さらに小林が人柄類型不変・精神健康度可変仮説を提唱して体育・スポーツ研究へと受け継いだという事実は、見事にバトンリレーが行われてきた研究であるという点から大変興味深かった。

特に、人柄類型不変・精神健康度可変仮説、すなわち、人柄類型は生涯変わらないものであり、曲線の種類だけ人間の種類があるということ、一方で、精神健康度は可変であるという考えは、個人を理解する尺度としてきわめて適切な解釈であり、現在メンタルヘルスの指標として様々な質問紙によ

る量的アプローチが行われているが、数字にはなかなか表れにくい個人の微細な変化をとらえるにはおもしろいアプローチであると感じた。

レクチャーの中では、具体的な例を提示しながらわかりやすくご説明いただいた。心的エネルギー水準は青年が一番強く、年を取ると最初の立ち上がりが悪い、湾曲した線は柔軟性を示すが年を取ると少なくなる、子どもはどんどん成長していくので、それを認めた指導法が大切である、といったことが如実にクレペリン検査の中で現れることには、現在の健康教育において考えてみても、古くて新しい検査法であると認識させられた。また、スポーツ選手の減量問題、月経との関連性、運動・体育の影響など、対象は多岐にわたり、スポーツ心理学の観点からもおもしろいと思えた。

平均曲線の違いはあくまでも「個性」であり、その人のありのままを認めるという考えは、体育・運動・スポーツの指導をする上で、最も基本的な大切なことであり、さらに、メンタルトレーニングやストレスマネジメントなど個人にアプローチする必要性が大きな場面では、人間理解へのアプローチとして、かなり有用な尺度ではないかと今回のキーノートレクチャーを受けて改めて関心を持った次第である。

キーノートレクチャー 2 発表抄録

子どもにおける身体活動増強のための行動科学的アプローチ - トランスセオレティカル・モデルを基に -
上地広昭 (早稲田大学)

近年、テレビゲームの普及や遊び場の減少に伴い、子どもにおける身体活動量が減少傾向にある。たとえば、1日あたりの子どもの身体活動量(歩数)を年代ごとに並べた研究では、1979年では28,000歩、1987年では19,000歩、1997年では14,000歩と、現在の子どもの身体活動量が20年前の約半分になっていることを報告している。また、身体活動を行う子どもと行わない子どもが二極化しているという指摘もある。子どもにおける身体活動量の減少は、肥満、生活習慣病、ストレスの増大、人間関係を形成する能力の低下、体力の低下など、健康上多大なる悪影響を及ぼすおそれがあるため、子どもたちの身体活動量を増強させるための策を早急に考えねばならない。

欧米では、子どもを対象に、身体活動量の増強をねらった介入研究が盛んに行われている。これらの介入研究の中で、人の行動変容の過程を理解し、効率的に介入を行うために、様々な行動科学の理論やモデルが応用されている。特に、最近では、喫煙や脂肪分摂取などの不健康な習慣的行動の変容のために用いられている行動変容のトランスセオレティカル・モデル(以下、TTM)が、非常に注目されている。TTMは、1) 行動変容段階、2) 行動変容の過程、3) 意思決定のバランス、および4) セルフエフィカシーにより構成される包括的モデルである。もともと、これら4つの要素は、それぞれ独立したものであり、TTMはこれらの要素を統合したモデルである。中でも、TTMの中心的構成要素である行動変容段階は、様々な健康行動の変容過程を検証する際に多用されている。行動変容段階は、過去および現在における実際の行動とその行動に対する準備性により、「無関心ステージ(行動をしていないし、するつもりもない)」、「関心ステージ(行動していないが、するつもりである)」、「準備ステージ(行動しているが、不定期である)」、「実行ステ

ージ(定期的に行動しているが、まだ始めて6ヶ月以内である)」、「および「維持ステージ(6ヶ月以上定期的に行動している)」の順に5つの段階に分けられる。TTMにおいて、人は習慣的行動を獲得する際には、この5つのステージを順に移行するといわれている。また、ステージ間を移行させる要因がそれぞれ異なることを提唱している点がTTMの特徴である。初期のステージ(無関心ステージ、関心ステージ、および準備ステージ)においては、セルフエフィカシーや意思決定バランスがステージ移行の規定要因となることが報告されている。セルフエフィカシーとは、社会的認知理論の中心的構成要素であり、行動をどの程度成功裡に達成することができるかという見込み感を指す。また、意思決定バランスとは、行動の意思決定に関与する行動の恩恵と負担の知覚のバランスのことである。行動変容段階とセルフエフィカシーの関係については、ステージが後期に移行するに従いセルフエフィカシーは増加すると考えられており、行動変容段階と意思決定バランスの関係については、通常、後期のステージ(実行ステージおよび維持ステージ)ほど、行動に関する負担の知覚が低く、恩恵の知覚が高いとされている。

本講では、TTMに基づき、現在身体を動かしていない子どもたちに対して、どのようにして運動・スポーツなどの身体活動を行わせるかについて行動科学的視点から検討を行う。具体的には、1) 子どもの身体活動に対するセルフエフィカシーをどのように強化させるか、2) 身体活動を行うことの恩恵と負担をどのように教えるのか、についての方略を提案する。その他にも、重要な他者からのソーシャルサポートや物理的環境の変化が、子どもの身体活動増強に果たす役割についても論じる。

キーノートレクチャー2 演者報告

上地広昭（早稲田大学）

今回のキーノートレクチャーの演者依頼を受けたのは今年の初夏だったと思う。非常に光栄であると同時に、若輩の私にとってはそのような大役を果たせるかどうか不安で、躊躇していた。そんな折、私の指導教授でもある早稲田大学の竹中晃二教授より「何事も経験だから、恥をかいてもいいからやってみなさい。」との励ましを受け、最終的に引き受けることにした。

大会当日、熊本大学の大讲堂には100名を超える人が集まってくれた。その人たちの期待に答えて、そつなくこなしたかったのだが、アクシデントがいろいろあった。まず、私自身そんなに人が集まるとは思っていなかったため、準備した資料が全く足りなかった。そのため、せっかく集まってくれたのに、資料なしで私の発表を聞く羽目になった先生が数多くいた。また、発表中に、PCの設定ミスで、スライドが1分毎に自動的にチェンジし（そのため、情報量の多いスライドに関してはかなり早口で喋ってしまい、聞き取りにくい箇所も多かったと思う。）、当初予定していた自分なりの時間配分が見事に崩れた。それらのことについて、この場を借りて深くお詫びしたい。

発表内容は、はじめ簡単に、現在の子どもの身体活動量の減少状況に触れ、次に、行動科学的な理論に基づき、この身体活動の減少をどのように食い止めればよいのか、またそのために具体的にどのような方略を用いればよいのかについて提案した。私の発表自体は、正味30分程度で終わった。司会の近畿福祉大学の堤俊彦先生より、発表後に「終わるのが早すぎるぞ」と笑いながら暖かいお叱りをうけたが、余った時間は堤先生の名司会ぶりに

助けられた。実は、これがかえってよかったのではないかと思う。というのも、今回のキーノートレクチャーの山場は、決して私の発表ではなかった。会場が最もヒートアップしたのは発表後の30分近くにおよぶ質疑応答だった。「質疑」というよりは、先輩研究者からの「助言」と言ったほうがいいかもしれない。暖かい励まし、厳しい指摘、いろいろあったが全て今後の私の研究生生活に生きてくるものであった。発表後の質疑応答中にいただいた意見について、熊本から東京に帰る飛行機の中でもずっと考えていた。

今は、本当に今回のキーノートレクチャーの演者を引き受けてよかったと思う。私のこれからの研究生生活の中でも2003年の9月26日は忘れられない日になった。最後に、この場を借りて、貴重な時間を割いて、私のキーノートレクチャーを聴きにきてくださった先生・友人に御礼を言いたい。



上地広昭氏

キーノートレクチャー 2 傍聴記

土屋裕睦（大阪体育大学）

体育学会初日にあたる9月26日、上地広昭先生（早稲田大学）の体育心理分科会キーノートレクチャー「こどもにおける身体活動増強のための行動科学的アプローチ—トランスセオレティカル・モデルを基に」を拝聴した。堤俊彦先生（近畿福祉大学）の司会で静かに始まる。会場は、分科会メンバー以外にも、こどもたちの運動不足に危機感を持った先生方が集まっているようだ。この問題にわれわれ体育心理学の専門家は何かできるか？上地先生の発表に注目が集まる。

まず先生は、子どもの身体活動の推移や定期的な身体活動を行っている子どもの割合、さらに身体活動不足がもたらす悪影響などを示しながら、われわれ大人が、もっと子どもに「手間」をかけて運動習慣の定着を促すべきだと主張された。確かに子どもたちは外で遊ばなくなった。それを見ながらわれわれ大人は「時間・空間・仲間の3つの間がなくなった」と嘆くばかりではいけない。さて、どんな「手間」をかけるべきなのだろうか？

レクチャーでは、この手がかりとして行動科学理論の中でもトランスセオレティカル・モデル（Transtheoretical Model:TTM）が取り上げられた。TTMは変容のステージを設定しており、セルフエフィカシーと意思決定バランス、変容プロセスから構成される、実証的（evidence based）・実践的（practical）で、とてもホットな理論である。途中、指導教員である竹中晃二先生監訳によるTTMの翻訳著書の紹介があり、また司会者からはスポーツ心理学会のRTDとしてこのテーマが取り上げられるとのアナウンスがある。うーん、ますますホットである。

「子どもに日記を付けさせるなど身体活動についての気づきと知識の提供」、「身体活動の喜びや楽しさを強調するなど、身体活動を増強させるための動機づけを高める」のような、5つの具体的な「手間」のかけ方が提案される。どれも、1つ1つ

がとても具体的だし、すぐにでも取り掛かれそうな「手間」だ。確かにこれなら、子どもたちの身体活動増強に向けた具体的な介入方略になりそうである。TTMによる介入は、とりわけそれぞれのステージにある対象者にマッチした、具体的なサポートがオーダーメイド感覚で提供できるところが強みだ。これなら子どもたちの運動習慣獲得にも役立つだろう。

いや、それ以上の意義があるかも。こども時代に、自分の行動習慣を自分の意思でマネジメントしていく感覚を身に付けることができれば、そこで培われたスキルは、その後の学校生活、いや人生全般にわたって利用可能な「生きる力」になるのではなかろうか。

われわれ中年も「運動が大切なのは知っているが時間がなくて」などと言っていない。まずは「熟考ステージ」から「準備ステージ」へ、そして運動の「実行ステージ」へ。フロアーをも望ましい運動習慣獲得に誘う、刺激的なキーノートレクチャーであった。



質問中の土屋裕睦氏

シンポジウム 発表抄録

スポーツとコミュニケーション —身体とことばをつなぐスキルトレーニング—

司会 橋本公雄（九州大学健康科学センター）

これは特殊なケースであるが、体育館で全員を座らせたところ一人だけ座らない（座れない）学生がいた。「座ってもいいんだよ」と声を掛けたが、無言でそのまま立っていた。過緊張状態で座れなかったのか、あるいは大人版の緘黙症であったのか、定かでない。その後、この学生は人とのコミュニケーションはなかなかできなかったが、卓球は結構上手かったようである。

近年、社会的スキルやコミュニケーションスキルの欠如した子どもや青少年の増加が指摘され、「生きる力」や「体験学習」の必要性が叫ばれている。大学生においても同様であり、ある国立大学では、ここ10年間で「対人緊張が強い」「友人づくりが上手くできない」という設問に対する肯定的回答が男女とも確実に増加しているという。

これまで体育・スポーツでは、「健康」「体力」をひとつのキーワードとして教育を行ってきたが、教育現場で抱える問題は、社会的スキル、コミュニケーションスキル、ひいてはライフスキルが身につけていないということである。ある大学で、「体育実習でコミュニケーションスキルが獲得できる」と大学側に説明したところ、興味・関心を抱き、「ではどうやったらコミュニケーションスキルが体育授業で高められるのか、具体的方法を提示してください」ということがあった。それほど大学においても、コミュニケーションスキルの欠如は深刻な問題なのである。したがって、コミュニケーションスキルを高める体育授業の展開などは、今後どの大学でも重要なキーワードとなる可能性はあり、研究に値する課題であると思われる。

体育・スポーツに携わる者は、運動・スポーツ活動を通して人間関係が促進し、醸成されることを当然のことと捉えてきたが、今日の学生の現状をみると、もう一度このことを考えても良いのではないか思った次第である。

勿論、このコミュニケーションスキルの問題は、体育という学習場面に限ったものではなく、スポーツ競技においてもチームビルディングやパフォーマンス発揮の観点からも、重要な問題であり研究が進められている。

本シンポジウムでは、「スポーツとコミュニケーション—身体とことばをつなぐスキルトレーニング—」と題し、体育・スポーツ場面におけるコミュニケーションの促進やスキルの獲得について討議し、今後の研究の方向性を探ってみることにした。そこで演者として、体育心理専門分科会から、杉山佳生先生（九州大学健康科学センター）と吉澤洋二先生（名古屋経済大学）に、体育方法専門分科会から野外活動の領域で精力的に研究・活動をされておられる柳 敏晴先生（鹿屋体育大学）に登壇を願い、話題提供をお願いした。

吉澤洋二先生には、「スポーツ活動におけるコミュニケーションと指導者の役割」と題して、スポーツ場面における選手と指導者のコミュニケーションについて、行動分析コードからコミュニケーションスキルをあげ、選手のポジティブな行動を引き出すような指導者のコミュニケーションスキルについて語って頂く。

柳 敏晴先生には、「野外教育におけるコミュニケーションスキルの獲得」のテーマで、野外教育場面におけるコミュニケーションスキルの獲得のためのプログラムや技法について語って頂く。

最後に杉山佳生先生には、「体育・スポーツにおけるコミュニケーションスキル」のテーマの下、様々な「スキル」（運動スキル、心理的スキル、ライフスキル、社会的スキル、コミュニケーションスキルなど）の相互関係、及び、コミュニケーションスキルの捉え方について語って頂く。

フロアからの活発なご質問やご意見を頂き、盛やかなシンポジウムになることを期待したい。

野外教育におけるコミュニケーションスキルの獲得

柳 敏晴(鹿屋体育大学)

野外教育、体験学習、コミュニケーションスキル

1. はじめに

野外教育の場面は、自然の真っ只中であり、参加した者は、自然の中にいるだけで、心が解放され、色々のものを自然に受け入れることができるようになるのであろう。野外教育は、野外での共同生活を通して、個人的成長を促すことを目的としている。野外での簡素で不便な生活条件の中で、共同の生活を成立させるために、子ども達は様々な生活上、プログラム上の問題を解決していかなければならない。課題解決の体験を通して、協力・責任・正義・友情・奉仕などの人間的諸価値の意味を理解し、体験を媒介として、民主的な人間関係を構築する態度や技術を学ぶ。なぜなら、人間関係にかかわる技術の学習は、体験がまず先にあり、後ほど学問や科学がそれを論理化する性質のものであり、決してその逆ではない。野外教育場面では、「Learning by Doing(なしつつ学ぶ)」(江橋, 1964)とよく言われる。野外教育は、体験学習そのものといえるが、コミュニケーションスキルも野外教育活動を通して獲得できるものの一つと考えられる。野外教育場面で使われている方法について紹介し、コミュニケーションスキル獲得にはどのようなプログラムが適切なかを考えたい。

2. 指導者の養成

日本の国で、最初の組織キャンプを行ったと考えられているYMCAでは、キャンプ指導者養成カリキュラムの実践理論に、グループワークの理論、グループダイナミクス、カウンセリングの方法、スーパーバイズの方法、リーダー養成の方法、指導者養成の方法等指導者養成の中で、グループワーク、集団の心理、カウンセリング等に多くの時間を割いている。公立施設である(財)大阪青少年活動振興協会専属カウンセラー研修では、理論編で青少年指導に必要な基礎知識に、現代社会の青少年育成Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、青少年の理解Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、リーダーシップ論、グループワークⅠ・Ⅱと、YMCAと同じように、青少年やグループの理解を大切にしている。

少ない例であるが、いずれの団体も、野外教育において、グループを中心として指導することが効果的で、コミュニケーションが容易になると考えているのであろう。

3. プログラムの方法

初めの固い雰囲気—それはおそらく各自の不安から来る不自由さによるものと推測できるが—をほぐし、自由に、自ら学ぼうとする規範を作りやすくなるための雰囲気を作り、参加者のICE(氷)をBREAK(こわす)導入がアイス・ブレーキングと呼ばれ、大切な働きをするプログラムである。コミ

ュニケーションを円滑にしていくために、導入のプログラムとして重要と考えられている。

イニシアティブ・ゲーム(Initiative Game)は、A.S.E.(Action Socialization Experience:行動社会化経験)とも呼ばれ、一つの小グループが一人では解決できない、精神的・身体的課題に対し、参加者一人一人の諸能力を出し合い、協力しながら課題解決する活動である。正解とか間違いがあるわけではなく、課題解決の過程で集団内のコミュニケーションが活発になり、信頼感や協調性が生まれ、全員が一つになって取り組むことが重要である。集団内の成員同士のコミュニケーションが促進されると考えられる。井村ら(1999)による、「JFA・S級コーチ養成コースにおけるASE活用に関する基礎的研究」もある。

冒険教育は自己概念の改善を目標にしているが、グループカウンセリングを活用し、信頼関係を構築している。PA(Project Adventure)のコンセプトでは、約束事として、フルバリュー・コントラクト(最大限に評価するという約束事)や、チャレンジ・バイ・チョイス(自由意志に基づく挑戦)があり、プログラム上の手法として、ディ・ブリーフィング(ふりかえり)があり、概念上の手法として、体験学習サイクル(ゴール設定、追体験・ふりかえり、一般化、概念の展開)がある。宮城県では、PAを平成12年度から学校教育に取り入れ、平成14年度からは「学校不適合対策事業」もしている。

組織キャンプは、アメリカ合衆国が創り上げた、偉大なプログラムであるといわれている。ベティ・ヴァンダースミッセン(1997)は、「滞在型キャンプには、ロープコースやアウトドアパスーツなどの冒険的活動が含まれている。そこでは技能の獲得だけではなく、生徒間の人間関係や個人的な成長を重視している。野外は、自己・他者に対する責任感を重点的に教えるのに優れた場である。」と、社会性の育成や発達に効果があるといっている。

4. コミュニケーションの獲得

組織キャンプ場面では、グループワークが大きな要素としてある。キャンプ・カウンセラーはグループワークを用いながら、キャンパー(個人)とグループ(集団)に対して援助活動を行っていく。強調される点は、「集団を通して個人を援助する」視点である。この視点がコミュニケーションの獲得に影響していると考ええる。思春期の子ども達が、自我を発達させていく過程で、自己を主張する心理的空間や、心理的距離感の存在があることをキャンプ・カウンセラーが知り、それが、子どもの発達に合わせたコミュニケーションの場に繋がることを、共に学習するのではないだろうか。

スポーツ活動におけるコミュニケーションと指導者の役割

吉澤洋二 (名古屋経済大学)

行動分析、指導者の行動、ポジティブな言葉かけ、選手の自立

1. 行動分析コードとコミュニケーションスキル
 スポーツ活動では、指導者と選手、選手と選手など、チームのメンバー間で相互理解や情報伝達のために言語的、あるいは非言語的コミュニケーションが行われている。相互理解が増して信頼関係が高まれば、言語的コミュニケーションから、次第に非言語的コミュニケーションの量が増える。非言語的コミュニケーションが増えるということは、相互によく理解しているように思われるが、わずかでも相互理解にずれが生じることになれば、互いの行動がぎくしゃくすることがある。

教師や指導者の行動に関する研究が、アメリカを中心として盛んに行われ、選手の“やる気”を高め、個人やチームのパフォーマンスを向上させる指導法を確立するために行動分析が行われてきた。Paul W. Darstらが、『体育とスポーツの指導分析(1989)』を発表し、教師と指導者の行動分析法を紹介した。指導者の行動分析システムとして、Bennett J. Lombardoが指導者の行動分析システム(LOCOBAS)を、またAlan C. LacyとPaul W. Darstらは、アリゾナ州立大学観察法(ASUOI)を、さらにDeborah TannehillとDamon Burtonらは指導者の行動観察記録システム(CBORS)を提案している。これらの分析システムで扱われる指導者の行動分析コードは、以下のとおりだった。

・ポジティブ

言動：賞賛する、受容する、誉める、励ます

行動：手を叩く、頭を軽く叩く、握手をする

・ネガティブ

言動：叱る、嫌みっぽい、怒鳴る

行動：殴る、どつく、蹴る

・名前を呼ぶ：選手のファーストネームやニックネームを呼ぶ

・指導の有無：プレイの事前、事後の指導の有無

・プレイのモトリック(モトリック)の有無

・相互作用：個人へのコミュニケーション

複数の選手やチーム全体への対応

・チームの雰囲気

以上のように、指導者と選手の相互作用を記録するコードも含まれ、コミュニケーションを研究する上で、有効な行動分析システムとなるだろう。

2. コミュニケーションと指導者の行動

指導者がプレイを失敗した選手を指さしながら、床を蹴りながら、ときにはコブシを挙げながら、選手に対して“なにをやってるんだ”“おまえそれ

でもレギュラーなのか”“交替だ”などと罵声を浴びせてしまったとする。そのとき選手は、チームメイトの前でプレイや自分自身を否定されたと考えて人格を傷つけられたと思うようになる。選手はネガティブな思考を持つようになれば、“どうせ私はだめなんだ。チームからも指導者からも期待されていない”と考え、やる気を高めるために最も大切な『目標』を失ってしまう。怒られながらもプレイを続けている選手は、怒られないようにするためだけにプレイするような、失敗回避の行動をとろうとする。このような状態になれば、選手は自分の活動している競技への魅力を失い、バーンアウトを起こしてしまうことも考えられる。自由記述形式で回答を求め、高校選手の「やる気」の高まる条件について調査した研究がある。女子選手が、男子選手に比べて「やる気」が高まる条件としてコミュニケーションをあげている者が多かった。さらに、男女別に全国大会の競技成績によって比較したところ、女子チームでは成績が上位ほどやる気の高まる条件として指導者とのコミュニケーションを挙げているものが減少し、反対に選手とのコミュニケーションが多くなっている。このことは、チームが強くなることと選手が指導者から選手同士へと「やる気」にかかわるコミュニケーションの相手を変えていくこととの関係を示したものであり、指導者から選手が自立していく過程ととらえることができないだろうか。

以上のように考えると、指導者の言動や行動によって選手の成長を促すことができる。したがって、指導者は選手のポジティブな行動を引き出すような言葉かけ(うまくできたプレイに対して、『よーし、いいぞ』『ナイスプレイ』『ナイスディフェンス』など。失敗したプレイに対して、『どんまい、どんまい』『もっと積極的にプレイをしよう』『もう少しだ』など)や動作(選手のプレイに対して頭を振ってうなずく、励ますように手を叩く、肩を軽く叩く、穏やかな視線を投げかけるなど)を行うことが必要になると思われる。

以上のように、指導者の行動が選手のポジティブな行動やネガティブな行動を導くことになるので、選手の心理的な面にも十分目を向け、優しく見守り、選手の自主性を育てていこうとするコミュニケーションスキルが、選手の成長を促し、於いてはチームビルディングにつながる指導スキルとして考えられないだろうか。

体育・スポーツにおけるコミュニケーションスキル

杉山佳生 (九州大学健康科学センター)

ライフスキル、社会的スキル、チャンネル、コーディング

1. 体育・スポーツと様々な「スキル」

近年、日々の生活をうまく過ごしていけるかどうか、あるいはよりよい人間関係を作っていけるかどうかといった問題を、「スキル(技術)」という概念を用いて説明しようとする考え方が広まっている。このスキルという用語には、「最初はうまくできないが、練習を積み重ねることによって、誰でも上達することができる」という意味が含まれており、運動スキルと同じように、適切な教育・指導によって習得させることができるものであると考えられている。

体育・スポーツの領域においても、運動スキル以外の「スキル」に関心を寄せる研究者や実践指導者が増えているようである。S. J. Danish を中心とするグループは、スポーツ活動を通して「ライフスキル」を高めるための教育プログラムを開発しており、また、2001年に開催された国際スポーツ心理学会においても、「スポーツを通しての青少年の発達：ライフスキルプログラムの重要性」というタイトルのシンポジウムが行われ、いくつかの実践的プログラムが紹介された(この内容は、「体育授業の心理学」という本の中で、市村・中川(2002)によって採り上げられている)。さらに、体育やスポーツにおける「社会的スキル」獲得の問題も、山本(1998, 1999)や石倉ら(石倉, 1999, 2000, 2001; 竹田・石倉, 2001)によって議論されている。

ところで、ここで検討しておかなければならないことの一つとして、「スキル」という言葉を含む用語がいくつか存在していながら、それらの関係があまり明確にされていないという問題がある。「運動スキル」、「心理的スキル(主としてメンタルトレーニングに言及する際に用いられている)」、「社会的スキル」、「ライフスキル」、そして「コミュニケーションスキル」といった用語が今回のテーマに関係していると考えられるが、これらの概念が互いにどのように関係づけられるのか、今後体育・スポーツにおける研究を進めていく上で、一度、整理しておく必要があるだろう。

2. コミュニケーションスキルの捉え方

一般に、上述したようなコミュニケーションスキルやライフスキル、社会的スキルは、それらが用いられている状況や文化に依存していると考えられている。「握手をする」という社会的スキル(コミュニケーションスキルでもある)は、握手を必要とする状況であるかどうか、

あるいは握手文化を持っているか否かで全く異なる意味を持つだろう。では、体育・スポーツを対象とした場合、コミュニケーションスキルをどのように捉えるのが有効なのだろうか。もちろん、コミュニケーションについては様々なモデルや理論が提唱されているのだが、ここでは、体育・スポーツの特質を反映しうるとされる二つの観点、すなわち、チャンネル及びコーディングという観点から、コミュニケーションスキルを捉えてみたい。

まず、コミュニケーションスキルのチャンネルであるが、コミュニケーションチャンネルは、通常、大きく、バーバル(言語的)とノンバーバル(非言語的)に分類されている。体育・スポーツでは、その状況特性から、日常場面と比べてより多くのノンバーバルコミュニケーションスキルが活用され、その結果として、それらのスキルの上達が期待される。このようなスキルには、アイコンタクトやジェスチャー、身体接触や空間利用などのコミュニケーションスキル(但し、その成立メカニズムについての理解はまだ不十分なところが多く残されている)が含まれるだろう。ノンバーバルコミュニケーションにはさらに多数のチャンネルがあり、それらを調整するスキルもスポーツ場面では必要となる。

一方、コーディングについてであるが、コミュニケーションスキルは、記号化(エンコーディング)スキルと解読(デコーディング)スキルに分けて捉えることができる(さらに、「統制スキル」を含めることもある)。記号化スキルは、情報をいかにうまく他者に伝えるかに関するスキルであり、言語的情報の伝達や感情の表出を含む。解読スキルは、他者からの情報をいかに正しく受け取るかに関するスキルであり、言語的・認知的理解やいわゆる「相手の心理の読み」などが含まれる。いずれのスキルも、体育・スポーツ場面において重要な役割を演じうるものであり、その発達が期待される。

一言で体育・スポーツ場面と言っても、運動学習場面や競技場面、とにかく運動を楽しむ場面などと様々であり、それぞれ異なるコミュニケーションスキルが用いられていると考えられる。体育・スポーツを通じて日常生活や自己成長に役立つようなコミュニケーションスキルを獲得するためには、それぞれの状況(場合によっては文化も含めて)でどのようなコミュニケーションスキル(バーバルかノンバーバルか、あるいは、記号化か解読か)が用いられ、向上していくのかを理解しておくことが必要であるだろう。

シンポジウム 司会報告

橋本公雄（九州大学）

シンポジウムの終了後、多くの方から「良かった」「面白かった」と声を掛けて頂いた。大修館書店の綾部健三氏からも「機会があったら、是非体育科教育に書いてもらいたい」との話もあった。これはその年の12月号の巻頭エッセイへの依頼、そして2004年4月の特集号の編纂へと実現した。興味・関心ある人にはそれほどインパクトのあるシンポジウムであった。

シンポジウムの評価基準の1つは、テーマと演者の発表内容にある。今回のテーマはアップデートな話題で新鮮みがあった。演者の先生方も用意周到な準備と内容のある発表をしてくださった。演者の先生方に深く感謝申し上げたい。もうひとつの評価基準は、議論の消化不良の問題である。演者の長い発表と議論する時間不足で消化不良を起こすことが多い。今回は演者の話しは短く、質疑応答を多く、話し足りない分は質疑応答の中で補足

する。これを発表者をお願いした。

司会者にとって、質問が出ないときほどつらいものはない。北米の学会に何度か出席したことがあるが、質問が出ないときは、あっさりと打ち切ってしまう。我が国では、時間がある限り、司会者は時間を消化する。これも礼儀なのであろう。実は何名かに場を盛り上げるために質問をしてもらうようお願いしていた。しかし、結局はその先生方は質問できずに終わった。それほど、会場のあちこちから質問や意見が飛び交った。演者の応答も的確であり、ときには司会者も無視された。

近年、社会的スキルやコミュニケーションスキルの獲得できていない子どもや青少年が増加している。大学生においても同様であり、「対人緊張不安」や「友人が作れない」というメンタルヘルス、コミュニケーションスキルに関わる問題を有する学生が増加している。大学当局はこれらの学生への対応に苦慮している。体育・スポーツ活動における人間関係の促進効果は体育関係者なら誰でも分かる。しかし、この効果の問題はなぜかあまり吟味されてこなかった。これまで、我々は健康・体力の維持増進に焦点を当て、体育の必要性を主張してきた。青少年の社会性の現状を考えると、もう一度体育・スポーツ活動における社会的効果の問題を考え直してはどうかと考えた。しかも、スキルという側面から捉えることであった。もうひとつは、スポーツ競技におけるパフォーマンス向上やチームビルディングの問題はコミュニケーションを抜き



司会の橋本公雄氏

にしては語れない。ここに、本シンポジウムのテーマ設定の理由があった。

杉山先生は「体育・スポーツにおけるコミュニケーションスキル」と題して、先行研究の成果、スキルに関連する用語の定義と構成要素、コミュニケーションスキルを捉える視点などを述べ、体育・スポーツ場面でのコミュニケーションスキル獲得にまつわる諸問題を提起した。チャンネルとコーディングの言葉が印象に残った。

吉澤先生は「スポーツ活動におけるコミュニケーションと指導者の役割」と題して、スポーツ場面における選手と指導者のコミュニケーションの問題を指導スキルの観点から話題を展開された。声のかけ方ひとつで、選手は生かされも殺されもするという印象を受け、「声」の重要性を痛感した。

柳先生は「野外教育におけるコミュニケーションスキルの獲得」と題して、野外キャンプで生き生きとした子どもの姿をスライドで見せながら、野外活動で展開されるコミュニケーションスキル獲得の技法・プログラムを話された。質疑応答では、さすがに野外活動のプロフェッショナルだなと感じさせる場面がいくつもあった。

テレビ視聴時間の増加、インターネット、ファミコン、パソコンゲームなどの使用時間の増加と身体活動・運動の減少。バーチャルな世界での体験の増加とリアリティの世界での経験の不足がある。コミュニケーションスキルは実体験の中でしか培われない。バーチャルな世界に他者は存在しない。他者を理解することの難しさはあるにせよ、他者との接触を抜きにして健全な成長・発達はない。体育、スポーツ、野外での身体活動は、他者を理解し自己を知る絶好の機会。コミュニケーションスキルが獲得される世界であることを再確認し、体系的かつ実証的研究を進めていきたいものである。



杉山佳生氏



吉澤洋二氏



柳 敏晴氏

シンポジウムを傍聴して

鈴木 壯 (岐阜大学)

「スポーツとコミュニケーション—身体とことばをつなぐスキルトレーニング—」というテーマのシンポジウムであった。初めに司会者の橋本先生(九州大学)からシンポジウムの趣旨説明がなされた。対人関係が困難、あるいは対人緊張が大きい学生が増えてきており、彼らに対して体育・スポーツの実践がコミュニケーションスキルを高める可能性があるのではないか、そのことからコミュニケーションスキルに関わる研究の可能性を探ってみたいというようなことであった。重要なテーマが選ばれたと思った。

そして、3名の先生がそれぞれの立場から話題提供された。

一人目は、柳先生(鹿屋体育大学)。「野外教育におけるコミュニケーションスキルの獲得」と題して、野外教育場面でのコミュニケーションスキルを獲得するためのプログラムや技法について毎年実践されている野外教育場面での例を示して話題提供された。

二人目は、吉澤先生(名古屋経済大学)。「スポーツ活動におけるコミュニケーションの役割」と題して、これまで関わってこられた卓球選手への関わりから、スポーツ場面における選手と指導者のコミュニケーションについて話題提供された。行動分析によって選手のポジティブな行動を引き出すようなコミュニケーションスキルについて実際例を示しながら述べられた。

三人目は、杉山先生(九州大学)。「体育・スポーツにおけるコミュニケーションスキル」と題して、これまでのコミュニケーションスキルに関連するスキルを概観し、各スキルの構成要素や定義、各種スキルの関連づけをされた後、コミュニケーションスキルを捉える視点をコミュニケーションチャンネルとコーディングという二つに分け、それら

について概観された。その後、3つの研究課題を提示された。

話題提供されたことは概ね納得させられるものであった。実際例を報告された2名の先生は実践されていることなので説得力のある内容であった。それを受けて、杉山先生は今後の研究の指針を示された。

しかし、やや不満が残るところもあった。実践例の報告は、いずれも現象や方法が述べられはいたが、たとえばコミュニケーションスキルを向上させていく過程をもう少しわかりたかった。そのときの指導者側の心理的スタンスについても知りたかった。また、指導者のコミュニケーションスキルを向上させることが必要であるとしても、それをどのようにして行うかについて知りたかった。その辺りのことは研究上の説明が難しいのかもしれないが、筆者としては大いに関心のあるところである。

もうひとつ、杉山先生も何度か述べられていたことではあるが、臨床心理学、特に深層心理学的な視点が必要のように感じられた。筆者のような心理力動論的な観点に立つ者にとって、表面上のコミュニケーションを見ても、実は非常に大切な見えないところでのコミュニケーションがわからないので、どのようなコミュニケーションがあるのか、どのようになされているのかについてはわからないように思われるからである。そういった視点を抜きにしてコミュニケーションスキルについての研究は進展しにくいように思われる。体育・スポーツでのコミュニケーションは「からだ」のことを抜きにしては語れることは少なく、からだを動かすことによって表出される通常では見えないところでのコミュニケーションの研究こそ大切に思われるのである。

シンポジウム傍聴記

石倉忠夫（同志社大学）

本シンポジウムは、社会的スキルやコミュニケーションスキルの劣る子どもや青少年の増加という社会現象が指摘されている昨今、コミュニケーション促進作用があると言われていたスポーツ活動を研究課題として取り組むための整理の場を設けることが主旨であった。

始めに、柳先生から野外教育におけるコミュニケーションスキル獲得のためのプログラムや技法、参加者と接する時の基本的な注意事項等についてお話しいただいた。スポーツ活動におけるコミュニケーションづくりに役立つヒントを数多く提供していただいた。

次に、吉澤先生からスポーツ場面における選手と指導者のコミュニケーションというテーマで、行動分析コードとその利用法について卓球選手の事例をあげながら紹介頂いた。「主役は選手」であり、選手の成長やポジティブな行動そして自立心に指導者の言動や行動が大きく関わるという「働きかけ方の重要性」を再認識することができた。

最後に杉山先生からは体育・スポーツにおけるコミュニケーションスキルの概念やこれに関連するキーワードの定義、そして今後の研究課題が指摘された。特にライフスキル、心理的スキル、個人的スキル、社会的スキル、コミュニケーションスキル等の各種スキルの関連づけをされており、混乱している私の頭の中をスッキリと整理していただいた。

一つの疑問が残った。それは時代や社会の変化とともに理想とされるスキル像が変化する可能性があるのではないかとということである。例えば、情緒を表に出さないことが良しとされていたのが、表に出すことが良いこととして社会的に認識されるという点である。

このシンポジウムをきっかけに、体育やスポーツ活動が副次的にコミュニケーション促進作用があるとアピールする研究が数多く報告されるようになることを期待したい。



質問中の高見和至氏

一般研究発表

口頭発表

演題番号 036C30101 ~ 036C30104座長：竹之内 隆志（名古屋大学）

「高校・大学サッカー選手の心理的成熟」

長谷川 望（中京大学大学院）

「基礎スキー競技選手の技能レベルからみたパーソナリティと特性・状態不安について」

橋口 泰一（日本大学大学院）

「体育授業が児童の自尊感情に及ぼす影響について ―自尊感情の安定・不安定次元からの検討―」

賀川 昌明（鳴門教育大学）

「1966年から2002年にいたる幼児の運動能力発達の年次推移」

森 司朗（東京学芸大学）

演題番号 036C30105 ~ 036C30107座長：西田 保（名古屋大学）

「運動継続のための情報提供型介入が行動意図に及ぼす効果」

村上 雅彦（九州大学大学院）

「ウォーキング継続化への介入の試み ―快適自己ペースと運動継続化の螺旋モデルを用いて―」

橋本 公雄（九州大学）

「健康度・生活習慣の変容に関する研究（1） ―診断検査の再構成と年代的特徴―」

徳永 幹雄（第一福祉大学）



橋口泰一氏



村上雅彦氏

演題番号 036E10701 ～ 036E10704

座長：筒井 清次郎（愛知教育大学）

「走り幅跳びの学習における助走ストラテジーの変容」

中村 祥子（名古屋大学大学院）

「連続打球動作における分岐現象に伴うヒステリシス効果 ー同一入力に対する2つの異なる出力の規則性ー」

山本 裕二（名古屋大学）

「スキル学習に有効なKRのフィードバック・スケジュール ーKRの呈示頻度とその情報量についてー」

田島 誠（川崎医療福祉大学）

「運動情報を符号化することば」

田中 雅人（愛媛大学）

演題番号 036E10705 ～ 036E10707

座長：土屋 裕睦（大阪体育大学）

「大学生が持つ自己の身体に対する意識の分析 ー第1報：身体意識に影響を及ぼす要因に関する性差の検討ー」

遠藤 俊郎（山梨大学）

「舞台空間使用を用いたジェンダー・アイデンティティ測定の有効性の検討」

井上 摩紀（大谷大学）

「古典バレエのイメージにおける審美性因子について ーソロパートを抽出してー」

猪崎 弥生（中京女子大学）



田島 誠氏



井上摩紀氏

演題番号 038 法文 B201 ～ 038 法文 B203

座長：鈴木 壮（岐阜大学）

「児童の組織キャンプ体験に伴う日常生活行動への影響 —身体活動量およびTV視聴時間に注目して—」

西田 順一（九州大学大学院）

「スポーツ活動を素材とした人間関係トレーニングプログラムの効果」

渋谷 崇行（新潟工科大学）

「大学生の運動部離れ現象の原因究明に関する研究 —学生生活観および自己鍛錬に対する価値観の視点から—」

本田 勝義（東和大学）

演題番号 038 法文 B301 ～ 038 法文 B303

座長：阿江 美恵子（東京女子体育大学）

「ビデオ映像を用いたアメリカンフットボールの戦術トレーニング」

村井 剛（中京大学大学院）

「公的自意識の高さと性別にみた運動パフォーマンスに及ぼす観衆効果」

筒井 清次郎（愛知教育大学）

「視覚障害児におけるリズム表現活動の心理生理学的検討 —心拍数・皮膚温を指標として—」

平井 タカネ（奈良女子大学）



西田順一氏



平井タカネ氏

口頭発表傍聴記

賀川昌明（鳴門教育大学）

9月末にも関わらず、30度を越すという暑さの中で口頭発表を傍聴した。事務局からの依頼では、どのセッションでも自由に選んでいいということであった。ひょっとすると他の報告者と重複するかもしれないが、筆者自身も口頭発表した9月26日のC会場における第2セッションについて報告する。

本セッションは、健康増進を主目的とする運動行動に関する研究が3題発表された。そのうち最初の2題はウォーキングイベントへの参加者を対象に運動継続を促進するための情報提供を行い、その介入効果を検証しようとするものであった。

まず、九州大学大学院人間環境学府の村上雅彦氏は「運動継続のための情報提供型介入が行動意図に及ぼす効果」について発表された。この研究では運動行動について「無関心期」「準備期」「実行期」「継続期」という変化ステージを設定し、それぞれにおける介入効果を検討している。その結果、変化ステージによって介入効果が異なることが報告された。その後、座長及びフロアーからデータ中の行動得点の意味や情報提供を中心とした介入方法に関する質問や意見が提示され、それらを中心に討議が行われた。

続いて、九州大学健康科学センターの橋本公雄氏が「ウォーキング継続化への介入の試みー快適自己ペースと運動継続化の螺旋モデルを用いてー」という題目で発表された。この研究は、運動を継続するためには「目標設定」「結果の知識」「快適経験」「成功体験」という要素を螺旋的に体験する必要があるというモデルに基づくものである。そして「快適自己ペースの方法や効果」「運動継続化の螺旋モデルに用いられる要素」に関する情報を提供し、その効果を継続促進群、認知情報群別に検討している。その結果、運動習慣のない者では継続促進群、認知情報群、非介入群の順に継続率が高いという

傾向が示されたことが報告された。

これらの研究は、対象者の特性に応じた情報提供が運動継続に効果的であるという点で示唆に富んだものであった。しかしながら、筆者自身も質問させていただいたが、その提供情報の質的・量的最適性といった具体的な観点からの知見も提供できるのならば、運動行動への参加促進・継続に対して、より一層の力を発揮するように思われる。

最後に第一福祉大学の徳永幹雄氏が「健康度・生活習慣の変容に関する研究(1)ー診断検査の再構成と年代的特徴ー」という題目で発表された。この研究は、健康度・生活習慣を診断するための質問項目を作成し、その信頼性を検討するとともに、中学生から社会人までに適用したデータを分析したものである。その結果、大学生で生活習慣得点が最低になること、健康度や生活習慣得点と学業成績とに関連がありそうといったこと等が報告された。

運動やスポーツが健康に及ぼす効果を主張していくためには、今後、こういった視点からの実証的なデータを積み重ねていく必要性を感じた。



賀川昌明氏

口頭発表傍聴記

中村祥子（名古屋大学大学院）

修士課程の私がこのような筆述の機会を頂けたということで、同世代の方に今回の口頭発表の傍聴と私自身の発表体験を通して、何か伝えられるような傍聴記にしたいと思います。

修士課程のみなさんは、学会での口頭発表にどのような印象をお持ちでしょうか？私は今回初めて口頭発表をさせていただきましたが、発表する前まで、口頭発表は、「完成した自分の研究を、多くの方に知ってもらう場」であると思っていました。確かにその考えに間違いはないと思います。研究結果とそれに対する自分の考察をしっかりまとめ、多くの方にその考えを理解してもらえるよう、発表の工夫・準備をすることは必要不可欠です。十分に発表準備を行い、満足の行く発表ができた末には、私自身も大きく成長することができると思います。

しかし、口頭発表にはそれ以上の意義があることを、今回私自身の発表と他の発表の傍聴を通して知ることができました。その意義とは、多くの方から自分の研究に対する意見をもらえることです。

私自身を始め、どの口頭発表においても、学校や分野を越えた様々な方からバラエティーに富んだ意見を頂くことができます。時には、苦勞して準備した発表への批判的な意見もありますが、私のように研究を始めたばかりで視野もまだまだ狭いものにとっては、それこそ大変刺激になります。今回、注意深く口頭発表を観察していても、発表者のほとん

どの方が大変熱心に自分の発表に対する意見に耳を傾けていることに気付きました。多くの意見をもらえるということは決してはずかしいことではなく、むしろ口頭発表の醍醐味なのです。

前述しましたが、もちろん口頭発表を、「完成した自分の研究を、多くの方に知ってもらう場」であることとして心に留め、十分に発表準備をすることは必要です。しかし、私達のような新米研究者にとっては、このことがプレッシャーとなり、口頭発表までにはなかなか腰が上がらないということが多々あると思います。実際に私もそうでした。そこで少し考え方を変え、口頭発表を、「十分に自分なりに考察した研究を、多くの方に知ってもらい、意見を頂く場」であると考えてはどうでしょうか。私達が今やらなければいけないことは、とにかく今正しいと思うことをもって、全力でぶつかっていくことだと思います。私達の研究者としての出発点は、きっとそこからです。

傍聴した発表の具体的な内容に触れることなく傍聴記とするのは少し心苦しいのですが、今回、口頭発表の傍聴を通じて、以上のように私自身も研究者としての心構えを再確認することができたと思います。今回、私の発表を聞いて頂き意見を下さった方に感謝の意を表して、傍聴記とさせていただきます。

口頭発表傍聴記

渋倉崇行（新潟工科大学）

一昨年の札幌、昨年の埼玉とポスター発表を行ってきた私は、今回は口頭で研究発表を行うことにしました。本大会、体育心理学専門分科会の全発表数は57題、そのうち20題が口頭発表でした。ここでは私と同じセッションで発表された3演題について、その概略と感想を報告させていただきます。前半は傍聴記、後半は発表記となります。

西田順一先生の発表は、児童の組織キャンプ経験が彼らの日常生活行動に及ぼす影響を検討したものでした。日常生活行動として今回取りあげられた変数は身体活動量とTV視聴時間でしたが、いずれの変数も組織キャンプ後の行動変容はみられないという結果でした。組織キャンプの経験が参加者の日常生活行動を向上させるものとなるためには行動変容を促す要因を特定し、それに働きかけるプログラムを組織キャンプに組み込むことが重要と思われまます。今後は、それら決定要因について検討がなされるとともに、検討結果を活かした組織キャンププログラムの開発へと発展してほしいと思いました。西田先生の発表はいつでもどこかユーモラスで聴き手を楽しませてくれます。話下手な私は是非見習いたいものです。

本田勝義先生の発表は、近年にみられる大学生の運動部離れ現象の原因を検討したものでした。大学生の学生生活観と自己鍛錬に対する価値観に注目して分析を進めているのですが、これらが運動部離れの原因であるとの仮説をどのようにして立てられたのか説明がほしいと思いました。また、本田先生も言及していることですが、運動部離れに関係があると思われる様々な要因を継続的に追っていくことに私個人も非常に興味がそそられます。例えば、そこからみえてくる事象に対応する形で運動部のあり方も変化させることができるのではないかと思うからです。発表をお聞きした後、練習が厳しくていつも憂鬱な気分グラウンドに

足を運んでいた高校時代の私を思い出しました。当時の私は、大学では絶対に運動部に入ろうとは思っていませんでした。

最後に私の発表は、スポーツ活動を素材とした人間関係トレーニングプログラムを体育の授業で実施し、その効果を検討したものでした。今回この研究を口頭発表で行った理由は、なんとといっても「仲間作りをねらいとしたプログラムを体育の授業で実施した」という新しい(?)試みを多くの先生方に聴いていただきたかったからです。しかし、こともあろうに新潟から持ち込んだ風邪の影響で私の声はほとんど悲劇的... なんととも惨めな思いで発表した15分間でしたが、それにも関わらず一生懸命聴いて下さった先生方に私は支えられる感じを持ちました。口頭発表は発表者一人で行えるものではなく、聴いて下さるフロアーの方々とともに作り上げているのだとあらためて気づくことができました。様々なかたちでサポートを提供して下さいました。皆さまに感謝したいと思います。今後はこれまで以上に丁寧な発表に心がけることができます。そして、聴く側に立った時は口頭発表を支える一員として積極的に関わりたいと思っています。



渋倉崇行氏

ポスター発表

演題番号 037E30101 ～ 037E30110

「系列パターンの追従課題における保持段階の設定が適応制御段階に及ぼす効果に関する研究」

和多野 大（大阪体育大学大学院）

「系列追従課題における文脈干渉効果 —ランダム練習条件の再検討—」

杉山 真人（大阪体育大学大学院）

「系列動作学習における学習方略の妥当性 —小学生と大学生の比較—」

工藤 孝幾（福島大学）

「サッカー選手の状況認知と記憶の範囲についての研究」

中島 康文（国際武道大学）

「バレーボールのサーブレシーブパフォーマンスに関係する知覚的要因 —多次元的多変量的アプローチによる検討—」

古田 久（広島大学大学院）

「『ともにいる』場面における共振の可能性について」

林 麗子（奈良女子大学大学院）

「バレーボールにおけるカラーボールの評価 —回転方向の検出と反応時間—」

矢野 博（神奈川大学）

「競歩動作の揺動と身体軸感覚」

平川 武仁（筑波大学大学院）

「EOGを用いたDVAトレーニング効果の解析」

吉井 泉（大阪府立大学）

「身体に意識を向けることに伴う生理心理的变化について」

野田 さとみ（大阪女子短期大学）

演題番号 037E30111～037E30120

「運動意欲に及ぼす非共有環境要因の影響」

堀井 大輔（成安造形大学）

「日本人競技者の青年期におけるスポーツ達成志向性の変化」

若山 裕晃（中京大学）

「身体的自己概念の多面的階層性モデルの検討 ―価値概念の導入―」

蓑内 豊（北星学園大学）

「体育における学習意欲診断システムの開発 ―診断検査の作成―」

西田 保（名古屋大学）

「青年期から高年期における運動意欲、社会的スキルおよび孤独感との関連」

石倉 忠夫（同志社大学）

「柔道選手における目標志向性と学習方略との関連」

広瀬 功（山梨大学大学院）

「スポーツにおける帰属スタイルの文化的差異」

磯貝 浩久（九州工業大学）

「気分の変化とパフォーマンスに関する一事例研究」

山田 クリス 孝介（日本大学大学院）

「マラソン大会参加による感情の主観的経験の変化について」

山田 秀樹（北海道東海大学）

「体調と精神的健康の関連 ―快食・快眠・快便は精神的健康をどの程度予測するのか？―」

高見 和至（川村学園女子大学）



ポスター発表の様子

演題番号 038E30101 ～ 038E30109

「大学スポーツ選手への心理的サポートに関する面接調査(1)ーソーシャル・サポートに着目してー」

土屋 裕睦 (大阪体育大学)

「大学スポーツ選手への心理的サポートに関する面接調査(2)ーライフラインの分析からー」

松本 和典 (大阪体育大学)

「女子競泳選手の自律訓練法による不安軽減効果について」

田嶋 恭江 (武庫川女子大学)

「大学スポーツ選手のライフマネジメントと精神健康状態との関係」

村上 貴聡 (九州大学)

「心理的競技能力と日常場面でのストレス対処法との関係」

杉山 佳生 (九州大学)

「日本語版身体的自己知覚プロフィールの開発ー因子分析モデルの適合性を基準とした項目選択ー」

内田 若希 (九州大学大学院)

「TAISにおける認知特性尺度の検討ー注意の方向性と自己能力の評価の視点からー」

堤 怜恵 (奈良女子大学大学院)

「遂行速度がもたらす主観的感情の変化に関する因子分析的研究」

成瀬 九美 (大阪樟蔭女子大学)

「正面画と横向き画から捉える身体像の理解」

三宅 紀子 (東京都立大学)



ポスター発表の様子

演題番号 038E30110 ～ 038E30117

「CNV からみた競争ストレスの精神生理学的特徴について」

松本 清（奈良女子大学大学院）

「事象関連電位からみた整合性の操作による反応時間の遅延について」

田中 絵実（奈良女子大学大学院）

「剣道の打突動作時と打突イメージ時における生理反応の比較」

藤尾 真理（奈良女子大学大学院）

「顕在性不安と注意集中パフォーマンス時の生理心理現象」

東山 明子（関西福祉大学）

「炭化チタンの貼付による α 波含有率と運動機能の変化」

伊達 万里子（武庫川女子大学）

「スポーツ選手に対する自律訓練法(AT)実施による生理心理学的変化 一重感暗示および温感暗示の比較一」

菅生 貴之（国立スポーツ科学センター）

「スポーツ競技における心理的ストレスを唾液中クロモグラニンAで測る試み」

水落 文夫（日本大学）

「20m シャトルランテスト中の呼気ガス動態の特性」

石井 裕明（東北学院大学大学院）



ポスター発表の様子

ポスター発表傍聴記

若山裕晃（中京大学）

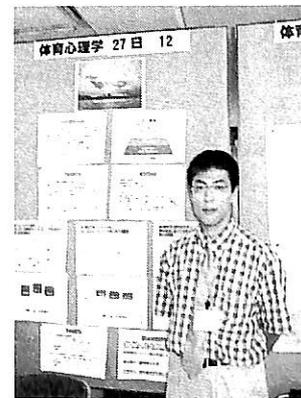
私自身3年ぶりの日本体育学会での発表の場となった第54回大会は、9月末とはいえまだまだ残暑厳しい火の国・熊本で開催された。体育心理学のポスター発表は、全13専門分科会の中で最も多く、2日間にわたる総数が37であった。内容的にもバラエティーに富んでおり非常に見ごたえのあるものであったが、ここで紹介させていただくのは私自身も方法として採り入れている質問紙を使った研究についてである。

質問紙を利用した研究方法は、体育心理の全37のポスター発表のうち40%強にあたる15の研究で採用されており、この数字を見ただけでもスタンダードで欠かすことのできない手法であることが感じられた。また、私が発表した時間帯では、10タイトルすべての発表が質問紙を利用したものであった。学習意欲診断システムの開発や、帰属スタイルの文化的差異の検証等、様々なトピックで質問紙が利用されており、どれも今後の発展が大きい期待される研究ばかりであった。

その中でも私が最も興味を喚起された研究は、藁内氏の「身体的自己概念の多面的階層性モデルの検討」および、山田秀樹氏の「マラソン大会参加による感情の主観的経験の変化について」であった。その理由は、共分散構造分析の手法が採られていたからである。共分散構造分析は、今最も注目を集めている統計的手法の一つといっても過言ではなく、私自身も研究の中で採り入れつつある。しかしながら、体育心理の領域でこの手法を使った先行研究が少ない中、マニュアル本を頼りに「これでもいいのか？」と自問自答しながら悪戦苦闘する日々を過ごしているのが現状である。しかも、この手法は明確な基準があらかじめ規定されている統計手段ではなく、パス図を使って自分で想定した複数のモデルの適合度を検証していくというのが大まかな流れである。私だけの感じ方かもしれな

いが、自分でモデルを想定するという手順が、自分の分析の進め方が独りよがりのものになっていないかという不安を促進するものである。そういう意味では、同じ手法を採り入れている人と話をすることは、自分の方法でいいのかどうか、また、更なる改良点があるのかどうかを確認できるという点で非常に有意義である。このような理由で藁内・山田両氏とディスカッションすることを大いに楽しみにしていたのであるが、どちらも私と同じ時間帯での発表だったため、残念ながらほとんど意見交換はできなかった。それでも藁内氏とは運良くポスターが隣同士だったので、パス図を作成するときの苦労話等は何とか伺うことができたのだが、やはりもう少し内容の濃い話がしたかった。

こうして少々もどかしさを残しながら発表時間を終えたのであったが、活気に満ち溢れたポスター発表会場の雰囲気を感じられたことは、今大会での何よりの収穫となった。発表者達は真剣そのもので、その熱意が多くの人々の関心を集めるのだと強く感じた。そして自分自身も、学会大会の活性化の一助となれるよう努力していきたいと決意を新たにしたのであった。



若山裕晃氏

ポスター発表傍聴記

山田秀樹（北海道東海大学）

大学院2年次に鹿児島で行なわれた体育学会に初めて参加してから、すでに20年が経とうとしている。当時は、ポスター発表は無く、口頭発表だけであった。ポスター発表には、「深いディスカッションができる」「口頭発表の質問では、躊躇する質問でも訊くことができる」等のメリット、「一度に多くの人に説明できない」「自分の在籍時間には、他のポスターを見ることできない」等のデメリットはあるが、最近の傾向としては、口頭発表よりポスター発表の演題数が多くなっている。本学会では、傍聴記の依頼を受け、できるだけ多くのポスターを拝聴し、執筆することを決意して臨んだ。

本大会のポスター発表会場は、教室ということもあり少し狭く感じた。実際、27日の発表は、バイオメカニクス、体育方法学、運動生理学と重なり、中央通路は大変混雑していた。体育館のような広いスペースでの会場設定が、望まれるところである。いくつかのポスターでは、責任在籍時間外でも活発なディスカッションが行なわれていた。私の在籍時間も14:00～15:00であったが、早々に来ていただいた先生方とのディスカッションを13:00頃から始めた。今回は、同領域が同在籍時間であったため、拝聴したいポスターにいけなかったことが残念であった。奇数・偶数演題番号で在籍時間を割り当てれば、少なくとも半分の同領域を聴くことができ、また、隣接するポスターにスペースが確保され、混雑緩和できるのではないだろうか。27日は、15:10にシンポジウム会場行きのバスが出るため、15:00には急いでポスターを撤去される先生方も多く、プログラムの進行を工夫してはしなかった。

27日・28日の両日で、主にディスカッションさせていただいたのは、以下の発表である。糞内先生の「身体的自己概念の多面的階層モデルの検討」では、共分散構造分析について、私自身がまだ理解

不足の点を教えていただいた。山田先生の「気分の変化とパフォーマンスに関する一事例研究」では、3D-CLOMの有効性について、私がPOMSを研究で用いていることから興味深く拝聴した。高見先生の「体調と精神的健康」では、運動と精神的健康の媒介変数として体調を仮定した点に、大変興味を持った。田嶋先生の「女子競泳選手の自律訓練法による不安軽減効果について」では、私が基礎スキー選手のメンタルトレーニングにATを用いた経験から、興味深く拝聴した。村上先生の「大学スポーツ選手のライフマネジメントと精神的健康状態との関係」では、トップアスリートや個人・集団スポーツでも同様の関係が成り立つと考えられるのかについて、ディスカッションした。堤先生の「TAISにおける認知特性尺度の検討」では、注意の方向性と自己能力の評価の観点からの検討であり、興味深い研究であった。

本学会では、傍聴記を執筆するため、積極的に各ポスターを拝聴したが、それぞれの先生方の研究に対する熱意と姿勢が伝わるものであった。



山田秀樹氏

ポスター発表傍聴記

内田若希（九州大学大学院）

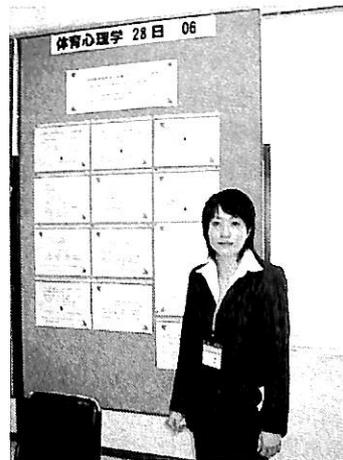
本年度の学会開催地である熊本は、3日間とも晴天に恵まれ、少し汗ばむくらいの陽気でした。その残暑に負けないくらい、ポスター発表の会場では熱い議論が交わされていたように思います。ポスター発表は口頭発表と違い、発表者の先生方とコアな部分まで議論できる絶好の機会だと思います。私も、若輩ながら数名の先生方とお話をさせていただきました。その中でも、とくに深く議論をさせていただいた高見和至先生と蓑内豊先生の発表を中心に、感想を書かせていただきます。

高見和至先生の演題は、「体調と精神的健康の関連—快食・快眠・快便は精神的健康をどの程度予測するのか?—」というものでした。その内容は、体調の快食、快眠、快便の3要因によって精神的健康がどの程度予測できるのかを、共分散構造分析を用いて検討したものでした。初めに研究の目的、方法、および結果を簡潔に説明していただきました。精神的健康の予測において直接効果と間接効果を用いて結果を解釈しており、非常に興味深く、新しい視座を得ることができました。

蓑内豊先生の演題は、「身体的自己概念の多面的階層性モデルの検討—価値概念の導入—」でした。私にとって、研究の源流が同じである蓑内先生と直接お話をすることが、学会に参加する楽しみの一つになっています（普段は、私が福岡在住、蓑内先生が北海道在住とお会いする機会がない）。今回の蓑内先生の発表は、これまでの研究過程で出てきた問題点を踏まえ、Fox & Corbin (1989) が提示した多面的階層性モデルの媒介変数である「身体全般」の因子を、「身体全般」と「価値」に分離したモデルを作り、共分散構造分析で適合度をみたものでした。私自身も、Fox & Corbin (1989) のモデルを援用しているので、モデルや使用する尺度の問題点、分析方法などについて議論させていた

だけ、非常に有意義な時間を過ごせました。

さて、上述した両先生の発表もそうでしたが、全体的に共分散構造分析を用いた発表が多く見受けられました。近年、日本心理学会や健康心理学会など、さまざまな関連学会でも共分散構造分析を用いた研究が増えてきており、研究の「流行」といったところでしょうか。私自身も、共分散構造分析を用いて研究を行っています。この分析は、分析ソフトを使ってしまえば簡単に結果が出ますが、エビデンスに基づいた仮説、統計学的データの解釈など、きちんと把握すべきことが多く、非常に難しい分析方法だと思います。しかし、ポスター発表の場は、統計に関する初歩的な質問を交わしたり、統計の方法論について議論することでお互いの理解をより深めることができ、有意義な場であると思いました。最後になりましたが、私の質問に熱心に回答してくださった先生方、ならびに私のポスター発表を傍聴してくださった先生方に、この場を借りてお礼申し上げます。



内田若希氏

ポスター発表傍聴記

水落文夫（日本大学）

体育心理学ポスター発表会場は、いつも通り3日間とも盛況でした。掲示板そのものが大きいことと、コミュニケーションのスペースをたっぷりとっていたことで、人の輪はポスターを中心として幾重にもなっていました。討論の話題は、発表内容についてはもちろんですが、研究の動向、大学・研究所の近況、さらには最近の運動不足を嘆く話まで、体育学会らしく他の分野も巻き込んで広がりを見せていました。ポスター発表での情報交換は人間性を伴う濃厚さが特徴で、口頭発表ではなかなか味わえない場を提供してくれます。

当初の発表申込みは全体で100題にも満たないとのことで、体育学会離れが心配されたそうです。私も追加受付滑り込みで発表申込みをしたのですが、心配をよそに最終的には474題もの一般発表がありました。体育心理学は56題と運動生理学やバイオメカニクスを超える発表数で、中でも大学院生の筆頭発表者は32%と、これも高い比率でした。最近ではスポーツ心理学会のホームページを見て、学会事務局に問い合わせる大学生や高校生も数多くみられます。体育・スポーツ心理学研究の社会への貢献が認知されてきたとともに、この分野の研究を志す若い方々が増え、研究が活性化されていることが伺えます。

発表にみられる個々の研究テーマは多岐にわたっていました。その中で、動機、興奮、感情、自意識などを変容・適応させる要因分析やモデル検証といった基礎的研究と、その成果に基づくコンディショニング、ストレス・ライフマネジメント、カウンセリング、メンタルヘルスなどの応用的研究がかなりの割合を占めていました。そこで、これらを見ながらの雑感をいくつかあげようと思います。

これらの基礎的研究では、心の状態を変容させる要因として様々な形の運動行動やスポーツ行動が取りあげられています。しかし、いずれもいくつ

かの媒介変数を想定したり、パフォーマンス、発達、性、民族との関連を求めるなど、研究の視点はより多次元に展開されていました。ただ、ほとんどは一般健常者や競技者が対象で、たとえば高齢者および障害者をカバーした研究発表が極めて少ないという印象を受けました。また、競技者より一般の人を対象とした研究が多く、その傾向は社会における健康運動・スポーツの推進と同期しているように感じました。応用的研究の中には、地域型健康づくり事業などに介入し、一般の人の運動継続や精神的健康への影響を検証するものもみられました。このように、地域社会の要求に応じ積極的に介入する形で進める研究も、今後さらに期待されることでしょう。それからもう一つ、これらの発表のほとんど、そして体育心理学では54%の発表で、多種多様な質問紙による心理テストの開発や利用がなされていました。この分野では過去から将来にわたり、どれだけの心理テストを活用し、知識として蓄積していくのかと思いつつ、誰かこれをデータベース化してくれれば、と身勝手な思いもついでに浮かびました。



水落文夫氏

学会参加記

日本体育学会第54回大会参加記

高井和夫（筑波大学大学院人間総合科学研究科 研究員(COE)）

本大会は9月26日から28日にかけて熊本大学を中心に開催された。ここでは大会期間中の思い出について簡単に記すことにする。羽田から空路熊本に入る。生来の腰の重さから旅券・宿泊の予約が遅れ主要路線は空き無しとのこと。ふとした拍子にインターネット検索サイトでアクセスしたところ某社に行き当る。電話連絡をとったところいわゆる格安料金で出発便とホテルも選べるとの返事。大変助かった。熊本市内に近づくと眼下に阿蘇のカルデラと草千里がひろがる。空港からは交通センターまでリムジンバスがあり市内は若干混雑するがスムーズに宿泊先までたどり着く。長いアーケード街と交差する路地からなる繁華街はかなりの賑わいであった。熊本の夜は長いらしく朝5:00前でも客待ちタクシーの列がかなりあった。

大会1日目は口頭発表とキーノートレクチャー、3日目は口頭およびポスター発表。口頭発表に関しては時間が以前より余裕があり演題ごとの質疑応答が5分確保されており、演者とフロア両者に親切な設定になったと思う。以前は関連する3演題程度を一気に発表し、質疑応答がまとめてなされ、演者によってディスカッションの時間に偏りがあった問題が解消された。また口頭発表とポスター発表の時間帯が効果的に分けられており、大会参加者のニーズに応えた形になった。手元のプログラムによると全57演題のうち口頭20題、ポスター37題。平成8年から14年までの演題数が47-52-46-54-44-49-45題だったが、今回発表抄録締切が延長されたことも手伝ってかポスター中心にたくさんの発表がなされ大変な盛況だった。キーノートレクチャーには船越先生（大教大）と上地先生（早大）が登壇。学会の重鎮と次世代を担う若手のお話を

拝聴し、本専門分科会の歴史の厚みと人材の厚みを知る。

大会2日目はシンポジウムとポスター発表。シンポジウムは橋本先生（九大）「スポーツとコミュニケーション」という演題の下、吉沢先生（名経大）、柳先生（鹿体大）、杉山先生（九大）がシンポジスト。コーチング、野外キャンプ、そして理論と多彩な切り口からこの問題について討論がなされた。議論のやり取りではフロアからの挙手のみでなく、シンポジスト間でも行われ、議論が散逸することなく聴衆側においても理解が深まる好演出であった。私事ながら杉山先生は大学院時代の先輩であり、当時から生き字引的存在であったが、教官になられた後もお人柄同様に真摯な努力を積み重ねており、非常にエレガントなレクチャー内容に感銘を受けた。学会参加の意義は多様であるが、単に知識・情報の伝授にとどまらず、各研究者のお仕事ぶり、その発表内容の背後にある研究者の信念、あるいはその言説にたどり着くまでの経緯など読めくると、二重三重に興味深い。この「水と緑と火の国くまもと」から来年の「日本の屋根」信州での学会での先生方との再会が楽しみである。

本専門分科会会報（第15号）の巻頭言には杉原先生（東学大）が体育学会の「曲り角」を旨とする文章を拝見し、6000人超の会員数を抱える巨大会会の舵取りの難しさを知った。本専門分科会員数は母体学会のちょうど1割（600人）にあたり内包する課題も同様であるが、その運営においては役員各位ならびに事務局である西田先生を始めとする名大スタッフのご尽力を賜っている。記して感謝申し上げます。

日本体育学会第54回大会に参加して

吉田伊津美（福岡教育大学）

9月26日から28日にかけての三日間、第54回大会は熊本大学で開催されました。福岡からの参加ということで前日の夜に車で熊本入りしましたが、高速は快調だったものの熊本ICを降りてからがかなりの混みよう。学会初日の朝も、道路の込み具合と複雑さと路面電車とで、わずかな距離であったにもかかわらず非常に消耗しながらの会場到着でした。しかし、大学内では学生の方がとても親切に案内してくださり、受付を済ませて目指す会場へはスムーズにたどり着けました。

今大会は三日間を通して、体育心理学専門分科会の口頭発表、ポスター発表、測定評価のワークショップ、合同シンポジウム、体育心理学のシンポジウム、発育発達のシンポジウムなどへと足を運びました。初日の体育心理学の口頭発表は、初日の朝一のせいか、分散してしまっていたためか、それとも会場が広くてそう感じただけでしょうか、私も共同研究者として発表していましたが、閑散としていて活気のある会場ではなかったように感じました。これに対して、ポスター発表の会場はいつ行っても大勢の人で賑わっており非常に対象的でした。

測定評価のワークショップでは、「平均値の比較、分散分析」というテーマであったためか、学生の参加も多かったようです(周りの私語が学生風でした)。個人的には、たくさんある多重比較検定のそれぞれの特性とその選択等について整理できた点で非常に有意義なワークショップでした。壁際や通路にまで補助椅子を出していましたが、それでもまだ立っている先生がいらっしゃるほど大盛

況でした。

学会本部企画の合同シンポジウムは3つ企画されていましたが、そのうちの1つ「運動スキルの評価と指導を再考する」(世話役分科会:バイオメカニクス)では、体育心理学、運動生理学、体育科教育学、測定評価、体育方法、体育史の各専門分科会より演者の先生方が登壇されました。興味深いテーマだったのですが、演者間で「スキル」についての共通の理解がなく(これは仕方のないことでしょうか)、それぞれの演者からスキルについての規定もなされないままの話だったため、理解の深まらないまま終わってしまいました。このように異なった専門領域が一堂に会するという企画は、体育学会ならではのものではないかと思います。3時間という時間で6人の演者では時間的にも厳しかったようですし、期待していただけに残念でした。

学会大会では、毎回、発表やシンポジウム等で先生方のお話を拝聴したり、久しぶりにお会いする先生方とお話することで、多大な刺激を受けるとともにやる気をチャージさせていただいています。また、普段の生活から離れて違った土地で開催される大会は、少しの旅行気分が味わえるという利点もあります。今回の観光は水前寺公園だけでしたが、馬刺しや郷土料理も一通り味わえたり、揚げたてのからしれんこんは予想以上においしいものでした。

それにしても9月も終わりだということに非常に暑い3日間でした。北海道から参加された先生にとっては、今年一番の暑さだったそうです…。

日本体育学会第54回大会参加記

— 自己の潜在変数を探る —

堀井大輔（成安造形大学）

夏の余韻を十分に残す九州・熊本大学にて、日本体育学会第54回大会が開催されました。関西在住の私にとって、九州へは昨年日本スポーツ心理学会に続いて2年連続の上陸となりました。行きの機内では、手に汗を握る緊張感を味わい、とっさに呼吸法でリラックス状態を心掛けたのですが、心拍数の上昇するのがわかりました。スキルの獲得について、そう言えば、スポーツメンタルトレーニング教本に毎日くり返すことで切り替えができるようになって書いてあったかな～と思い出しながら会場へ向かいました。

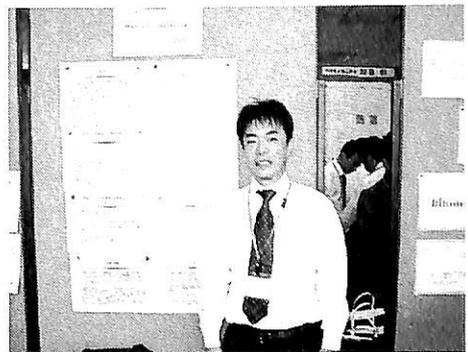
私は学会前日に行われたSMT指導士相互研修および連絡協議会から参加させていただきました。荒木先生のアーチェリーナショナルチームへのサポート経過では、SMT指導士と選手・コーチの関係づくりの重要性、選手自身でデータを管理してトレーニングを行なう自己学習についての有用性を再認識することができました。高妻先生からは、サポート途中である柔道ナショナルチームについて、先日の世界選手権での詳細なマル秘資料の提示と貴重な報告が行われました。その他、地方での研修会の開催についても協議され、メンタルトレーニングについての共通理解や認識がますます広まるものと思われました。

さて、私の今回の学会参加には研究発表はもちろんですが、目的のひとつに共分散構造分析の理解を深めることがありました。したがって、測定評価の分野にも積極的に顔を出すことにしました。初日午前のポスター発表では、分析の方法や苦労している点(分散の固定や方程式の解釈など)をどのように解決していくかについて、かなりの時間を費やして相互に情報交換することができました。自分自身の現時点での理解度がはっきりと認識できたことや、新しい知識が増えた点でかなり満足

のいくものでした。その後のシンポジウムは、「運動スキルの評価と指導を再考する」というテーマに惹かれて会場へ行きました。体育心理の側面から今中先生は、知覚とスキルについて運動制御の観点から述べられました。知覚と運動は乖離していることや、自動化された動きを意識するときこちなくなるという意識と無意識の関係などを興味深く拝聴できました。

2日目には、自分自身の発表がありましたが、合間をみてできるだけ多くの発表などを聞き、見識を広めようと会場中を放浪しておりました。所用で最終日まで参加できず、この日の発表終了後すぐに帰路についたことは心残りでありました。

今回の大会参加は、他の分科会の発表、シンポジウム、ワークショップなどに直接触れることが出来たという点でも、私にとって非常に意義のある大会でありました。さらに、未熟な教育関係者・研究者の端くれとして、自分自身の内面にある潜在変数をいかに見つけ出すか、これまでにやってきた研究(観測変数)との関連について、その意味づけをどのように解釈していくかなどと自問自答する機会ともなりました。



堀井大輔氏

IV. 研究会の活動報告・参加記

研究会の活動報告・参加記

第6回スポーツ社会心理学研究会

西田順一（福岡大学）

第6回スポーツ社会心理学研究会は、日本スポーツ心理学会の終了後に筑波大学のSPEC教室にて開催されました。本研究会は、毎年、体育学会の際に開催されてきましたが、今回は筑波でのスポ心での開催の方が多くのメンバーが参加しやすいという理由でこの時期の開催となりました。

本稿では、スポ心でのラウンドテーブルディスカッション(RTD)および社会心理研究会の模様について御報告させて頂きたいと思います。はじめに、12月3日のスポ心初日には、社会心理学関連のRTD「子どもと社会のためのスポーツ社会心理学の構築」が行われました。この場には、社会心理学研究会の会員である先生方に加え、日頃からこの領域に関心をもたれておられる数名の先生方が加わり、20名程度でのラウンドテーブルとなりました。大学院生数名(東京学芸大学チーム他)の参加も見られ、フレッシュな印象を受けました。この場では、阿江美恵子先生(東京女子体育大学)が司会を務められ、三木ひろみ先生(筑波大学)に話題提供を頂きました。内容は、社会心理学の重要な課題の1つである‘ソーシャルスキル’について焦点を当ててお話ししました。近年では、子どもの共感性の乏しさ、コミュニケーション能力の低下などといった社会性の低下が指摘されているという背景の共通認識を得た後に、体育・スポーツ領域での社会性向上のための可能性について議論した。とくに、ソーシャルスキルという概念の整理や社会性との関係などについては、深い議論がなされ、個人的には理解が一層深まった。また、ソーシャルスキルプログラムの授業実践の紹介もなされた。これらを通じて、今後のソーシャルスキル研究の方

向性が提示されたように感じた。子どもたちのためのソーシャルスキル改善に向けた介入研究は重要な研究テーマと認識していますので、今回は大きな刺激となりました。

続いて、12月5日の社会心理学研究会では、RTDの流れを受け、引き続きソーシャルスキル関連の内容をさらに発展させた形でディスカッションが進められました。参加者は、RTDにも参加していた先生方がほとんどでした。ここでは、大学教育におけるソーシャルスキルプログラムの必要性、クラブ指導や体育授業を想定した場合の具体的なソーシャルスキルプログラムの実施方法、といった内容が幅広く話し合われました。これらから、体育・スポーツ分野においても十分にソーシャルスキルプログラムが確立されていく可能性を実感することができました。

最後になりましたが、今回の研究会およびRTDの準備をして頂いた、阿江美恵子先生、三木ひろみ先生に感謝申し上げます。貴重な機会をどうもありがとうございました。

ところで、スポーツ社会心理学研究会では現在「体育教師のための心理学 (Psychology for Physical Educators. Yves Vanden Auweele (著) Human Kinetics (Sd))」という本を分担で翻訳しています。現在は、編集作業が進められていますが、もう少しで大修館書店より発刊となる見通しです。現場で体育指導に関わる教師や体育教師を目指す学生のために役立つ内容から構成されています。発刊の際には、是非、ご参照ください。

IV. 研究会の活動報告・参加記

第13回臨床スポーツ心理研究会

上野耕平（鳥取大学）

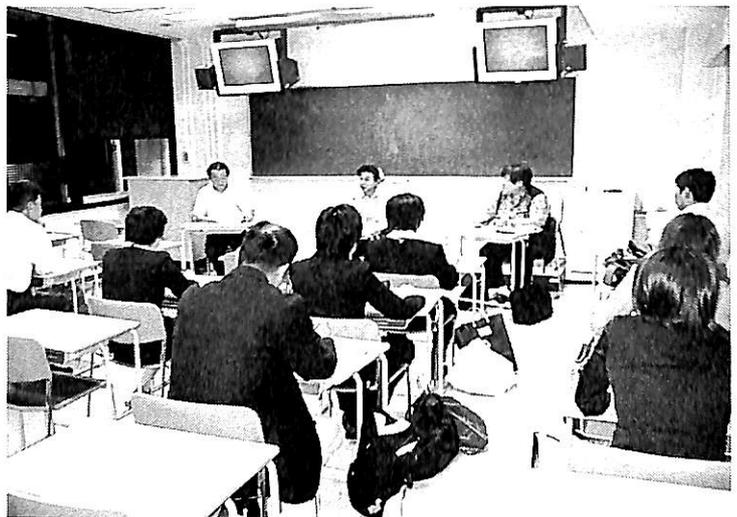
平成15年9月26日（金）19:00より、学会会場である熊本大学にて「第13回臨床スポーツ心理研究会」が開催されました。今年の研究会は、事例提供者に中込四郎先生（筑波大学）、指定討論者に中島登代子先生（鹿屋体育大学）をお迎えし、鈴木壮先生（岐阜大学）の司会で開催されました。3氏はいずれも臨床心理士であられ、現場での豊富な臨床経験をお持ちであることから、素人である私は大きな期待と不安を抱いての参加となりました。

研究会では、まず中込先生が事例を紹介され、その後フロアとの間で活発な質疑応答が交わされました。質疑開始後しばらくして、研究会の緊張感からか質問を躊躇する空気が流れました。その際に中島先生がフロアの特に若手参加者に向かって、恥ずかしがらず自らの勉強のために発表するように促されました。中島先生のご発言にホッとしたのか、それを境に様々な質疑が交わされ、議論は次第に深まりました。そして質疑が事例の夢に及んだ際には、マリオ・ヤコービのカウンセラーとクライアントの関係に関する図式を引用され、なぜ夢を扱うのかについて、分かりやすく丁寧な解説を頂きました。また鈴木先生には、参加者の多くが気付かない重要なポイントについてタイミング良く触れることで、議論を問題の核心へと導いて頂きました。しかし参加者の多くにとっては、3氏が時折それぞれの意見を主張しつつ、事例に対する理解を深める場面に遭遇できたことが、

何よりの勉強になったのではと思われました。

研究会終了後には、政令指定都市移行を目指す「火の国熊本」市街地の居酒屋にて懇親会が催されました。熊本の名産と言えば「馬刺」。私も研究会の緊張から解放され、中込先生他、久しぶりにお目に掛かった先輩方と共に、美味しい酒と馬刺に舌鼓を打ちました。

本研究会の性格上、事例の匿名性への配慮、守秘義務が求められることから、ここでは事例や質疑の内容について詳しく触れることができず、研究会の内容を具体的に紹介しきれない部分があります。しかし前述の通り、臨床に関する特別な知識を持ち合わせない方にも、敷居は決して高いものではありません。「個」としてスポーツ選手を見ることに関心のある方、質問紙では測れない世界に興味のある方は是非ご参加下さい。



研究会の様子

スポーツ動作法研究会活動報告

飯嶋正博（順天堂大学）

第12回スポーツ・健康動作法セミナーが平成16年3月6日（土）に午後2時から5時までの3時間、順天堂大学さくらキャンパスの柔道場で開催されました。順天堂大学学部生、大学院生の外に、外部から2名、計23名の参加者がありました。開催日時はよかったです。前回同様に場所が便利な浦安体育館を使用できず、不便なキャンパスでの開催となり、外部からの参加希望者にはご迷惑をおかけし申し訳なく思っております。

セミナーの内容は、2部構成で1部では、スポーツ動作法の理論、実施法、スポーツ選手への適用例の講義を中心に行った。今回は特に健康動作法としてさらに、小学校5・6年生1学級21名に「体ほぐし」の運動として動作法を適用した事例についての報告が行われた。動作法適用の効果として身体の傾きの改善といった姿勢改善の点とYGテストの結果から攻撃性や劣等感の減少といった心理的変容が見られた。

2部では、実技研修として動作法を参加者同士でロールプレイする形式で行われた。最初に、動作法の本質である動作と運動とはどう違うかを体験することから始まった。動作法の本質である自分で動かす主動（感）と他の他者が動かす他動（感）、勝手に動く自動（感）催眠法での被動（感）の区別や特徴について体験した。

次に、身体はシステムとしてつながりを持って動いていることとその要が腰であることを体験した。その後で腰の動き、肩の動きといった身体部分のリラクゼーションと適切な力の入れ方の実習を行った。さらに座位や立位姿勢で身体部分間を身体軸を意識して動かす実習、片足立ち姿勢や中腰姿勢などの準備姿勢や特徴的な動きの基となる身体の枠組みを持った動きの実習を体験した。

最後に、実践上での問題点やその対処に対して質疑応答の形で討論を行い終了となった。

次回の開催時期と場所、内容は未定である。

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会の活動報告

高妻容一（東海大学）

この研究会は、競技力向上を目的としたメンタル面強化の情報交換会という形式で活動をしている。2003年度は、名古屋支部会と石川支部会の再活動開始と富山支部会がスタートし、全国11都市で毎月1回を基本とした情報交換会を実施している。最近は、メーリングリストやHPのBBS（掲示板）等を利用した情報交換が盛んに行われている。また、HPの質問欄にも年間100を越す質問が寄せられ、可能な限りの回答をしている。

(1) 本年は、研究会のメンバーが3つの国際学会と3つの国内学会等に参加し、メンタルトレーニングの研究や実践動向を報告した。それらの学会は下記の通りである。

- 1) 国際メンタルトレーニング学会（4年おき）：
ロシアのサンクトペテルブルグ
- 2) 国際応用スポーツ心理学会：米国のフィラデルフィア
- 3) 国際心理応用スポーツ学会：スペインのマドリッド
- 4) 日本体育学会：熊本大学
- 5) 日本フットボール学会発足セミナー：熊本大学
- 6) 日本スポーツ心理学会：筑波大学

(2) 各地区での集中講習会（1日・2日）の開催
1月：北海道旭川市，1月：東海大学，3月：北海道深川，3月：青山学院大学，4月・8月・8月（3回）：大成学院大学高校，9月：札幌学院大学等

(3) 関東地区の研究会では、11月に大リーグエキスポズのトレーニングコーチである友岡和彦氏を特別ゲストにお迎えし、大リーグにおけるメンタルトレーニングの状況、活躍する選手たちのメンタル面、大リーグで活躍する日本人プレーヤーについての話題を提供してもらった。

(4) 2004年1月には、大リーグやUSオリンピック代表野球チームを指導したケン・ラビザ博士を招待しての特別講演を4回（関東地区・関西・東京・東海大学）実施予定。

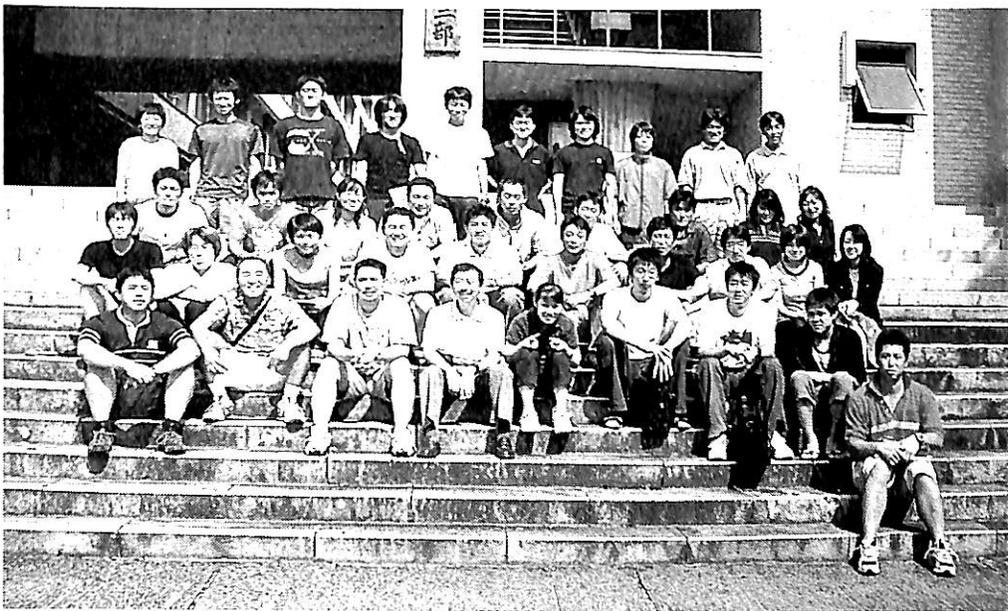
(5) 日本スポーツ心理学会では、ラウンドテーブルディスカッションにて、専門家育成システムの構築というタイトルで4名が話題提供をした。

第13回運動学習研究会報告

筒井清次郎（愛知教育大学）

2003年度の運動学習研究会が、愛知教育大学を会場に、8/18（月）から20（水）の3日間行われ、39名が参加し、17題の口頭発表と2題のポスター発表が行われた。参加者の6割が院生であるために、安価な公共宿泊施設を30名予約していたが、東海地区という地理的な便利さもあり、例年に比べて参加者が多く、宿泊先が2ヶ所に分かれざるを得なくなってしまう。このため、例年のような深夜にまで及ぶ議論の場が確保できず、その事を期待していた参加者の意に添えなかったのが残念であった。昨年度は発表内容および発表方法におい

て、準備不足の者が多かったという参加者からの指摘があり、本年度についても心配していたが、まだまだ不十分な点もあるものの、かなり改善されてきたと感じた。このように、この研究会が単なる仲良しの集まりではなく、お互いの発展のためには厳しく指摘し合える関係を保っていけることが重要と考える。なお、この研究会は、年会費2000円（ほとんどが報告書代）さえ払えば、誰でもいつでも参加できます。詳しくは、<http://hotail.htc.nagoya-u.ac.jp/yamamoto/jmls/>を参照下さい。多くの方の参加をお待ちしています。



研究会参加者

V. 学位論文の紹介

学位論文の紹介

自己決定理論を用いた運動継続の予測と説明

松本裕史（武庫川女子大学）

定期的に運動や身体活動を行うことによって、健康上多くの恩恵が得られることは広く知られている。しかしながら、いまだ多くの人々が身体的に不活動な生活を送っている。たとえば、わが国の代表的な疫学調査である国民栄養調査によると、1回30分以上の運動を週2回以上実施し、1年以上持続している者の割合は、わずか3割にも満たない（厚生労働省、2002）。Marcus et al.（2000）は、運動・身体活動に関連する先行研究を概観した上で、これまでに運動や身体活動を人々に採択させるための様々な試みは成功しているものの、継続に関する試みは不十分であることを指摘している。このような背景から、運動・身体活動の継続に強く影響を与えている心理・行動科学的要因を明らかにし、運動実践者の継続を支援するための知見が求められている。本研究では、自己決定理論（SDT: Self-Determination Theory, Deci and Ryan, 1985, 2000, 2002）を用いて、運動動機づけに関する個人差の特徴を明らかにするとともに、運動動機づけが運動継続の予測と説明に有効であるのかを検証した。自己決定理論とは、これまでの動機づけ研究において内発的動機づけと外発的動機づけを対照的なものとして二分法的に位置づけていたのに対して、動機づけを自己決定の程度によって細分化し、外発的動機づけから内発的動機づけまでを連続した動機づけとして説明することを可能にした理論で

ある。

本研究は、7章（第1章：運動の継続に関連する従来の研究と課題、第2章：本研究の目的と意義、第3章：運動研究に用いる自己決定理論に関連する尺度の作成、第4章：運動動機づけパターンと運動継続の関連の検討、第5章：自己決定理論に基づく運動継続の因果構造モデルの検討、第6章：運動動機づけに影響を及ぼす心理的要因の検討、第7章：総合的考察）で構成されている。

第1章では、代表的な運動継続を予測、説明する理論・モデルを概観し、運動継続研究に自己決定理論を用いる有用性を述べるとともに、運動と自己決定理論に関する先行研究を展望し、その問題点と課題を整理した。

第2章では、本研究の目的と意義を述べた。本研究の目的は、1) 信頼性および妥当性を有した運動動機づけ尺度を作成し、運動継続の動機づけの個人差をとらえることができる動機づけパターンを明らかにする、2) 運動動機づけパターンと運動継続との関連を横断的および縦断的に検討する、3) 運動継続を説明するモデルとして自己決定理論を用いる妥当性を総合的見地から検証する、4) 運動有能感、運動自律性、および運動関係性が自己決定の程度の異なる運動動機づけに及ぼす影響を検討する、の各点とした。本研究の意義は、運動指導者が運動実践者の動機づけを客観的に評価し、その

V. 学位論文の紹介

評価にしたがって運動継続を効果的に支援する方略を明らかにすることである。

第3章では、自己決定理論に関連する尺度(運動に関する自己決定動機づけ尺度、運動に関する有能感尺度、運動自律性尺度、および運動関係性尺度)の作成を行い、信頼性および妥当性が確認された(研究1-4)。

第4章では、運動動機づけパターンの検討と、運動動機づけパターンと運動継続の関連を横断的および縦断的に検討した。クラスター分析の結果、抽出された運動動機づけパターンを図1に示す。運動動機づけパターンは、第1クラスターとして、自己決定的な動機づけが高く、非自己決定的な動機づけが相対的に低い「自己決定動機づけ傾向」、第2クラスターとして、すべての動機づけが中程度の値を示す「中等度動機づけ傾向」、第3クラスターとして、自己決定的な動機づけよりも非自己決定

的な動機づけが高い傾向を示す「非自己決定動機づけ傾向」、最後に、第4クラスターとして、非動機づけが高く、その他の動機づけはいずれも低い「無動機傾向」が抽出された(研究5)。さらに、異なる対象者においても同様の運動動機づけパターンが確認された(研究7)。次に、明らかになった運動動機づけパターンと運動継続の関連を横断的に検討した。その結果、「自己決定動機づけ傾向」群は、定期的な運動を長期にわたって行っている者が多く、運動を行っていない者は少なかった。「中等度動機づけ傾向」群は、不定期に運動を行っている者が多く、長期にわたって定期的な運動を行っていない者は少なかった。「非自己決定動機づけ傾向」群は、定期的な運動を始めて間もない者が多かった。最後に、「無動機傾向」群は、運動を行っていない者が多く、不定期に運動を行なっている者や長期にわたって定期的に運動を行っていない者

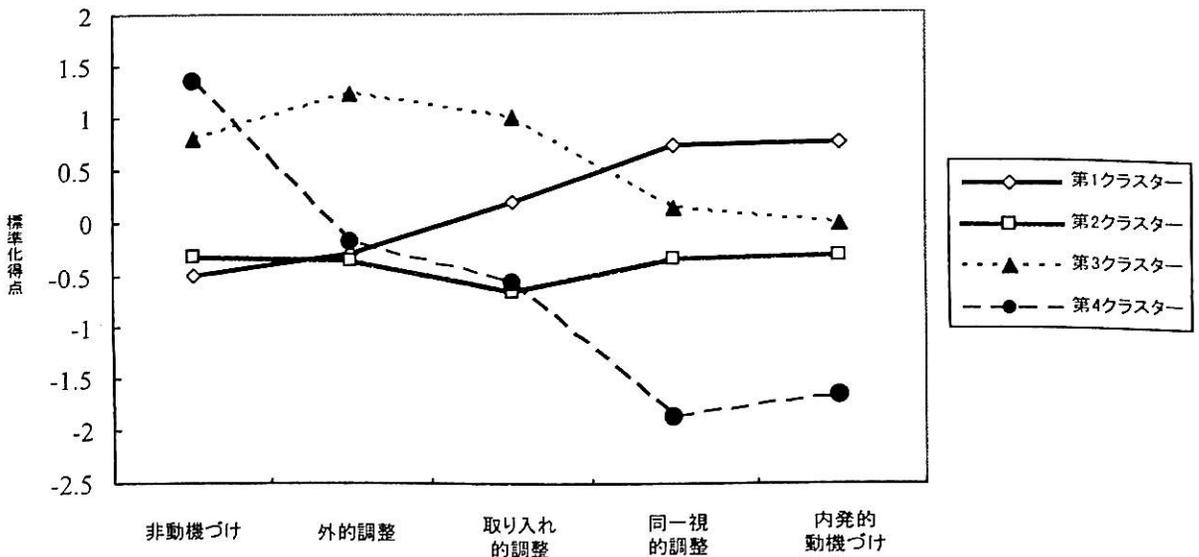


図1. 運動動機づけのクラスター分析結果

が少なかった(研究6)。また、運動動機づけパターンによる運動継続の予測性に関して、2年間の期間をあけて運動継続状況を確認したところ、「自己決定動機づけ傾向」群は、他の動機づけパターンと比較して、有意に運動を継続している者が多かった。「無動機傾向」群においては、2年後に運動を継続していた者は存在しなかった。このことから、運動動機づけパターンには運動継続に対するある程度の予測力が確認された(研究8)。

第5章では、自己決定理論に基づいて、運動継続に影響を及ぼす動機づけの因果構造モデルを構築し検討を行ったところ、モデルの適合度は良好であり、運動継続を説明するモデルとして自己決定理論を適用する妥当性が示された(研究9)。また、運動有能感、運動自律性、および運動関係性は、運動動機づけを媒介して、運動継続に影響を与えることが示された。

第6章では、運動有能感、運動自律性、および運動関係性が非動機づけから内発的動機づけまでの自己決定の程度の異なる各動機づけにどのような影響を及ぼすかについての詳細な検討を行った

(研究10)。その結果、自己決定的な動機づけの増強に、運動有能感、運動自律性、および運動関係性の3つの心理的要因が重要であることが示され、その中でも運動自律性は運動継続に望ましい動機づけへ変容させる方略を考える際に最も配慮すべき要因であることが明らかになった。

第7章では、各章で示された結果をまとめ、総合的な考察を行った。運動継続のための支援は、運動指導者の経験や勘に頼るのではなく、客観性のある指標を基に行い、経験の浅い運動指導者でも運動継続の支援を行える効率性と普遍性を有した体系的なアプローチへ発展させる必要がある。最後に本研究から得られた知見を基にして、運動継続に対する動機づけを支援する方略について具体的な提案を行った。

付記：同名の論文題目において、平成16年3月に早稲田大学大学院人間科学研究科より博士(人間科学)の学位を授与されました。多くの貴重なご指導とご助言を賜りました竹中晃二教授ならびに多くの先生方に深く感謝申し上げます。

スポーツ選手の競技引退に関する研究

大場ゆかり（早稲田大学）

九州大学大学院人間環境学研究所博士論文
（平成14年3月25日学位取得）

指導教官 徳永幹雄教授

1. はじめに

競技引退に関する研究領域は、競技引退への適応要因や競技引退の特質についての理論的研究から、競技引退後の心理的・身体的・社会的適応に関する実証的研究、競技引退への適応を促進するための予防的介入の実践・開発に関する実践的研究へと発展してきた。近年、諸外国では、競技引退への準備プログラムや将来設計プログラムを開発し、実施しているが、わが国においては、そのような体系的な取り組みは行われていない。また、選手の属性（性別、年齢など）や参加する競技種目の特性による競技引退への反応の差異についての研究の必要性、競技引退前に競技引退に伴って問題を生じる可能性のある選手の判別研究や、そのような選手に対する特定の介入指針についての検討の必要性が先行研究で指摘されている。

このような背景から、本研究では、競技引退への反応を「競技引退観」から捉えることにした。スポーツ選手に対する予防的・教育的介入において利用可能な競技引退観検査を開発すること、そこから明らかになる競技引退観について検討すること、指導・援助に対する競技引退観検査の適用可能性や有効性の検討を行った。「競技引退観」は、競技引退に対する適応資源、競技引退に対する態度、競技引退への接近・回避傾向、競技引退イメージから構成される。

2. 目的

本研究は、競技引退前のスポーツ選手に対して、競技引退経験が人間的成長の機会となるよう指導・援助を行う際に利用可能な競技引退観の測定尺度を開発すること、そこから明らかになる競技引退観の特徴や競技引退への反応の差異について検討すること、競技引退観を手がかりにした予防的・教育的視点からの指導・援助を実践するための留意点を明らかにすることを目的とした。

3. 論文構成

研究の目的を達成するため、本論文は以下のように構成された。すなわち、第1章「序論」、第2章「競技引退観検査の開発」、第3章「スポーツ選手の競技引退観」、第4章「競技引退観検査とインタビュー法による競技引退観の比較」、第5章「競技引退観に基づく予防的・教育的介入の試み」、第6章「総括」である。

4. 結果の概要

1) 競技引退観検査の作成

「競技引退に対する適応資源」「競技引退に対する態度」「競技引退への接近・回避傾向」「競技引退イメージ」の4尺度から構成される競技引退観検査を作成することができた。

2) 競技引退観の特徴

(1) スポーツ選手の競技引退に対する態度は、拒否

的、消極的、嫌悪的な傾向にあることが明らかになった。一方、競技引退に対する適応資源は、適応的な傾向にあった。「引退したくない」が「引退する時は来る」と考え、「意味的イメージ」で競技引退を捉えている選手が多かった。

(2) 競技引退に対する態度には以下の特徴が認められた。

- ① 受容的、積極的、好意的な競技引退に対する態度には、適応資源を有していること、性（男性）、年代が高いこと、種目特性（生涯スポーツ、集団スポーツ）が影響していた。
- ② 競技引退に対して接近傾向を示す場合、安堵感や期待は低く、競技引退によって生じる衝撃の度合いを大きく認知していたが、競技引退への主体的関与と引退後の競技関与の可能性は高かった。
- ③ 競技引退イメージの内容により、競技引退に対する態度や競技引退への接近・回避傾向が異なることが明らかになった。競技引退に意味的イメージを示した者は、競技引退に対して接近傾向を有し、競技引退に対する受容的、積極的、好意的な態度を有する傾向があった。

3) 競技引退観検査とインタビューによる競技引退観の比較

- (1) インタビューの回答からは、受容的な競技引退観を示す者が多く認められた。「競技引退の受容・拒否」は「引退後への予期・準備」と関連があった。
- (2) 競技引退観検査とインタビューから得られた競技引退観は、ほぼ同様の傾向を示した。しかし、インタビューにおける「競技引退の受容・拒否」の回答群により競技引退観検査の得点を比較したところ、ほとんどの因子で有意差が認められなかった。また、競技引退に対する基本的姿勢が異なる2つの事例において、競技引退観検査の得

点に明確な差異は認められなかった。

4) 競技引退観に基づく予防的・教育的介入の試み

競技引退観検査の評価手順および競技引退観の解釈にあたっての留意点を明らかにし、これを事例に適用して競技引退観の評価と助言を試みた。助言を行うことにより、競技引退への心理的取り組みが開始、促進されたことが推察された。このことから、競技引退観検査による競技引退観の評価および、これに基づく助言の有効性が示唆された。

5. まとめ

本研究では、競技引退観検査を作成し、これにより競技引退観の特徴を明らかにするとともに、競技引退観検査のスポーツ選手に対する適用可能性を考察すること、競技引退観に基づく指導・援助を実践するための留意点を明らかにすることを目的とした。この目的に基づき進められた調査、研究から主に以下の結果を得た。

- 1) 競技引退観検査が作成され、スポーツ選手の競技引退観の特徴が明らかになった。また、競技引退に対する態度は、競技引退に対する適応資源、競技引退への接近・回避傾向、競技引退イメージによって異なっていた。
- 2) 競技引退観検査のスポーツ選手への適用可能性が示唆された。
- 3) 競技引退観の評価と実践の試みから、その方法と競技引退観に基づく指導・援助の有効性が確認された。

6. おわりに

本論文を作成するにあたって、深いご理解と温かいご指導を頂きました徳永幹雄教授、貴重なご助言の数々を頂きました橋本公雄教授、そして、多くの示唆を頂きました針塚 修教授、古川久敬教授に心よりお礼申し上げます。

中学生サッカー選手におけるストレスの構造分析

加藤 久（沖縄かりゆしフットボールクラブ）

この度、体育心理学専門分科会・広報委員会より、分科会会報に上記タイトルで東京工業大学に提出した学位論文を紹介したいという依頼をいただきました。以下に、研究の動機、論文の内容等について、要約してご報告させていただきます。論文は、図1のように7章で構成されています。

日本のスポーツ選手の育成を考えた場合、最も指導効果が期待できる中学生年代において、選手を取り巻く環境に一番多くの問題があるのではないかと、それが本研究の出発点になっています。

筆者は、1991年から1996年までの5年間、日本サッカー協会強化委員会において、小学生、中学生、高校生という育成段階の選手指導のプランを練り、そのプランの基本的な部分を実行に移す仕事に携わってきましたが、その中で最も大きな課題となったものは、中学生の高校受験に関わる問題でした。この進路決定には、選手本人の意志よりも、親や学校の先生などの考えが優先される場合が多く、中学生選手はスポーツと学業の両立というテーマの中で、多くの悩みを抱えているものと思われました。

また、発育・発達の観点から見ても、この年代は肉体的に急激な成長を遂げる時期であり、精神的にも“多感な”時期と言われています。このような中学生選手たちの日常生活の実態を理解することは、指導の方法論を確立していく上でも非常に大

事なことであると思い、研究を始めました。

本研究は、ラザルスら(1984)の提唱した認知的評価理論をもとにしたストレス研究を背景に、中学生サッカー選手のストレス構造を客観的に捉える試みです。この研究における最も重要なテーマは、日常生活の時間的な流れの中で、家庭・学校・競技という3つの生活場面を取り上げ、生活全般を視野にいたしたストレスモデルを検証することでした。また、学校の中でスポーツを行っている部活選手と、地域のクラブにおいてスポーツを行っているクラブ選手の生活空間が異なることから、この競技集団の差によって、選手のストレスの評価や心理的ストレス反応の表出にどのような違いがみられるかも大きな関心事でした。

選手のストレス過程へ指導者が介入する際に、最初に行わなければならない仕事は、選手が何をストレスと感じているか、いわゆるストレスの内容を把握することですが、この点に関しては、人間関係の軋轢と競争による評価を最も大きなストレスと感じていることが明らかにされました。この二つの要素は、子供の社会だけでなく、大人の社会においても大きなストレスとなりうるものですが、この時期から、人間関係を円滑に保つために社会的スキルの学習を行うことなどは、今後の選手指導の重要なテーマであると考えられます。

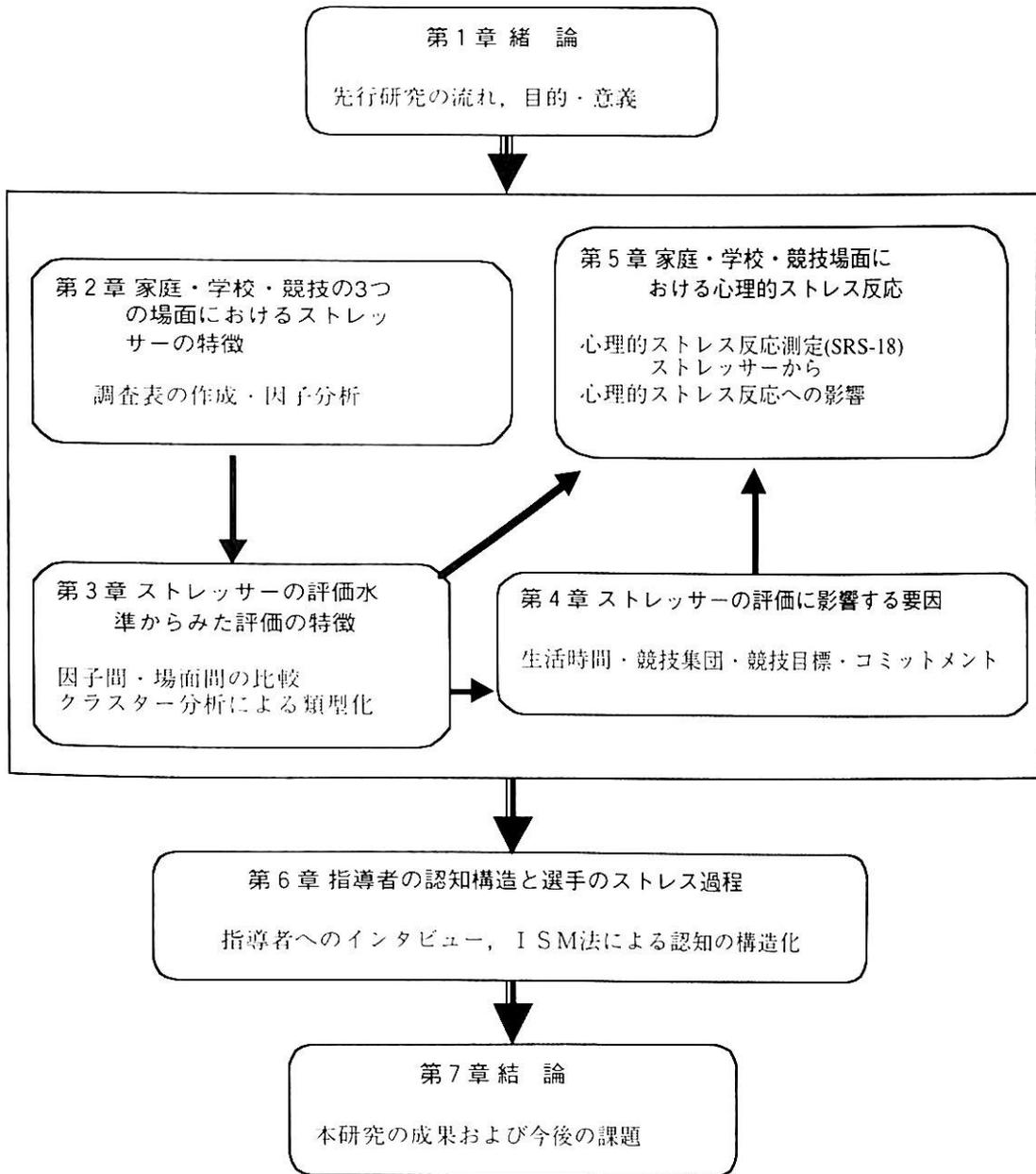


図1 本研究の構成

ストレッサーの評価と心理的ストレス反応の関連をみると、学校や競技場面に比較してストレッサーの評価が低い家庭場面で、逆に心理的ストレス反応が相対的に高いという結果がみられました。この点は、本研究の基本仮説となるストレッサーから心理的ストレス反応への場面間の相互関連の可能性を示唆するものと考えられました。家庭における心理的ストレス反応の高さは、家庭におけるアクティベーションの低さからも説明が可能ですが、学校や競技の場でため込んだストレスが家庭で表出されている可能性も考慮すべきです。ストレッサーから心理的ストレス反応への重回帰分析の結果では、例えば、「親からの干渉」という家庭場面のストレッサーは、家庭だけでなく、学校や競技場面の心理的ストレス反応に対して様々な強さの影響を与えていることが明らかになりました(図2)。この図2の結果は、ストレッサーの評価から心理的ストレス反応までの過程には、さまざまな要因が複雑に絡み合っているということを示唆しています。この複雑さの中から、強い影響を与えている要因をいかに見抜くか、それが現場の指導者に要求される仕事であるといえるでしょう。

ストレッサーや心理的ストレス反応に影響を与える認知的要因としては、競技集団、競技目標、コミットメントを取り上げましたが、心理的ストレス反応への競技集団差や競技目標差の影響の可能性は、特に重要な知見であると思われます。

例えば、家庭でのストレッサーの嫌悪性評価は、

部活選手よりもクラブ選手の方が高いのですが、心理的ストレス反応をみると、逆にクラブ選手よりも部活選手で高く表出されています。この家庭における心理的ストレス反応をさらに詳しく分析してみると、「プロ志向性」の高い場合と低い場合では、クラブ選手と部活選手の心理的ストレス反応の表出に差がみられます。つまり、「プロ志向性」の低い選手では、心理的ストレス反応に差はみられませんでした。しかし、「プロ志向性」の高い選手では、クラブ選手よりも部活選手の心理的ストレス反応が有意に高いという結果が示されました。心理的ストレス反応に対するこの競技集団差は、選手のストレスへの対処を考える上で重要なヒントを提供していると思われます。

最後に、本研究では、クラブ指導者と部活指導者のコーチングに関する認知構造の違いを、ISM法という研究手法を使って事例的に取り上げました。その結果、クラブ指導者と部活指導者の認知構造には明らかな違いが見られ、指導者の選手に対する接し方の違いが、選手の心理的ストレス反応の軽減につながっている可能性が示唆されました。

本研究においては、家庭・学校・競技という3つの生活場面における、選手のストレッサーと心理的ストレス反応の場面間の相互関連性が確認されましたが、今後は、心理的ストレス反応軽減に寄与すると考えられるクラブ選手と部活選手のソーシャルサポートや対処方略、社会的スキルの差に言及する必要があると思われます。

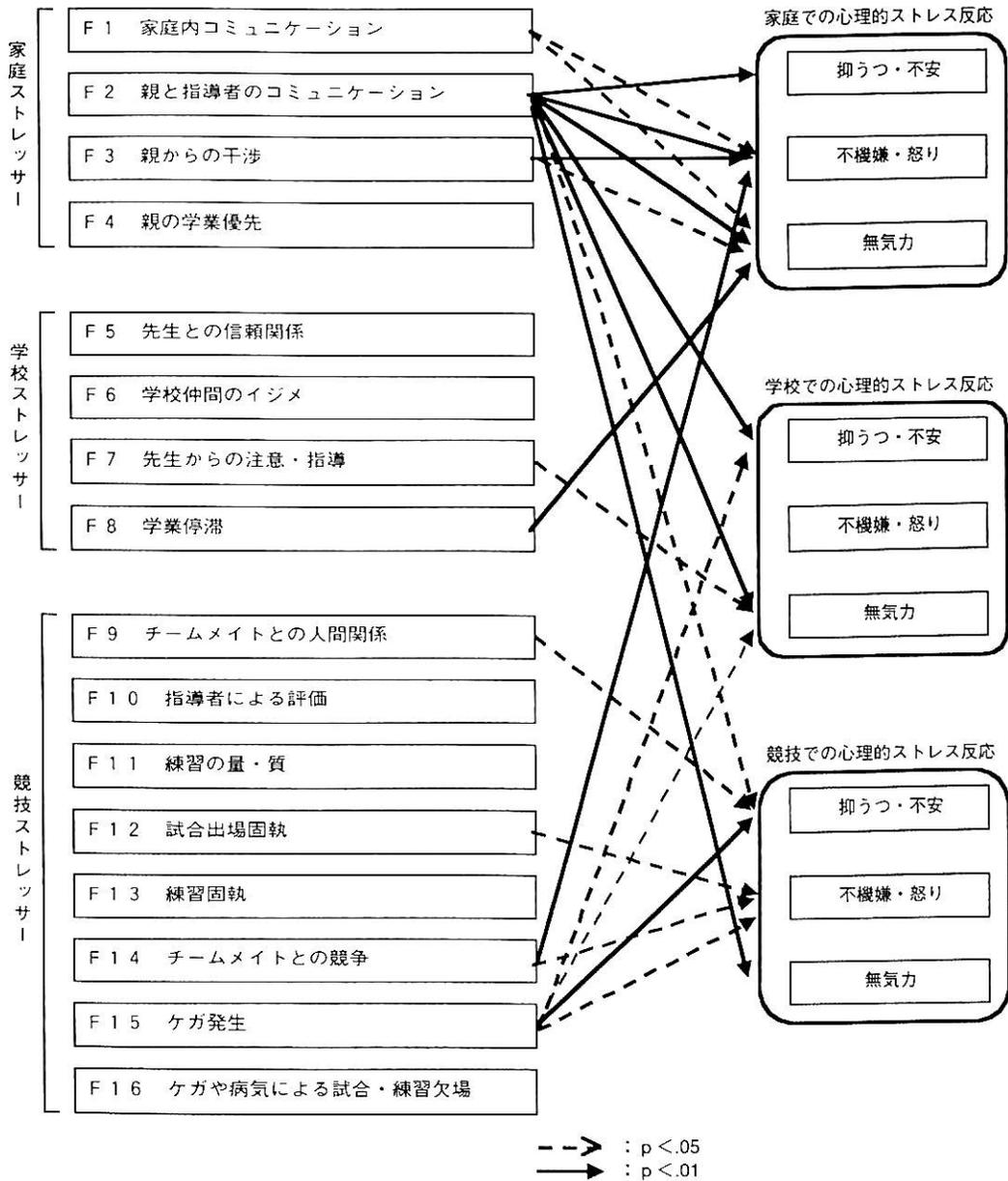


図2 家庭・学校・競技ストレスから各場面の心理的ストレス反応への影響度

摂食問題を抱えた競技者の心理的背景としての身体

山崎史恵（鹿屋体育大学研究生）

博士（体育科学）筑波大学

1980年代以降、競技者の摂食問題にはスポーツ心理学領域から比較的多くの研究的興味が集まり、問題の背景となる様々な要因が検討されてきた。しかし、実際の心理介入に適用できる研究は未だ少なく、思春期女性の摂食障害の治療枠で実践せざるを得ないのが現状といえる。

本研究では、競技者の摂食問題には競技者独自の心理的背景が存在していると仮定し、競技活動の基軸となる身体を手がかりとして、摂食問題を抱えた競技者の体験を丹念に探っていくことが臨床現場に有効であろうと考えた。

本研究の目的は、第1章において以下のように設定された。第1に、摂食問題を抱えた競技者特有の身体の捉え方の特徴、もしくは身体経験のあり方を明らかにすること、次に、摂食問題の症状と競技者の身体体験の関係性を事例的に検討し、臨床現場への視座を提供することである。特に、身体感覚、身体経験、身体像の3側面に焦点づけることにより、限定的ではあるが、従来の研究では取り上げられなかった競技者の内的現実にも迫れる可能性があることなどを研究の意義として論じた。

従来の研究知見を概観した第2章では、現象面に関連したいくつかの特異性—競技者には軽度の食行動の混乱が多く発生すること、男性競技者の罹患率が高いこと、引退などを契機に回復が早いことなど—に触れ、その後、心理的背景に関連した資料に焦点を当てた。特に、身体経験等に関連する

背景として、いわゆる摂食障害の患者には、生育史上の問題に由来する身体経験の混乱が生じている一方で、競技者においては競技活動の中にそれと類似した多くの身体経験の混乱—身体感覚の疎外、心身の乖離、身体像の一時的な歪みなど—が含まれる可能性を論じた。

第3章では、食統制における身体感覚の質的な差異を検討するために、男女競技者の日常的な食行動の類型化を試みた。その結果、摂食問題の危険性が示唆された競技者は、食事の統制の際に、適切な心身の感覚を用いていないという特徴が認められ、食事場面において身体感覚がかなり疎外されている特徴を確認した。対照的に、安定した食行動を有する競技者には、心身の状態に即した食統制をおこなう傾向が認められた。食事という行為そのものが極めて心身連関的な行為であることから、身体感覚との関わりの深さが象徴的に食事場面に現れているものと考察した。

また第4章では、食事場面において身体感覚の疎外が特に顕著になるのが、一部の極端な体重コントロール時であることが確認され、摂食問題に易刺激的な競技者にとっては、減量などの行為が心身の乖離を増幅する危険性があることが危惧された。

第5章および第6章では、摂食問題と身体像および身体経験の関係性に着目した。まず第5章で、質問紙による食行動と身体像特徴の関係を検討し

た結果、混乱した食行動を有する競技者には体型認識面での身体像の歪みと同時に、身体との疎隔感や異和感を体験しやすい傾向にあることを確認した。同様に、男女一般学生を対象にした調査では、競技者に認められたような疎隔感・違和感は摂食問題と関係を持たず、専ら体型認識に関連した身体像の歪みが摂食問題の背景となっていることが示された。

第6章では、競技者の摂食問題の背後に存在する身体像および身体経験の歪みをロールシャッハテストを中心に事例的に検討した。第5章において確認された競技者特有の自我異和的な身体経験について、より詳細な検討をおこなうためである。その結果、摂食問題を抱えた4名の競技者は、ロールシャッハテストにおいて、自らの感覚・感情体験のあり方が制限されていたり、内的な不全感・不信感が身体的なテーマ（傷つき・不完全性など）として投影されるといった特徴が確認され、身体経験の混乱が無意識的なレベルでも生じている様子が伺われた。それと関連して、面接の内容からは、競技場面で身体的な出来事—例えば、負傷やパフォーマンスの低迷、著しい競技レベルの向上などを体験しており、摂食問題の契機となったエピソードとして自ら報告がなされた。こうした身体への直面化を迫られる状況の中で、対象となった競技者は、自らの身体と対峙するかのような心的態度を強めていく傾向があり、それが、意識されるところの自我異和的な身体経験につながるものと考察した。

第7章では、摂食問題を抱えた競技者との心理療法を報告した既存の面接資料が議論の対象となった。そこでは、心理療法の経過に伴う症状・身体経験・外界での出来事等の変容を辿ることにより、本研究知見の臨床場面への適用について検討がおこなわれた。面接資料の分析から、クライアン

トである競技者は、過去から現在にわたる自らの競技経験と、その時々々の身体経験、様々な感情を面接場面で語ることにより、自我親和的な身体像を再構築いくというプロセスが確認された。こうした主観的に体験される身体の変化と同期して、食事への受容的態度が生まれてくること、自然な感情表現や周囲に対する積極的な態度・行動が可能となっていくこと等が確認された。

以上の一連の成果を総括すると次のことが結論できる。競技者の摂食問題には、体型や体重に関わる身体像の歪みだけでなく、心身の乖離（感情や身体感覚の疎遠性もしくは疎外）や、否定的で自我異和的な身体経験・身体像が存在している。これは、摂食問題の特徴として確認した内部感覚（空腹・満腹感・満足感など）の乖離と根底で繋がりを有するものである。競技者の場合、様々な身体的苦痛に耐えるために、ある程度の心身の乖離を余儀なくされるものではあるが、競技場面での極端な減量もしくは体重コントロールなどの行為や、自らの身体に直面せざるを得ない出来事（負傷やスランプなど）は、心身の乖離を増幅したり、身体経験の混乱を強めることで、摂食問題を顕在化させる危険性を持つ。摂食問題を抱えた競技者への心理的介入（カウンセリング等）の際には、こうした競技者特有の自我異和的な身体経験に直接もしくは間接的に働き掛けることが有効であり、自我にとってより親和的な身体を取り戻すことが治療目標の1つとして位置づけられる。

付記：本学位論文の研究指導教官として長年のご指導を賜りました筑波大学の中込四郎助教授、ならびに貴重なご助言を賜りました先生方に心より御礼申し上げます。

VI. 海外情報

海外情報

2002年国際応用スポーツ心理学会（AAASP）と 2003年アジア南太平洋スポーツ心理学会（ASPASP）に参加して

遠藤俊郎（山梨大学）

和田先生（京都教育大学）からAAASPへの学会参加記を寄稿してほしいという要請を受け軽率にも「そういえば行ったなあ・・・？」と思い出に耽りながら了解のメールを出してしまった。しかしよくよく後で考えてみると私が参加したのは2002年のAAASPで2003年はASPASPに参加していたことに気づき、慌てふためいてお断りのメールを出したら、和田先生からは「大丈夫！2002年のAAASPの参加記はまだ掲載されていないし、それなら2003年のASPASPの参加記も含めて寄稿して！」と即座に新たな使命が加わった返信があり、かえって墓穴を掘る形となってしまった。しかし、そうはいっても最近のことさえも定かに思い出すことが危うくなった私にとっては1年前、2年前のことを明確にすることはそう容易な作業ではなかった。そこで共同研究者であり、サンフランシスコ空港で落ち合って以来アメリカでの珍道中を共にした渡辺英児氏（当時中京大学、現龍谷大学）や若山裕晃氏（中京大学）の記憶力にも協力を得て何とか本稿を書き上げることにした。

2002年国際応用スポーツ心理学会（AAASP）は、2002年10月30日～11月2日の日程でアメリカ、アリゾナ州ツーソン市で開催された。ツーソン市には州立アリゾナ大学があるが、残念ながらAAASPは市内のホテルで開催された。というのは、映画通

の方にはキアヌ・リーブス主演映画「スピード」を思い出して頂きたい。爆弾を仕掛けられたバスを運転するヒロインが着ているトレーナーの背中に書かれた大学名から犯人に「ワイルドキャッツ」と呼ばれ、キアヌ扮する主人公がビデオでバスの内部を犯人が監視していることに気がつく、という一場面があった。そのニックネームの大学こそがアリゾナ大学だったのである。このことだけで渡米前から幾分興奮気味の私ただけに、学会会場もさることながらアリゾナ大学を見学したことはいうまでもなかった（写真1参照）。ところで肝心の学会は、日中はキーノートレクチャーやシン



写真1 AAASP：アリゾナ大学アメリカンフットボール場

ポジューム(写真2, 実習を含めたセッションの事例)がメインであったが, 10月30日と11月2日の2日間の夕刻にはポスター発表セッションが設定されており, それぞれ84件, 81件, 合計165件という多数の発表があった。発表の多くはもちろん地元アメリカの研究者であったが, カナダ23件, イギリス16件に次いで, 渡辺, 若山両先生方の中京大学グループ, 北村先生の東北大学グループ, 橋本先生(九州大学), 磯貝先生(九州工業大学), そして私を含めた8件の発表があった日本が4番目にランクされた。同じアジアゾーンといっても英語圏のオーストラリア7件, 韓国3件, 台湾2件という実体を見ても日本人研究者の本学会に対する認識の高さがうかがえた。パフォーマンスの向上に関する演題が目立つポスター発表会場の雰囲気はくつろいで自由なものであったが(写真3, 筆者の右手に注目), 発表者に対する積極的な質問や意見の交換が行われ, 熱気に溢れるものでもあった(若山先生談)。また, 学会のスケジュールの中に“Student Open Meeting”と称した各大学の研究者に

よるスポーツ心理学に関する大学院プログラムの紹介とそれに対して興味ある学生との質疑応答のセッションが1時間半も設定されていた。各大学とも少なからず著名な研究者から直接的に話が聞けるとあって学生の盛況を呈していた。我が国においてもポスターによる紹介のみならず学会時に同様な試みがあれば学部生の大学院進学熱に貢献できるものと思われ, 実施検討の余地が十分にあると感じられた。

2003年アジア南太平洋スポーツ心理学会(ASPASP)は2003年6月29日～7月2日の日程で韓国ソウル市の国民大学において開催された。開催地がお隣の国, 韓国ということで日本からの多くの参加者が見込まれたが, 当時は下火になったとは言えSARSの猛威が問いただされている時期であったので家族や大学等から渡航許可がおりなかった方が多かったと見られ, 日本からの発表は口頭発表75件中2件(中込先生(筑波大学), 鈴木先生(岐阜大学)), ポスター発表54件中9件(渡辺先生(龍谷大学), 杉山先生(北海道教育大学),



写真2 AAASP: グループワークを含めたセッションの事例

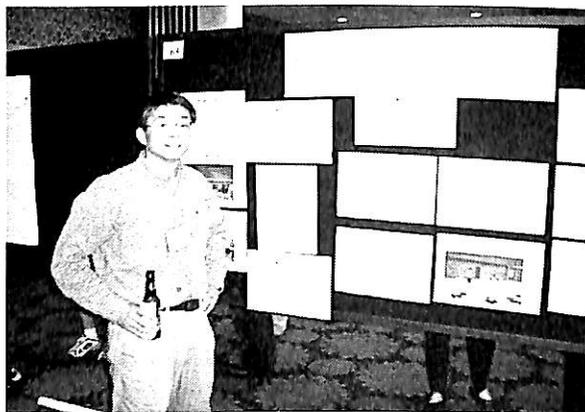


写真3 AAASP: くつろいだ中でのポスター発表

阿江先生（東京女子体育大学）、竹中先生の早稲田グループ、北村先生（東北大学）、近藤先生（慶応義塾大学）、遠藤（山梨大学）（写真4）、近藤先生発表ポスターの前で筆者と。と思いの外少ないものであった。全体的な傾向としては、動機付け関係（特に目標志向性）のトピックスが多く、フラクティカルな話題の多かったAAASPとは若干雰囲気異なっているように感じられた（渡辺先生談）。また、学会会場のデコレーションが賑々しく韓国のお国ぶりがうかがえた（写真5、会場入り口の生花）。

ところで、2005年には国際スポーツ心理学会第11回大会がオーストラリア、シドニーで開催予定であり、私と同じホスター発表時にオーストラリア研究者から参加の勧誘を受けた。同じアジアゾーンでの開催であり再会を誓って別れたが、次回は今回よりも多くの日本の研究者にも参加していただきたいと期待するところである。



写真4 ASPASP：近藤先生の発表ポスターの前で筆者と

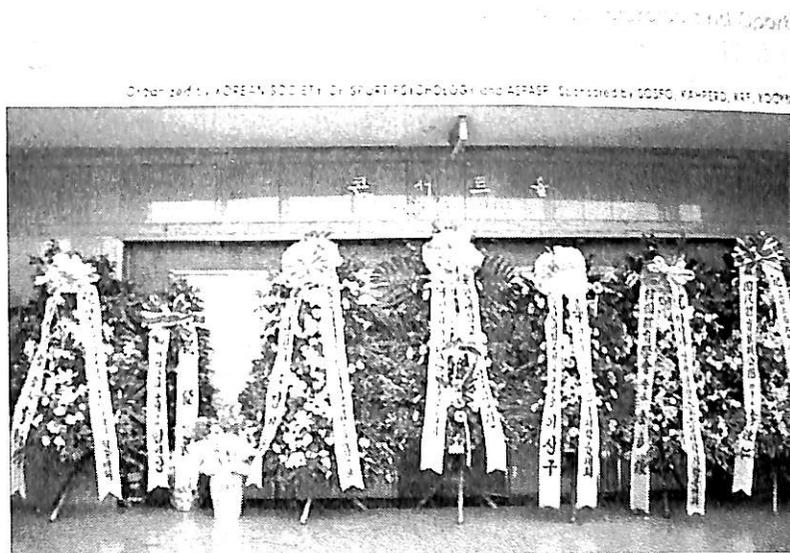


写真5 ASPASP：会場内の生花の装飾

ベイラー大学遊学記

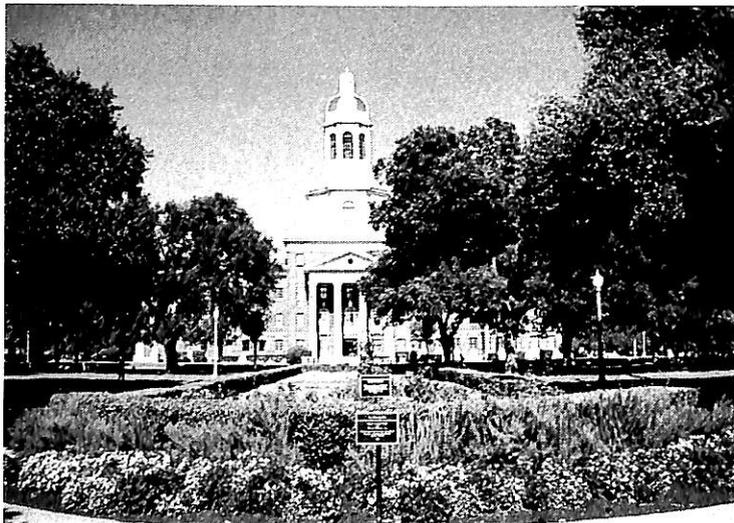
内田若希（九州大学大学院）

私の指導教官である橋本公雄先生(九州大学健康科学センター)から、アメリカで勉強してこないか?というお話をいただいたのは、2003年3月のことでした。英会話がまったくできない私ではありましたが、度胸と好奇心だけは人一倍。「行ってしまえばイヤでも英語を話さなくてはいけないし、行ったらなんとかなるだろう」という勢いで、アメリカへ武者修行に行くことを決めました。約2ヶ月という短期間ではありましたが、その年の10月中旬より、アメリカはテキサス州にあるベイラー大学(写真)にResearch Scholarとして滞在しておりましたので、簡単にご報告させていただきます。

ベイラー大学は、1845年に設立されたテキサス州でもっとも古い大学です。キャンパスは州の中心部の都市ウェイコーのダウンタウン近くに位置

し、300エーカーのメインキャンパスに、学部・大学院のほとんどが集中しています。アメリカ各州および海外の約70カ国からの学生約13,000人が学ぶ、世界最大のバプテスト大学でもあります。また、ベイラー大学は福岡にある西南大学の姉妹校でもあり、1年間の交換留学生在が毎年数名訪れているようです。

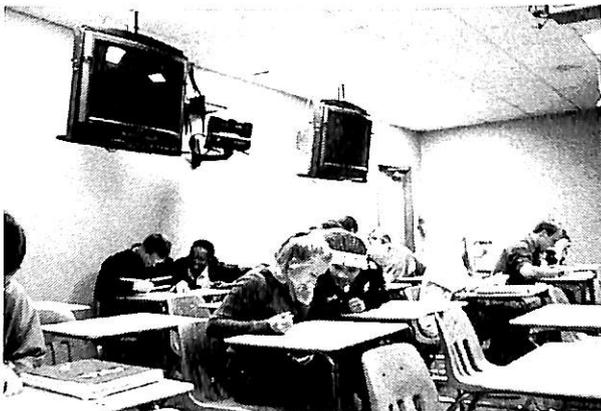
さて、ベイラー大学には橋本先生の旧友であるRafer Lutz博士がおり、このLutz博士の下で運動・スポーツ心理学の勉強をしてきました。Lutz博士は、2002年3月に福岡で開催された九州スポーツ心理学会にゲストとして来日したこともあります。滞在した2ヶ月のうち、最初の1ヶ月はひたすら英文を読む日々が続きました。毎週、課題として論文や英語のchapterが複数手渡され(Lutz博士の研究



ベイラー大学

や私の研究に関連するトピックだった), 毎週木曜日に設けられたLutz博士とのディスカッション・タイムに備えるという形でした。

これに加えて、Lutz博士が担当する学部の講義にも出席し、月・水・金曜日は30名程度で構成されるスポーツ心理学の講義に(写真)、火・木曜日は数名で構成されるスポーツ・マネジメントの講義に参加していました。スポーツ心理学の講義では、日本の学部でも行われているようなメンタル・トレーニングの基本的内容(集中力トレーニング、イメージ・トレーニングなど)から、私が大学院に入学してから学んだカタストロフィ理論まで、実に幅広い内容でした。一方、スポーツ・マネジメントの講義は学校教育の視点を盛り込んだものでした。こちらは、学生が8名と少人数だったので、セメスターの最後のほうで各人が興味のあるスポーツ科学の内容についてプレゼンテーションを行う時間が設けられました。日本の大学とアメリカの大学では講義のスタイルがまったく違ふとよく耳にしますが、この学生のプレゼンテーションに私は圧倒されてしまいました。各人が自分の担当箇所についてきちんと調べてきているだけでなく、発表している姿が非常に堂に入ったものだったからです。目標設定についてプレゼンテーションを行ったある学生は、「みんなの今の目標は何?」と一人



スポーツ心理学の講義

ずつに聞いていき、ホワイトボードにそれを書き出します。それについて、では今何をすべきか、何ができるかをユーモアを交えながら一人一人に説明するといった形で講義を行っていました。プレゼンテーション能力の高さに驚かされた私が、講義が終わった後にLutz博士にそのことを伝え、「どうしてそんなことに驚くのか分からないよ。アメリカでは1年生の頃からプレゼンテーション能力を鍛えるような授業をやるからね。プレゼンテーションは研究の上でも、仕事の上でも一番大切な能力なんだよ」と答えが返ってきました。

アメリカでの生活に少し慣れた2ヶ月目からは、Lutz博士の作成中の研究論文を読んでディスカッションを行ったり、私が取り組んでいる身体障害者を対象とした自尊心向上のための介入研究についてディスカッションを行うことがメインとなりました。また、比較的自由な時間が増えたので、そのような場合には論文を書く時間に当てることができ、2ヶ月間を通して非常に充実した時間を持つことができた実感しています。

また、Lutz博士が所属している学部の他の先生方は大変気さくな方が多く、Miller助教授、Woody助教授、Shim博士にはとくにお世話になりました。私を見かけては、英会話の相手をしてくださったり、研究の話や家族の話をしてくださいました。また、ランチやハローウィン・パーティ、クリスマス・パーティにもお誘いいただき、本当に楽しい時間を過ごすことができました。2ヶ月間は瞬間に過ぎてしまいましたが(まさに"Time flies"),私にとって今後の研究のモチベーションを大いに高める時間を与えてくれるとともに、たくさんの研究者や学生との出会いの場となりました。このような機会を与えてくださった橋本公雄先生、温かく迎えてくださったLutz博士とご家族、また2ヶ月の間ルームシェアをさせていただいたHeather(ペイラー大学ロースクール)にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

NASPSPA 2004 Conference に参加して

石倉忠夫 (同志社大学)

NASPSPA (North American Society for the Psychology of Sport and Physical Activity) 2004 conference はカナダ・バンクーバーのダウンタウンにあるホテル Hyatt Regency Vancouver を会場に6月10日(水)から12日(土)まで開催された。バンクーバーは梅雨入りしたての日本とは違い、最高気温 20℃に満たない気温であったが、雨の日が多く残念であった。参加者はおおよそ300人くらい、日本からは10数名の参加があり、近年にない多くの参加者がいたとのこと。発表形式は口頭発表(一人15分)、ポスター発表(90分の質疑応答時間、写真1)そしてシンポジウムがあり、Motor Development, Motor Learning/Control, Sport & Exercise Psychology の3分野に大きく分けられていた。朝8時から夕方6時まで充実したスケジュールであった。学会の主立った内容は次の通りである(カッコ内は発表数)。



写真1 ポスター発表の慶応大学グループ

Pre Conference

Teaching exercise psychology

Keynote

Sport & Exercise Psychology: "Predictors and Consequences of Sport Participation"

Motor Learning/Control: "How Do We Get About By Vision?"

Symposium

"Peer-Assisted Learning (PAL) in Physical Activity Contexts: Theory, Research, and Applications Relevant to Sport Psychology and Motor Behavior"

"Modeling Strategies for Utilizing Dynamic Resources Over Development Time"

"Coordination Dynamics of Brain and Behavior"

"Contemporary Perspectives on Learning, Maturation, and Development"

"New methodologies in the psychology of sport and physical activity"

"The Control of Interceptive Actions"

"Stereotype Threat and Sport: Can Athletic Performance be threatened?"

Free Communications

Motor Development (12)

Motor Learning/Control (55): "Attention Focusing and Practice", "Gait and Posture", "Reaching", "Imagery/Modeling", "Coordination", "Augmented Information", "Vision and Aiming", "Expertise/Performance", "Kinetics"

Sport & Exercise Psychology (34): "Body Image/Self-Presentation", "Youth Sport/Physical Activity", "Preferences/Context", "Adherence/Motivation", "Health/Aging", "Imagery/Modeling"

Poster (290)

今回初めてこの学会に参加した。私自身は観察学習に関する研究に興味を持っているため、これに関連する発表・シンポジウムを中心に参加した。特に、シンポジウム "Peer-Assisted Learning (PAL) ..."では体育・スポーツ活動の参加者が一対一でペアを組み (PAL), peer-tutoring, peer-modeling, peer-education, peer-counseling, peer-modeling, peer-assessmentの方法 (PAL interventions) が教育的効果に及ぼす影響について話題提供された。詳しい内容についてはこれから学んでいきたいところだが、体育実技の指導を中心に授業を受け持っている私と

しては、観察学習に関する研究への興味も相まって、今後の研究と実技指導の新たな視点を示してくれた貴重なシンポジウムであった。

最終日の夜には水族館を貸し切りにしたパーティーが夜遅くまで催された (写真2)。パーティーにて観察学習の研究で著名なP.M先生に話しかけようとしたが、"Sorry!"とあっさりと逃げられてしまった(*_*)。来年は話かけ、いや、来年もポスター発表できるよう動機づけられバンクーバーを後にした。

来年のNASPSPA Conferenceは6月9-11日、Tradewinds Island Grand Resort, St. Pete Beach, Floridaで開催されるそうです。今回の発表抄録はSupplement to JOURNAL OF SPORT & EXERCISE PSYCHOLOGY. Vol.26, June, 2004.をご覧ください。

学会に関する情報は…<http://www.naspspa.org/>

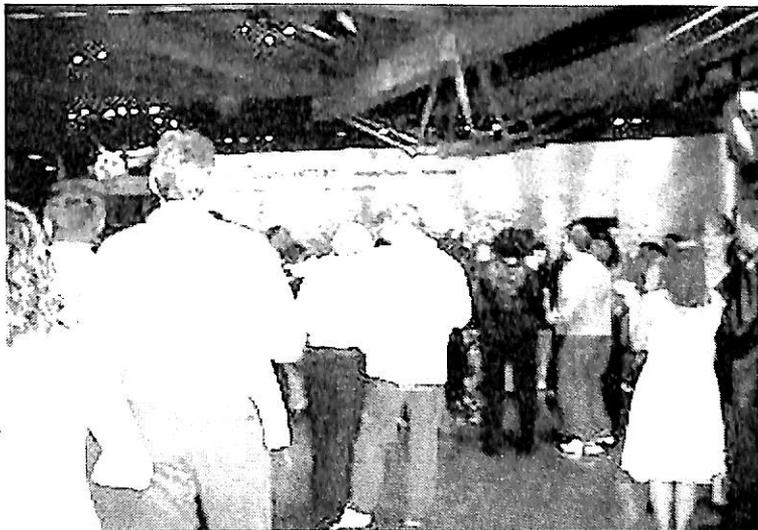


写真2 Aquariumで催されたパーティー (みんな踊っている)

香港運動心理學會設立：今、香港のスポーツ心理学が熱い!?

杉山喜一（北海道教育大学旭川校）

文部科学省派遣による2ヶ月の海外動向調査として、香港中文大学(HKCU)と上海体育大学を訪問する機会が得られた。今回の訪問は主として「トレーニングにおけるグリセミックインデックス(GI)の活用法」や「競技のための心理的準備」等、トレーニングに関するコーチング的立場からの資料収集が目的であった。なおそれら一部についてはすでに陸上競技研究(2004, No.2)に掲載されることになっているので参照していただければ幸いである。

まず香港といえば1995年、香港體育学院(HKSI)で第二回アジア南太平洋スポーツ心理学会(ASPASP)が開かれている。その際、大学院生と一緒に学会に参加したのが、私個人にとって最初の香港訪問となる。それ以来、香港へはFIFA主催の国際シンポジウムをはじめ、いくつかの国際会議に参加したが、このような国際的なイベントが頻繁に開かれるのも、国際都市香港ならではの。しかしながら、これだけ多くのスポーツの国際会議が開かれているにもかかわらず、それらを運営・統括する学会組織なるものが、これまで香港には存在していなかった。ところが今回の在外研修中、これらの学会で知り合った多くの友人との再会を通じて、以前より噂があった香港運動心理學

會(HKSSEP)がいよいよ発足するという情報を得た。その矢先、飛び入りで参加した現地での国際シンポジウムからの帰り道、突然自分の前に車が止まり、降りて声をかけてくれた人物がいた。たまたま娘の塾の送り迎えの際に、私を見つけて声をかけてくれた親友の周華(香港教育学院講師)氏である。HKSSEPの話題に触れると、偶然、彼がその副会長であることを知らされた。さっそく彼にHKSSEPについての情報提供をお願いすると、すぐさま多くの関係スタッフにコンタクトをとっていただき、数日後に学会設立メンバー達と会食する運びとなった。残念ながら長期出張のため本学会長の陳展鳴(元香港中文大学教授)氏には会うことができなかったが、代わりに副会長である香港バプチスト大学の張小燕氏のほか、HKSIの李慶珠氏や鄭金枝氏、スクールカウンセラーの余持光氏から多くの情報を提供していただいた。ほんの一部ではあるが、それらの概要について本コラムで紹介したい。

はじめにHKSSEP設立までの経緯を辿ってみると、陳展鳴氏と約10名の発起委員による運営委員会が組織され、昨年3月に第1回の運営会議が行われている。それ以降運営会議も回を重ね、これまで



香港運動心理學會

Hong Kong Society of Sport & Exercise Psychology

(<http://www.hkssep.org/>)

にすでに12回ほど開かれているという。また同年11月に正式にHKSSEPが立ち上げられ、就任式をかねたセミナーもあわせて実施されている。そして今年から学会活動もいよいよ本格的に始動する。その手始めとして学会誌創刊号の発刊、来年11月には、待望の第1回香港スポーツ心理学会の開催を予定している。もちろん国外の研究者にも呼びかける予定で、日本からの参加も期待されている。現在の会員は、一般会員(研究者、指導者、コーチ等)や学生会員をあわせると現在50名程度、将来的には150名から200名を目指すという。

このHKSSEPの設立構想は、1989年にはすでに芽生えていたらしい。はじめは香港中文大学の食堂で、研究仲間同士の会話の中で発案されたものであるが、スポーツ・体育学会すらない中で、すぐに実現できる状況ではなかった。しかも当時のスポーツ心理学はプロフェッショナルなレベルに達してはならず、学会設立にとって、機はまだ熟していなかった。やがて14年の歳月が流れ、ついに念願のHKSSEPが設立され、その活動方針として①スポーツや運動における科学的研究を発展させ、それらを現場に応用し、知識として広めていく、②HKSSEPの定期的な学会を組織し、運動・スポーツ心理学に関する話題を提供する、③スポーツ・運動心理学に関わる多くの科学者やグループとの交流を深める、④メンバー同士で、情報・資料・サービスの提供をはかる、⑤HKSSEPのジャーナルを定期的に刊行する、等が確認された。HKSSEPは、研究者/指導者(コーチ・教師)/学生・アスリート達で支えるトライポッドの役目を果たしながら、将来的には豊かな市民生活めざすQOL(Quality of Life)の向上やスポーツ教育現場における諸問題に対しても強い関心が向けられるであろう。

さてHKSSEPは、香港における今後のスポーツシーンの演出にあたり、重要な地位を占めるであ

ろう。来るアテネオリンピックや2008年の北京オリンピックにおいて、おそらく世界の舞台で通用する香港アスリートをどのようにサポートするか、HKSSEPの力量とその存在意義が試されることになる。香港のスポーツ競技は、一部で成功を取めているものの、率直に言ってやはり立ち遅れているといわざるをえない。現在のところHKSIや各大学等でエリートアスリートに対するサポート体制が整っており、香港のスポーツ科学も決して見劣りするものではない。しかしながらここ数年、香港経済の不景気のあおりを受け、スポーツ強化に対する政府予算の削減を余儀なくされている。さらにスポンサーの減少や認定コーチの不足もあいまって、コーチ・アスリートに対する教育プログラムやテクニカルサポートについても支障をきたしつつある。このような逆風のさなか、スポーツ科学の発展を目指す第三者機関としてのHKSSEPが、コーチやアスリートのためのハイレベルな強化プランや教育プログラムを側面から支援していこうとするそのチャレンジ精神には、目をみはるべきものがある。すでにHKSSEPの未来の青写真が示されたかたちとなったが、HKSSEPが将来的にどのように評価されるかは、スポーツ心理学者達を中心とするスタッフの熱意にかかっている。

最後になるが、在外研修中、大学の恩師である東京成徳大学の市村教授より「学会案内のところに、HKのスポーツ心理学会立ち上げの様子など投稿してくれませんか?アジア・スポーツ心理学会の予定など分っていることがあったらお願いします。アジアの情報は貴重です。」とのメールをいただいた。グローバルなキャリアと豊かな国際感覚をもちつつも、とりわけアジアのスポーツ心理学の動向に高い関心をもつ同氏からの要請が、今回の投稿のきっかけとなった事を付記しておきたい。

国際スポーツ心理学会 (ISSP) 関連情報

近藤明彦 (慶應義塾大学, ISSP Managing Council Member)

来年夏, ISSP 第 11 回世界スポーツ心理学会がオーストラリアのシドニーで開催されます。本稿では, 次年度の大会に関するインフォメーションと国際スポーツ心理学会 (International Society of Sport Psychology:ISSP) について報告します。

ISSP 第 11 回世界スポーツ心理学会 (オーストラリア・シドニー)

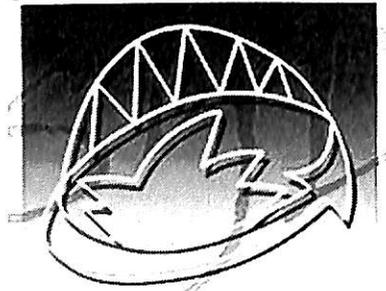
ISSP 第 11 回世界スポーツ心理学会は, 国際スポーツ心理学会 ISSP が 4 年に 1 度開催する学会です。これまでに, イタリア・ローマ (1965), アメリカ・ワシントン (1968), スペイン・マドリード (1973), チェコスロバキア・プラハ (1977), カナダ・オタワ (1981), デンマーク・コペンハーゲン (1985), シンガポール (1989), ポルトガル・リスボン (1993), イスラエル・テルアビブ (1997), ギリシャ・スキアトス (2001) と世界各地で 10 回の大会が開催されてきました。学会創立から 40 年目

の次回 ISSP 第 11 回世界スポーツ心理学会は Promoting Health & Performance for Life のテーマのもとにオーストラリアのシドニーにおいて, 2005 年 8 月 15 日から 19 日の間開催されます。

シドニーでの学会では次のようなプログラムが組まれています。まず, キーノートスピーカーには, スポーツ心理学の様々な分野を代表する著名な研究者を世界各地から招いています。予定されている研究者は Dr. Carol S. Dweck, Dr. Sandy Gordon, Dr. Brad Hatfield, Dr. Dan Landers, Dr. Franz Mechsner, Dr. Nanette Mutric, Dr. Karl Newell, Dr. Ken Ravizza です。また, 学会発表の分野については, 次のようなトピックスで募集されています。Performance Psychology, Mood & Emotion, Life-span development issues, Health & Wellbeing, Psychophysiology of sport & exercise, Social Psychology of sport & exercise, Counseling & Psychotherapy, Motor Control/Learning, Diversity Issues, Psychology of Coaching, Psychology of Officiating, Research methods/methodology 等です。

現在 (2004 年 7 月 17 日) の時点では, 学会開催のセカンド・アナウンスメントが出たところですが, 参加費用等に関する詳細はまだはっきりしていません。次会大会組織委員会のチェアーである Tony Moris によると US \$ 400 を超えることは無いだろうとのことですが, ISSP 会員にはディスカウントがありますので後述の ISSP についての情報を参考にして下さい。また, セカンド・アナウンスメ

ISSP 11th World Congress of
SPORT PSYCHOLOGY



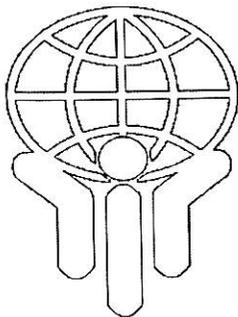
15 - 19 August 2005
SYDNEY - AUSTRALIA

ントによると Closing date for Paper Submission が 2004 年 11 月 19 日 (金)、Acceptance Notification for Paper が 2005 年 2 月 7 日 (月) となっています。より詳しい情報は <http://www.issp2005.com/> に記載される予定ですので、是非御覧下さい。また、このサイトからは資料請求のための登録等も出来ますのでご利用下さい。

国際スポーツ心理学会 (ISSP) について

国際スポーツ心理学会 (ISSP) はイタリアのアントネリ (F. Antonelli) らの提唱により、1965 年イタリアのローマにおいて第 1 回国際スポーツ心理学大会を開催したのをきっかけに設立されました。この大会に日本からは故松田岩男先生らが出席されおり、松田先生は 1973 年の第 3 回大会 (マドリッド) で理事に選出されています。その後 1981 年の第 5 回大会で藤田厚先生が理事に選出され、藤田先生はその後、副会長 (1989 年)、会長 (1993 年) を歴任され 2001 年まで ISSP の MC メンバーとして活躍されました。2001 年からは筆者が理事に選出され現在に至っています。

ISSP の活動の目的の一つは、全世界のスポーツ心理学の発展のための組織作りを促進していくことがあげられています。本分科会のメンバーの多



ISSP LOGO

くが会員となられている日本スポーツ心理学会 (JSSP, 1973 年設立) も ISSP の要請の働きかけがその発端の一つでした。1979 年の日本スポーツ心理学会大会では日本で ISSP のマネージング・カウンセルが開かれた際には当時の ISSP 会長のバネックらを迎え「国際スポーツ心理学シンポジウム」が開催されています。さらに、1988 年にはアジア・南太平洋スポーツ心理学会 (Asian South Pacific Association of Sport Psychology, ASPASP) が藤田先生を中心に立ち上げられ、初代会長に就任されました。2代目の会長は猪俣公宏先生が勤められ、現在堤義彦先生が理事を務められています。

さて、ISSP のメンバーになると幾つの特典があります。まず、年 2 回発行されるニュース・レターを受け取ることが出来ます。また、先に述べた学会大会参加費のディスカウントや、オフィシャル・ジャーナル (The International Journal of Sport and Exercise Psychology: 昨年度からオフィシャル・ジャーナルが変更になりました)・ISSP が編集する書籍 (The Handbook of Research in Sport Psychology, The Handbook on Applied Research in Exercise and Sport, The practice of Sport Psychology 等) のディスカウントがあります。ISSP のオフィシャル・ジャーナルは昨年度からドイツの出版社 Mayer Mayer が発行するものになっていますが通常 90US\$ または 90 ユーロが 70US\$ または 70 ユーロとなります。

個人会費は年収によって異なりますが日本の場合 1 年間 US\$ 40 (年収 US\$ 30,000 以上の場合) になると思います。学生会員は 1 年間 \$ 10 です。また、4 年分を 1 度に払う場合 25% ディスカウントの制度 (US\$ 160 が US\$ 120, 学生会員の場合 US\$ 40 が US\$ 30 になる) もあります。

ISSP 会員になるには専用の申し込み用紙に必要事項を記入しバンク・チェック (銀行で作ることが

出来ます)と一緒に「*Keith Henschen* University of Utah Department of Exercise and Sport Science Salt Lake City, UT 84112」に郵送するかインターネット上から申し込みを行いクレジット・カードにより支払う方法があります。詳しくはISSSPのオフィシャル・サイト <http://www.issponline.org/> を御覧下さい。

また、ISSPやASPASPと深い関係を持つ日本スポーツ心理学会(JSSP)の活動については <http://www.jssp.jp/> で御覧になれますのでこちらも是非御覧になって下さい。

ISSP 入会等に関して質問がある方は、筆者 (akihiko@hc.cc.keio.ac.jp) に直接ご連絡頂ければお答えできますのでご連絡下さい。

VII. 日本体育学会第 55 回大会案内

信州大学

2004 年 9 月 24 日～26 日

日本体育学会第55回大会（信州大学）の内容

1. プレセミナー

日 時：9月23日（木）15：00～17：00

会 場：工学部講義棟102講義室 【K102】

テーマ：少年期の運動経験がこころの発達に及ぼす影響

司 会：和田 尚（京都教育大学）

話題提供者：城後 豊（北海道教育大学）

指定討論者：山本裕二（名古屋大学） 兄井 彰（福岡教育大学）

※詳細はP.89-90を参照

2. キーノートレクチャー1

日 時：9月24日（金）13：00～13：50

会 場：工学部講義棟102講義室 【K102】

テーマ：イメージトレーニング再考

司 会：石井源信（東京工業大学）

演 者：猪俣公宏（中京大学）

※発表内容は特別寄稿1（P.7-9）を参照

3. キーノートレクチャー2

日 時：9月24日（金）14：00～14：50

会 場：工学部講義棟102講義室 【K102】

テーマ：脳科学と力学系を運動学習する

司 会：山本裕二（名古屋大学）

演 者：平田智秋（理化学研究所）

※発表内容は特別寄稿2（P.10-14）を参照

4. シンポジウム

日 時：9月25日（土）09：00～11：20

会 場：工学部講義棟102講義室 【K102】

テーマ：こころの成長・発達と身体活動 —これからの体育の課題—

司 会：阿江美恵子（東京女子体育大学） 土屋裕睦（大阪体育大学）

演 者：生田香明（大阪大学）

今 子どもの身体にどんな変化が起こっているのか
吉田伊津美（福岡教育大学）

幼児の運動能力と遊びの実際，その発達の意義
平井タカネ（奈良女子大学）

身体を通じたこころの治療，自己表現

※詳細はP.91-94を参照

5. 口頭発表

日 時：9月24日（金）09：00～11：40

9月26日（日）09：00～11：20

会 場：工学部講義棟 102 講義室 【K102】

6. ポスター発表

日 時：9月25日（土）13：00～15：00

9月26日（日）11：30～12：30

会 場：総合研究棟 6 F 学生実習室 【T601】

7. 総会

日 時：9月25日（土）11：30～12：00

会 場：工学部講義棟 102 講義室 【K102】

8. 理事会

日 時：9月24日（金）11：50～12：50

会 場：工学部講義棟 102 講義室 【K102】

プレセミナーの開催

本専門分科会は、分科会活動の活性化に向けて積極的に取り組んでいるところです。このたび、その一環として、日本体育学会第55回大会（信州大学）の前日に、分科会主催のプレセミナーを開催することとなりました。多数のご参加をお待ち申し上げます。

テーマ「少年期の運動経験がこころの発達に及ぼす影響」

趣旨：昨今、長崎での同級生殺人事件のような、児童による理解し難い痛ましい事件が多発しています。私たち「体育」という教育の一端を担っている者にとって、児童の「こころと身体」の発達の歪みが、その想像の域をはるかに越えたものであることと、いかに「生の児童」を観ていなかったかを痛烈に感じさせる事件でした。今後も、このような事件が起きるのでしょうか。

先の指導要領の改正では「体育（運動）の機能を見直す」ということで、心と体を一体ととらえ、「体ほぐしの運動」が位置づけられました。そして、こころの発達に必要な運動経験を明らかにし、体育授業でどのような教材をどの発達段階で用いるのか、またどのような教材開発が必要なのかが、現場で論じられていますが、現実の問題は何なのでしょうか。

このようなときこそ、私たちは教育の現場を直視し、児童の「こころと身体」の発達に「体育（運動経験）」が及ぼす影響を、体育科教育の現場的事象から再考することで、体育（運動）の心理的機能を見直すことが必要だという気持ちから、下記のセミナーを企画しました。

文責：企画委員会 荒木雅信

<講師紹介>

城後 豊（じょうご・ゆたか） 北海道教育大学札幌校授業基礎開発系教育実践専攻 教授

- ・学長特別補佐・冬季スポーツ教育研究センター長兼任
- ・日本スポーツ方法学会理事長、日本体育学会評議員・編集委員・体育方法専門分科会世話人
- ・研究テーマ（授業論・指導論を中心に）
 - 保健体育に関する授業研究・授業分析
 - 野外教育における教育プログラムの開発及び教材開発
 - 水泳の史実的考察と指導プログラムの開発及び教材開発
- ・研究内容

保健体育の授業に関わる教材解釈の視座を明らかにし、その内容と構想をもとに授業の科学化を展開している。主に、教材を生活・文化・地域のプログラム内容から開発を試み、実践を通して指導法の改善改革を進めている。いわゆる授業研究や授業分析の実践的研究である。特に、運動やスポーツの文化的な価値を史実的に捉え、技能思考と活動思考の二説の総合補完機能を授業で明らかにする。具体的には、考えて上手くなる「できてわかる授業」の分析的研究である。

また自然体験学習のプログラム開発や「水と人間」をテーマとした自然体験型の授業内容や授業システムの開発を志向している。主に、地域自然のフィールドを教材化したり、史実的な運動・スポーツのルーツを明らかにし、教材内容や学習指導過程の段階的指導法を開発している。また、運動・スポーツのウェルネス的な効果的指導法を実践化している。

少年期の運動経験がこころの発達に及ぼす影響 — 体育授業のあり方を求めて —

城後 豊 (北海道教育大学札幌校)

【授業研究・研究授業・授業分析・教育実践】

少年期は、児童中期から前青年期の期間であろうが、一般的には児童期に当たる男子を指している。ここでは小学校や中学校の就学する児童生徒としてとらえる。この期の子どもたちは自己中心的な未分化から脱して客観的な認識や思考ができるようになり、あらゆる事象に興味・関心を持つ時期といわれている。いわゆる、こころも体も変化する「思春期」を迎える時期でもある。この時期の特徴として、例えば、①知識習得が旺盛。②仲間関係も活発になり集団への忠誠心が生じる。③組織的集団をつくり、ルールのあるゲームを楽しむ。④身体活動は敏捷で柔軟である。⑤男女間は表面的に反発的であるが必ずしもそうではない。など、学習するには最も適した時期であり、とりわけ、身体活動の伴う体育・スポーツに関わる教育的な学習環境を整えれば、大きな学習成果をあげることができる。その中心となる教科体育の研究対象として「授業」に着目することができる。そこでは、心と体を一体としてとらえる観点から「よい授業とは、何か」あるいは「できてわかる授業とは、何か」などの手がかりをつかむ教育実践に取り組んでいる。

これらの教育実践では、教科学習の授業改善として「何を、いつ、どこで、学ぶのか」を課題とした「学習の適時性」を考究している。その授業研究では、教材と子どもたちを対象とした「学習者のレディネスの研究」や、主体的な学習を進めるための「学習課題の最適化」を図る効果的な授業スタイルなどが検討される。また、学校や研究諸団体が組織的に取り組む研究授業がある。そこでは実験的授業より、むしろ日常の教育計画に基づく実践的な授業の効果や指導法について検討され、授業の一般化・普遍化を問うことが多い。特に「授業の技術」や「学習の条件」など、学習指導のあり方や成果を求めている。

さらに、授業では、効果的な学習を進めていくための「授業評価のあり方」が問題になる。その授業では限られた時間の中でカリキュラムを消化するのではなく、確実な評価による「授業の妥当性」の分析が要求される。いわゆる「よい授業」を進めるための測定・評価による客観的な授業分析が不可欠であり、実践研究の要件になっている。

そこで、本プレセミナーでは、保健体育科教育あるいは学校体育の中心となる「体育の授業」に着目し、体育科教育の今日的課題である教育実践による「授業のあり方・進め方」について若干の報告をする。具体的には、児童生徒たちの心と体を一体としてとらえる授業の中から「泳ぎ」の教材解釈と授業研究、「基本の運動やゲーム」の基礎基本的な内容と研究授業、「生活・自然体験学習」による学習指導の分析などについて紹介する。

その事例的な教育実践の再考の視点は、次の通りである。

- (1) 各運動・スポーツの「教材解釈と学習の効果」
- (2) 基礎基本としての「学習内容の適時とその指導」
- (3) 生活・自然体験学習による「知覚的な学習とその指導」

シンポジウム 発表抄録

体育心理学専門分科会 シンポジウム

こころの成長・発達と身体活動 —これからの体育の課題—

司会 阿江 美恵子（東京女子体育大学）
土屋 裕睦（大阪体育大学）

1. はじめに

人間の心の発達で重要なことは他者との関係の中で自分の心を理解することである。これは集団社会行動を特性とする人間が身につけなければならない重要な認識である。

つまり身体教育の場である集団は、社会性の発達を促すトレーニングの場である。集団での位置の認識（優位劣位）、対人コミュニケーション術、「目には目」を知る攻撃性、向社会的行動（援助）は大人の必須アイテムと言ってよいであろう。子どもを社会の場に直面させるために、身体活動は最適内容である。なぜなら身体活動は子どもの基本的欲求であり、他者の行動を目で確認することができ、身体の優劣を認識することができるからである。このように優れた材料である身体活動が現代の子どもの生活から減少することが指摘されて久しい。

2. 子どもの身体感覚

科学の発達は私たちの生活を豊かにしたが、人間という生物の基本的な行動特性はそう簡単に変えることができない。しかし、身体という入れ物を持った人間は、近年、生きとし生けるものであることに目をつぶろうとしているかのようである。食べる、排泄する、汗をかく、体臭がある、太る、痩せる、痛い、痒いなど、毎日の生活の中で繰り返して自分の生理的な変化に接することで、自分の身体とのつきあい方を学ぶはずであるが、この部分でちょっとした異変が起きているのである。学校でトイレにいけない子どもの増加や、ハエや蚊を怖がる、動物に触れない、泥まみれになれない子ども、また極端な清潔好きは、平和共存してきた微生物との関係を壊してしまっている。入れ物である身体意識の希薄さは、自分の身体を傷つけることでしか自分を実感できないという社会病理も生む。

そのような子どもの生育環境で子どもの身体に何が起り、それがどのように心に影響しているのだろうか。体育・スポーツはどこに焦点を当てれば子どもの発達に寄与することができるのだろうか。そして、心理学の研究はそれに何か答えを出すことができるのだろうか。

3. シンポジウムのテーマ

身体を動かすことで私たちは何を知りなのか、ということを確認することはそれほど簡単なことではない。実は心は私たち自身をだますのである。大人になればなるほど私たちはだまされていると言えなくもない。何とかだまされないためには、客観的なデータと関連する事象との整合性を探るしかない。

このシンポジウムでは、心の発達と連動する身体活動に焦点をあて、子どもの動作、子どもの身体活動環境、社会とのつながりを失った身体、という3つの観点から3人のシンポジストに身体活動に関わるデータの紹介をして頂く。身体活動が心に与える影響について改めて考え、身体活動の意義を議論していきたい。

4. シンポジストの発表内容

3人のシンポジストには以下のテーマを中心にまとめて頂いた。

生田氏（大阪大学）には、小学生の指が地面に十分接していないという調査結果を議論の出発点にして、このような身体の変化を生み出す環境について理解を深め、体育の重要性、とりわけこころの発達に与える影響などについて、触れていただく。少し前の日本人はどっしりと腰が座っていたのに、踏ん張れないことがどのような身体の変化を生み出すのか、また、身体の軸のさだまらない子どもに社会生活上の問題が生じていないかを論じて頂く。

吉田氏（福岡教育大学）には、全国の幼稚園で測定された幼児の運動能力テストの結果と幼児の運動環境についてデータを示していただき、現代の子どもの身体能力についての問題点を指摘して頂く。さらに、教育環境として幼稚園を考えて、幼児の発達について論じて頂き、心への影響を考えたい。

平井氏（元奈良女子大学）には、ダンスセラピーを通して、身体認識の獲得の様子を紹介して頂き、身体活動の発展とともにどのような心理的な変化が生じるか、そこから身体と心との密接な関わりを議論して頂く。

以上の内容から、体育が心の発達へどのように関われるかを議論したい。

今 子どもの身体にどんな変化が起こっているのか

生田香明 (大阪大学健康体育部)

1. 緒言

今から40年程前の1965(昭和40)年頃に、青少年の「背筋力が落ちた」「持久力が落ちた」と社会で大きな話題となった。これが子どもの「体」と「心」の健康問題が深刻になっていく発端となった。その10年後の1975(昭和50)年頃に「無気力」「無感動」「無関心」の子どもが目立ち始めたのである。そして、それらは解消されるどころか、不登校やひきこもりの子どもを増やす根底になった。さらに、その5年後の1980(昭和55)年頃に小学生の跳・投能力の低下が始まり、一方で「非行」「家庭内暴力」「校内暴力」が頻発するようになって、子どもが荒れてきたのである。同時に、小・中学校で不登校児が急増した。これによって、非行や暴力をふるうなど反抗的で落ち着きが無い子どもが増加するとともに、不登校やひきこもりなど無表情で元気がない子どもが増加して、子どもの二極化が進行した。なぜ、子どもがこのように変わってきたのか。

本研究は、この40年間に子どもの「体」の発達に異変が起きたことをこれまでに得られた客観的データで明らかにするとともに、それを起こさせた要因の分析を行うことによって、それが「心」の健康に深刻な影響を与えていることを明らかにすることを目的とした。

2. 実験方法

被験者は大阪府下の同じ幼稚園の5歳男女53名。および小学校3校の6歳から11歳の男児152名と女児185名であった。幼児においては、竹井機器社製の透明ガラス板フォースプレートの下にビデオカメラを設置して30秒間の安静直立姿勢時の足裏を撮影し、足趾(指)の接地状態を調べた。この測定は1年後に6歳になった同時期にも行われた。児童においては、Rsscan社製のfootscan足底圧計測システムを用いて安静直立姿勢時の足圧中心(重心)位置(踵を基準にして爪先までの割合)と足圧分布を測定した。

3. 実験結果

- 1) 幼児の安静直立姿勢における足趾(指)の接地状態: 5歳の時に測定された結果は、53名のうち54.7%が十本の足趾のいずれか(最も多かったのは第五趾で、次いで第二趾、第一趾の順であった)が、床に接していなかった。そして、彼らが1年後の6歳児になってもそれがほとんど改善されなかった。
- 2) 児童の安静直立姿勢における足圧中心(重心)位置と足圧分布: 6歳児から11歳児までの重心位置は、男子では踵から35.8%(1年生)から39.4%(3年生)までの

範囲にあり、学年があがるにつれて重心が前方に移る傾向は見られなかった。また、女子でも男子と同様に学年があがるにつれて重心が前に移る傾向は見られなかった。足圧分布を見ると、男女共いずれの学年においても、体重の多くが踵にかかっているものが多数見られた。

4. 考察と結論

本研究の結果は、最近の幼児・児童は、直立姿勢で腰や膝の関節が伸びきらず重心が後ろへずれ、足趾(指)が床を加圧しにくかったり、床から浮きやすくなっており、足の構造と機能の発達に異変が起きていることを示している。

足は、体の中で最も複雑な力学的構造をもち、人間が立つ、歩く、走る動作を合理的に行えるように出来ている。人間はこれらの動作を生後1~2年で獲得し、3~5歳でそれらの能力を飛躍的に発達させる。その発達の過程で3~4歳の幼児は休む暇がない程走り回って遊ぶ特徴をもっている。それは足の構造と機能の発達の基礎づくりに欠かせない。

また、それらの動作は単純な全身動作であるが、非常に多くの筋肉を使い、さらに多くの感覚器から姿勢調節と運動修正に必要な情報を収集・分析するために大脳の働きを必要とする。これは大脳皮質の運動野と感覚野の急激な発達を促し、それが8歳前後に巧みな全身動作が最もよく発達する基盤になる。その発達には、前頭前野の発達が関係し、それは全身運動を繰り返すことによって前頭前野に巧みな全身動作を行うための時間的、空間的パターンが形成されて適切な行動プログラムが作られるからである。前頭前野は他にも集中力・忍耐力などの重要な働きを担っている。しかしながら、集団で走り回って遊ぶ生活環境や身体活動を奪われた幼児・児童は、足の構造と機能の発達に異変を起こしているだけでなく、大脳皮質の運動野と感覚野にとどまらず前頭前野まで発達不足を起こしているのである。さらに、彼らは夜更かしの蔓延や陽光下の戸外での身体活動不足などが情動脳の視床下部にある生体リズムを調節する視交叉上核の神経細胞の働きを低下させ、彼らのエネルギー発動や意欲を低下させているのである。

結論として、最近の幼児・児童は、集団で走り回って遊ぶ生活環境や身体活動が奪われたために体の発達が阻害され、それが大脳の多くの機能の発達不足を招いて、心の発達が阻害されて深刻な社会問題を引き起こしているのである。

幼児の運動能力と遊びの実際、その発達の意義

吉田 伊津美 (福岡教育大学)

1. 最近の幼児の運動能力

幼児の運動能力検査(東京教育大学体育心理学研究室作成)は、1966年よりほぼ10年間隔で行なわれてきた(松田ら 1975, 近藤ら 1987 など)。これによると、1986年をピークに1997年では男女児とも全ての年齢で顕著な低下が見られた。そして、その後初めて5年振りに行なわれた2002年においては、前回と比べて大きな変化はなく、最近の幼児の運動能力は依然として低い水準であるといえる(森ら 2003, 杉原ら 2004 など)。

この運動能力低下の背景には、遊びの変容、すなわち運動遊びの減少や質的な低下が考えられる。また、子どもをとりまく物理的な環境や心理社会的な環境が子どもの遊びにも影響を及ぼしており、これらの要因が運動能力の発達と関わっているとされている。

2. 家庭環境と運動能力

家庭環境では、住宅形態(一戸建て>集合住宅:運動能力の高低を示す。以下同様)や集合住宅住居階層(低層階>高層階)などの住居の他、家庭にある遊具の数(多い>普通>少ない)や近所の遊び場(安心して外遊びさせる場所がある>ない)によっても幼児の運動能力に差が見られ、いずれも運動能力の高い群が、運動遊びの機会、戸外遊びの時間や頻度が多くなっている。また、きょうだい(3人以上>2人>1人)、家族構成(3世代以上>核家族)、よく遊ぶ友達の数(3人以上>2~3人>1人)によっても運動能力に違いが見られ、大人も子どもも含めて関わる周囲の人の数が多い環境であるほど、運動遊びの機会や頻度も多い。さらに、将来子どもをスポーツ選手にさせたいと思っている親ほど子どもの運動能力は高く、住宅形態や遊び場などの家庭における物理的環境や親の期待、きょうだいなどの心理社会的環境が、幼児の運動遊びの機会を介して運動能力の発達に影響していると考えられる(吉田ら 2004a)。

3. 保育形態と運動能力

運動能力の発達は、直接的には運動経験が関係している。そのため、運動する機会の多い方が運動能力は高くなると考えられる。しかし、園での保育活動と運動能力との関係では、保育の一環として運動を多く取り入れているよりも、まったく行っていない園の方が運動能力は高く、また、保育形態が一斉保育の方が自由保育に比べて保育の中に運動を多く取り入れているものの、自由保育の方が運動能力が高いことが報告されている(吉田ら 2004b)。これらのことは一見矛盾しているようであるが、実際はその内容に問題があると考えられる。すなわち、運動指導の場や一斉保育では、クラス等での全体での統一した活動が中心となる。その指導では、説明したり、順番を待ったり、クラス全体としては活動してい

るようではあるが、個人としては実際の活動や運動量がそれ程多くないことが考えられる。これに対し、特に運動指導を取り入れていない自由保育を中心とした園は、子どもの自由な活動の中で、存分に体を動かす機会が確保され、運動能力の発達にも貢献していることが考えられる。

4. 保育者の特性と運動能力

一斉に同じことを同じ方法で行なう一斉保育に対し、子どもの自由な活動を尊重するという理念に基づく自由保育では、保育者の存在は大きく、担任の特性により幼児の運動能力に差が見られる。すなわち、担任保育者が女性よりも男性の方が、過去の運動経験がより長い方が、運動が得意であると思っている方が、そうでない担任のクラスよりも幼児の運動能力が高かった(吉田ら 未発表)。子どもは保育者が一緒になって遊んだり、動いたりすることでよりその活動を増幅させて行なう。したがって、これらの特性をもつ保育者は、より活発に活動的に保育を行なっていることが考えられ、保育者のこのような特性が幼児の運動能力に影響を与えているといえる。

5. 幼児の運動遊びと自己概念

運動遊びを普段多くしている子どもは、運動遊びに対する有能感を高く持つようになり、高い運動有能感を持つ子どもは、身体を活発に動かしいろいろな遊びに主体的・積極的に取り組むだけでなく、自己主張ができたり、向社会的行動が高いなど日常場面においてもポジティブな行動傾向にあるという関係が示されている(吉田・杉原 2002)。すなわち、幼児期においては、運動遊びなどの直接体験する行動と自己概念の形成とは密接な関係があり、運動遊びが身体面や運動面の発達のみでなく、自己概念の発達にも影響を及ぼしている。保育形態によって運動量が異なる可能性があり、一斉保育では自由保育に比べて運動能力が低い傾向にあることを述べたが、その影響は運動発達だけの問題にとどまらない。一斉保育では指導の効率という保育者から、指導者中心の活動を「〇〇遊び」と称して全体で行なっていることがほとんどである。しかし、その活動が子どもにとっては「遊び」となっていない場合が少なからず見られる。活動のみを与えられて、無理やりやらされた、嫌々やらされた、競争や上手下手を強調されたことにより、運動が嫌いになったり、無力感を形成してしまうことがある。そうになると、運動遊びに回避的になり、ますます運動の機会を失い、運動発達が促されなくなるだけでなく、自己概念の発達への影響も危惧されるのである。

付記：文部科学省科学研究費(基盤研究B:課題番号 14380013)による研究の一部を含む

身体を通じたこころの治療、自己表現

平井タカネ（元奈良女子大学）

1. はじめに

自家用車の普及をはじめ交通機関の発達や食生活の変化など、さまざまな生活様式の変化や人生観・価値観の変化に伴い、私たちの身体と精神の在りようが変わってきていることは確かといえよう。なかでも子どもたちの身体的変化は著しく、1979年と1990年の日本体育大学正木教授らによる「子どものからだの調査」結果をはじめとする幼児や児童生徒の「からだがおかしい」という多くの報告は、教育現場に強い衝撃を与えた。それから約20年を過ぎた今日、それは「からだのおかしさ」とどまらず、子どもたちのこころにも深い影響を与えていることを認識せざるを得ないといえよう。

体育という身体や身体活動に直接関わる私たちは、今日の子どもたちの日常に見られる「こころ」に関する問題や課題が、「こころの教育、こころのケア」という言葉を声高に強調することでは必ずしも充分でないことを直感しているのではないだろうか。すなわち、子どもたちの身体と身体活動をこそ通してようやく解決の糸口を見出す可能性がみえるのではないかという思いなのである。

筆者の体験に子どもの症例は多くないが、いくらかの事例報告を通して、これからの体育の課題と展望について参加者とともに考えたいと思う。

2. 身体の近接、ふれあい

体育の場が他の教科活動と最も異なるのは、身体の近接やふれあいが多くことであろう。それが闘争・競争的あるいは協同・親和的であっても、創り出される身体関係が自己への挑戦、相互の許容性、直接的でダイナミックで非日常的なコミュニケーション性などを含んでいることを重視し、(遊戯)療法的に活用することが可能である。

3. イメージと「こころ」の表現

イメージする力は、現実の時空間を超えて新しい世界を目前に繰り広げてくれる。この想像された創造空間に心身を遊ばせるとき、日常生活で抑圧している「想いや感情」がふと流れ出す。その意味への気づきが、自己発見と成長を促す契機となる可能性を含む。

4. ユーモアと笑い

リズム運動やダンス、特に日本の盆踊りなどの輪踊りは老若男女が自由な形で輪を作って踊られる。手振り身振りの所作の上手下手はほとんど問題にされない。むしろ動作を間違える、隣の人の足を踏むなどの間違いや失敗が、笑いと共に許容される世界である。人は一つの輪を構成する存在であることに心地よさと充実感を覚えるのである。また、鬼遊びなどのゲームもスポーツ運動ほど勝敗が重要視されることがなく、心地よい緊迫感を伴う笑いが弾ける、解放間のある楽しい時空間といえよう。

5. 身体の機能快とカタルシス

スポーツやゲーム、そしてダンスやリズム表現は日常生活の規則や制約とは異なるルールで進行する。それは、日常の関係性と日常の心身を解き放つ力を持つといえる。精一杯のスポーツやリズム運動を通して、子どもたちは伸びようとする身体的機能快を満喫し、心身の浄化を通して人間社会における自己と他者存在を肯定し成長するのではないだろうか。

VIII. 事務局報告

事務局報告

平成 15 年度事業報告（平成 14 年総会～平成 15 年総会）

1. 日本体育学会第 54 回大会体育心理学専門分科会関係（於：熊本大学）

1) 一般研究発表

口頭発表（C301, E107, 法文 B2, 法文 B3）およびポスター発表（E301）

日時：平成 15 年 9 月 26 日（金）～ 28 日（日）

発表数：平成 15 年度 56 題（口頭発表 20 題；ポスター発表 36 題）

（備考：平成 9 年度 52 題；平成 10 年度 46 題；平成 11 年度 54 題

平成 12 年度 44 題；平成 13 年度 49 題；平成 14 年度 45 題）

2) キーノート・レクチャー

<その 1>

日 時：15 年 9 月 26 日（金）13:00～13:50

会 場：熊本大学（法文 B1）

テーマ：「体育・スポーツ心理学研究と UK 法」

演 者：船越正康（大阪教育大学）

司 会：杉原 隆（東京学芸大学）

<その 2>

日 時：15 年 9 月 26 日（金）14:00～14:50

会 場：熊本大学（法文 B1）

テーマ：「子どもにおける身体活動増強のための行動科学的アプローチ」

演 者：上地広昭（早稲田大学）

司 会：堤 俊彦（近畿福祉大学）

3) シンポジウム

日 時：15 年 9 月 27 日（土）09:00～11:20

会 場：熊本大学（法文 B1）

テーマ：「スポーツとコミュニケーション

—身体とことばをつなぐスキルトレーニング—

司 会：橋本公雄（九州大学）

演 者：吉澤洋二（名古屋経済大学）

スポーツ活動におけるコミュニケーションと指導者の役割

柳 敏晴（鹿屋体育大学）

野外教育におけるコミュニケーションスキルの獲得

杉山佳生（九州大学）

体育・スポーツにおけるコミュニケーションスキル

4) 総会

日 時：15年9月27日（土）11：30～12：00

会 場：熊本大学（法文B1）

総会次第：

開会の辞	事務局代表（西田 保）
会長挨拶	杉原 隆
議長の選出	杉山佳生氏（九州大学）を選出
報告事項	

①平成15年度事業活動報告について

- ・日本体育学会第54回大会（於：熊本大学）の開催
- ・体育心理学専門分科会会報の発行

第15号（通巻第43号）を8月20日付で発行、640名の会員に配布

②役員を選出結果について

平成15年2月21日締切での投票結果、会長1名および理事12名が決定された。

③理事会の開催について

平成15年9月26日に理事会が開催され、総会での審議事項について検討された。

④その他

審議事項

①役員を選出について（追認）・・・資料1

平成14年の総会で、平成15年2月頃に役員選挙を実施し4月からは新体制でスタートすることが承認されていた。これを受け、今年の総会において役員を選出が追認された。任期は、平成15年4月1日より2年間である。

②平成15年度決算及び平成16年度予算案について・・・資料2

事務局会計担当より決算報告がなされ、監事から決算書が適正であるとの監査報告があった。また、予算案について資料に基づき説明があり、いずれも異議なく了承された。

③平成16年度の事業計画について

- ・日本体育学会第55回大会（平成16年）について
- 信州大学にて開催予定で、一般研究発表（口頭・ポスター）、キー

ノート・レクチャー，シンポジウム，総会，理事会などを企画することが承認された。

- ・ 体育心理学専門分科会「会報」第16号（通巻44号）の発行
 広報委員会で編集方針などを検討することが承認された。

④日本体育学会学会大会のあり方について

学会本部から各専門分科会に問合せのある検討事項（事前審査制度を廃止する，発表申込の締切を遅くする，共通テーマの合同シンポジウムを多くする）ことについて議論され，学会本部の意向を尊重することとなった。しかしながら，学会大会の隔年開催については意見の一致は見られなかった。

⑤その他

閉会の辞

2. 理事会の開催

日本体育学会第54回大会期間中に，熊本大学にて理事会が開催された。議事録は以下の通りである。

<平成15年度体育心理学専門分科会第1回理事会議事録>

日 時：平成15年9月26日（金） 午前11時45分～午後0時50分

場 所：熊本大学 大学教育研究センター C309

出席者：杉原会長，西田理事長，阿江，荒木，岡沢，工藤，鈴木，竹之内，土屋，
 橋本，山本，和田の各理事

欠席者：竹中理事

審議に先立ち杉原会長から挨拶があった。

<審議事項>

1. 総会司会および議長の選出について

西田理事長より，総会司会については事務局として西田理事長が，また議長には杉山佳生氏（九州大学）に依頼するという提案があり，審議の結果承認した。

2. 総会議題について

2.1 報告事項

西田理事長より総会資料案に基づき，1)平成15年度事業報告として日本体育学会第54回大会の開催についておよび体育心理学専門分科会会報の発行について，2)役員選出結果について平成15年4月1日から2年間の会長・理事の選出結果と委

員会の担当について、また3) 理事会の開催について報告事項案が提案され、これを承認した。

2.2 審議事項

1) 役員の選出について

西田理事長より、平成15年4月1日より2年間の役員を追認してもらうことを審議事項とすることが提案され了承した。

2) 平成15年度決算および平成16年度予算案について

山本庶務会計理事より、資料に基づき説明があり審議された。来年度以降の予算案については、予備費の使い道について意見が出され、学会大会への外部講師の招聘などについて企画委員会や学会大会委員会において今後検討することとした。

3) 平成16年度事業計画について

a) 日本体育学会第55回大会（平成16年）について

西田理事長から、第55回大会は信州大学（長野市）で平成16年9月24日から26日までの日程で開催されることが報告され、例年通り口頭発表、ポスター発表、キーノートレクチャー、シンポジウムを開催する予定であることが提案された。これに関して阿江学会大会委員会委員長より、できるだけ早い時期に内容を決定したいが、スポーツ心理学会の企画等との関係でいま検討中であり、意見・提案があれば出してほしい旨報告があった。シンポジウムに関しては近接領域との合同開催が望ましいとの意見が出された。また口頭発表に関しては今後全てポスター発表に移行する方がいいのではという意見も出された。またこれに関連して、荒木企画委員会委員長から、企画委員会の職務範囲が不明確であるという意見が出され、種々議論の結果、研修会の開催や学会前後の企画も含め学会大会委員会とも連携をはかりながら、今後専門分科会の活性化をはかる方向で検討することとなった。

b) 体育心理学専門分科会「会報」第16号の発行について

和田広報委員会委員長から、第15号の発行経過が説明され、第16号では口頭発表の座長報告を削除し、口頭発表、ポスター発表とも傍聴記のみとすることが提案され了承された。また今後特集を組み外部に執筆者を依頼することも念頭に置いて会報の企画、依頼を広報委員会の方で進めることが提案され承認された。これに合わせて、製本、発送等の業務はこれまで通り事務局で行うことが了承された。

3. 日本体育学会学会大会のあり方について

西田理事長から、日本体育学会学会大会の今後のあり方について学会本部から各

専門分科会に問い合わせが来ていることが紹介された。具体的には事前審査制度を廃止する、演題締め切り日を遅くする、共通テーマのシンポジウムを増やすことについて議論され、これらを了承した。しかしながら、学会本部で検討されている隔年開催といった方法には意見の一致は見られなかった。

議長：西田理事長，議事録：山本理事

3. 体育心理学専門分科会会報第15号（通巻第43号）の発行

平成15年8月20日付で発行し、640名の会員に配布した。

4. その他の事務局業務

平成15年度の主要な事務局業務として、以下の事項を遂行した。

- (1) 日本体育学会第54回大会専門分科会関連（於：熊本大学）
 - ・第54回大会専門分科会連絡会議への出席（H14.10）
 - ・学会プログラムに関して学会大会委員会と意見交換（H15.4-9）
 - ・発表総数56題（口頭発表20題；ポスター発表36題）のプログラム作成と座長の推薦，当番大学への通知（H15.6）
 - ・第55回大会専門分科会連絡会議への出席（H15.9）
- (2) 日本体育学会専門分科会活動報告の作成と本部への報告（H15.4）
- (3) 新体制について各委員会理事と意見交換など（H15.4-9）
- (4) 会報第15号（通巻第43号）の原稿依頼，編集業務および送付（H15.4-8）
- (5) 日本体育学会関連業務

速 報

1. 日本体育学会の役員選出について

体育心理学専門分科会選出の代議員選挙（平成17年4月1日から2年間の任期）を、平成16年4月23日の締切で実施し（投票率：13.0%）、得票順に学会本部に報告しました。

2. 体育心理学専門分科会役員選挙結果について

体育心理学専門分科会会則にしたがい役員選挙（平成16年4月23日締切）を行いました。開票結果は以下の通りです（敬称略、得票順）。平成16年度の専門分科会総会で承認を受け決定します。任期は平成17年4月1日から平成19年3月31日となります。

◎有効投票数 85 票（投票率：13.3%）

<会長> 杉原 隆

<理事> 西田 保，中込四郎，工藤孝幾，石井源信，阿江美恵子，
岡沢祥訓，伊藤政展，山本裕二，橋本公雄，伊藤豊彦

平成 15 年度決算報告

(自 平成 14 年度総会 至 平成 15 年度総会)

<資料 1 >

○収支決算書

款	予算	決算	差額
収入の部			
当期収入合計 (A)	730,001	164,539	565,462
前期繰越収支差額	1,109,450	1,109,450	0
収入合計 (B)	1,839,451	1,273,989	565,462
支出の部			
当期支出合計 (C)	1,839,451	882,644	956,807
次期繰越収支差額 (B)-(C)	0	391,345	△ 391,345
支出合計	1,839,451	1,273,989	565,462

○収入の部

款	予算	決算	差額	説明
・前年度繰越金	1,109,450	1,109,450	0	
・年会費	600,000	32,000	568,000	1千円×608名
・郵便貯金(利息)	1	39	△ 38	※会員数642
・体育学会専門分科会補助金	130,000	132,500	△ 2,500	(納入率94.7%)
○収入合計 (B)	1,839,451	1,273,989	565,462	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	説明
・分科会会報関連費用	小計	450,000	578,981	△ 128,981	
	印刷費		304,521		700部印刷
	郵送料		90,560		638部発送*
	発送作業代		18,900		
	原稿料(特別寄稿)		10,000		1.0万×1名
	原稿料(研究室紹介)		10,000		0.5万×2名
	原稿料(学位論文紹介)		20,000		0.5万×4名
	原稿料(学会報告等)		75,000		0.5万×15名
・シンポジウム等関連経費	小計	250,000	140,295	109,705	
	謝礼(講師)		100,295		
	謝礼(傍聴記会報寄稿者)		40,000		0.5万×8名
	専門分科会懇親会補助		0		開催なし
・事務局事務費	文具、コピー、発送業務・資料整理等	100,000	92,818	7,182	
・通信費	会員・評議員連絡費	100,000	70,550	29,450	
・当期支出合計 (C)		900,000	882,644	17,356	
・予備費 (B)-(C)		939,451	391,345	548,106	収入ー支出
○支出合計		1,839,451	1,273,989	565,462	

△は超過

会員数昨年度641名から1名増

*会員642名のうち住所不明者2名、事務局3を除く+非会員1名

平成15年9月6日

監事 寺田 邦昭

この決算書は適正であることを認めます。

石垣 尚男

平成 16 年度予算案

(自 平成 15 年度総会 至 平成 16 年度総会)

<資料 2 >

○収入の部

款		前年度決算	予算案	差額	説明
・前年度繰越金		1,109,450	391,345	718,105	前年予備費から
・年会費		32,000	600,000	△ 568,000	1千円×600名
・郵便貯金(利息)		39	1	38	
・体育学会専門分科会補助金		132,500	130,000	2,500	
・当期収入合計(A)		164,539	730,001	△ 565,462	
○収入合計(B)		1,273,989	1,121,346	152,643	

○支出の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・分科会会報関連費用	印刷費、郵送料、会報作成補助費等	578,981	450,000	128,981	
・シンポジウム等関連経費	小計 謝礼(学会講師、司会、会報原稿協力者等) 専門分科会懇親会補助 シンポジウム打ち合わせ補助等	140,295	250,000	△ 109,705	
・事務局事務費	文具、印刷費、発送業務・資料整理等	92,818	100,000	△ 7,182	
・通信費	会員・分科会役員連絡費等	70,550	100,000	△ 29,450	
・当期支出合計(C)		882,644	900,000	△ 17,356	
・予備費(B)-(C)		391,345	221,346	169,999	収入-支出
○支出合計		1,273,989	1,121,346	152,643	

△超過

編集後記

会報第16号(通巻第44号)を会員のみなさまにお送りいたします。昨年度から広報委員会が内容の検討と執筆者の依頼をすることになり、少し内容を変更しました。具体的には、「特別寄稿」をキーノートレクチャーの演者に依頼すること、「口頭発表の座長報告」をなくしたことなどです。また本号からは第10回を契機に「研究室の紹介：研究室めぐり」を取りやめ、次号から「大学院紹介」を新たに企画しています。会報のあり方については、会員のみなさまのご意向をふまえ検討を加えることが大切です。忌憚のないご意見をお寄せいただきますようお願いいたします。

最後に、お忙しい中原稿の執筆をお引き受けいただきました先生方に対し、心よりお礼申し上げますとともに、発行にあたりご尽力いただきました事務局の先生方に感謝申し上げます。

広報委員会 和田 尚

日本体育学会体育心理学専門分科会会報 第16号(通巻第44号)

発行 平成16年8月10日 発行(非売品)
発行責任者 西田 保(代表)・山本裕二・竹之内隆志
発行所 日本体育学会体育心理学専門分科会事務局
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学総合保健体育科学センター 西田研究室内
TEL:052-789-3952 FAX:052-789-3957
印刷 名古屋大学消費生活協同組合 印刷部
TEL:052-781-6698 FAX:052-781-2177
